岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第528集

八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

2008

国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に関連して、平成19年度に発掘調査された宮古市八木沢Ⅱ遺跡及び八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八木沢Ⅱ遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居跡や貯蔵穴からなる集落跡、古代の集落跡などが検出され、八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡では、縄文時代と推測される陥し穴状遺構が検出されました。中でも八木沢Ⅱ遺跡では、時代によって集落の立地が異なることが判明しており、当該期における自然環境や生業と集落の立地との係わりについて考えるうえで貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成20年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　武　田　牧　雄

例　　言

1　本報告書は岩手県宮古市大字八木沢第３地割字中村129ほかに所在する八木沢Ⅱ遺跡、岩手県宮古市大字八木沢第８地割字駒込７－１ほかに所在する八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡台帳に登録される八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

　　八木沢Ⅱ遺跡　　：遺跡番号　ＬＧ43－0205、遺跡略号　ＹＧＳⅡ－07

　　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡：遺跡番号　ＬＧ43－0279、遺跡略号　ＹＧＳＲＩ－07

4　発掘調査の調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

　　八木沢Ⅱ遺跡

　　調査面積：7,500㎡、調査期間：平成19年４月12日～８月10日

　　調査担当者：阿部勝則・八重畑ちか子・横井猛志

　　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡

　　調査面積：700㎡、調査期間：平成19年10月９日～10月25日

　　調査担当者：阿部勝則・八重畑ちか子

5　室内整理の整理期間、整理担当者は次のとおりである。

　　八木沢Ⅱ遺跡

　　整理期間：平成19年11月１日～平成20年３月31日、整理担当者：阿部勝則・八重畑ちか子

　　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡

　　整理期間：平成19年12月３日～12月14日、整理担当者：阿部勝則・八重畑ちか子

6　野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては次の機関に委託した。

　　基準点測量：釜石測量設計株式会社。航空写真撮影：東邦航空株式会社。

7　遺物の分析・鑑定にあたっては次の機関に委託した。

　　石材鑑定：花崗岩研究会（代表矢内桂三）。炭化材樹種鑑定：岩手県木炭協会。

　　炭化材の年代測定と樹種同定・種実遺体の同定：パリノ・サーヴェイ株式会社。

8　発掘・整理・報告にあたっては次の方々にご指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。

　　斉藤邦雄・佐藤嘉広・菅　常久　櫻井友梓（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課）、竹下將男・高橋憲太郎・鎌田祐二・加納由美・安原　誠・長谷川真・阿部　豊（宮古市教育委員会）、安達尊伸（田野畑村教育委員会）、川向聖子（山田町教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、田崎キクエ（地権者）。

9　本報告書の執筆は、Ⅰ章　調査に至る経過は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所に原稿を依頼した。Ⅱ章～Ⅴ・Ⅶ章は、阿部勝則・八重畑ちか子が分担して執筆した。文末に（氏名）を記してある。Ⅵ章は、鑑定委託先に依頼した原稿を掲載した。報告書の編集・校正は阿部・八重畑が行った。

10　本遺跡の調査成果は、先に、『現地説明会資料』（平成19年７月21日）、『平成19年度発掘調査報告書』（岩文振第524集）などに発表しているが、本書の内容が優先するものである。

11　本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　掲載図版の構成

図版構成は、遺構・遺物に分けている。遺構図版は、竪穴住居跡・竪穴状遺構・陥し穴状遺構・土坑・焼土遺構・土器埋設遺構・溝跡・炭窯跡の順で種類毎に掲載した。遺物図版は土器・土製品・石器・石製品・陶磁器・鉄製品・ガラス製品・植物遺存体の順に出土遺物の種類毎に図版を作成し、出土地点・層位（上→下）を基準に掲載した。別に出土地点別の遺物集成図も作成している。遺物の掲載番号は、掲載順に連番とし、図版・写真図版とも同一番号とした。掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（　）内の数値は残存値、＜　＞内数値は推定値である。

2　掲載図版の縮尺

掲載図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。

a　遺構図版

竪穴住居跡の平・断面図：1/50、炉跡の平・断面図：1/30、陥し穴状遺構・土坑の平・断面図：1/40、焼土遺構・土器埋設遺構の平・断面図：1/30、溝跡の平・断面図：1/100、炭窯跡の平・断面図：1/60。

b　遺物図版

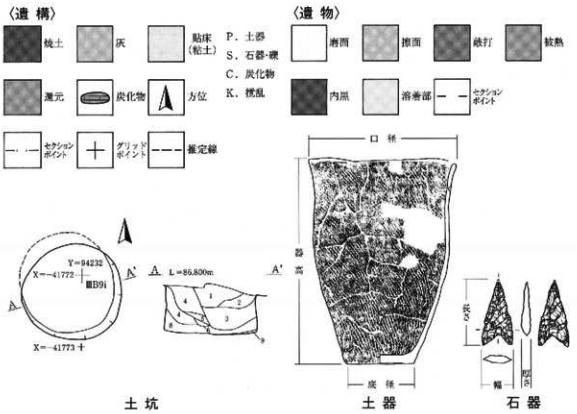
土器：1/3、土製品：1/2、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、石製品：1/2、陶磁器：1/3、鉄製品：1/3、ガラス製品：1/3。

c　写真図版

遺構の写真図版の縮尺は不定である。遺物の写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

3　図版の凡例

図中に使用した記号と網かけの凡例は以下のとおりである。それ以外については、個々の図版毎に凡例を示している。



目　次

図版目次

表 目 次

写真図版目次

Ⅰ　調査に至る経過

八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、一般国道45号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施工に伴い、発掘調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号の線形不良及び隘路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展・連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

これに係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、次のように進められた。八木沢Ⅱ遺跡については、平成17年７月15日～11月５日まで試掘調査を行い、その結果、平成17年12月12日付「教生第1338号」にて岩手県教育委員会生涯学習文化課長より、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答された。本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡については、平成18年４月21日～11月21日まで試掘調査を行い、その結果、平成18年12月20日付「教生第1284号」にて岩手県教育委員会生涯学習文化課長より、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答された。本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）

Ⅱ　遺跡の位置と立地

1　遺跡の位置と地理的環境

本遺跡の所在する宮古市は岩手県の沿岸北部に位置し、北西は岩泉町、西は川井村、南は山田町に接し、東側は太平洋に面している。平成17年６月に田老町と新里村と合併しており、面積約696.82㎢、人口59,456人である（平成18年現在）。三陸海岸のほぼ中央に位置し、漁業・港湾・観光を柱に発展を目指す、本州最東端の市である。

八木沢Ⅱ遺跡は、宮古市八木沢第３地割字中村129ほかに所在し、宮古市の中央やや南側にあり、JR山田線磯鶏駅の南約2.8㎞に位置する。八木沢川を下った地点の海岸線からの直線距離は約3.5㎞である。同地点は北緯39度37分１秒、東経141度55分56秒付近に位置する。

また、八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、同八木沢第８地割字駒込７－１ほかに所在し、JR山田線磯鶏駅の南西約3.0㎞に位置する。八木沢川を下った地点の海岸線からの直線距離は約４㎞である。同地点は北緯39度36分38秒、東経141度56分３秒付近に位置する。

八木沢Ⅱ遺跡および八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、国土交通省国土地理院発行５万分の１地形図「宮古」（NJ－54－13－３：平成５年12月１日発行）、同２万５千分の１地形図「宮古」（NJ－54－13－３－１：平成８年７月１日発行）の図幅に属する。　（阿部）

2　遺跡の立地と周辺の地形・地質

宮古市の地形は、西側に北上高地が南北に連なり、その東縁が直接太平洋に張り出している山地・丘陵地形が大半を占める。そのなかに閉伊川・八木沢川・津軽石川とその支流によって形成された谷底地形・氾濫平野が分布する。なかでも川井村の兜明神岳に源を発して東流する閉伊川が、市域のほぼ中央を西から東に向かって流れ、太平洋に注いでいるが、この閉伊川の北側と南側によって宮古市市域の地形は大きく分かれる。

遺跡の立地する場所は、地形分類上、小起伏山地に区分される。

また、地質分類上は、花崗岩質岩石に区分される。

八木沢Ⅱ遺跡は、閉伊川の南側に位置し、南西から北東方向に向かって流れる八木沢川の支流によって形成された谷底平野の南側の山地に立地している。調査区の標高は46～90mである。調査区の範囲は、東西約90m、南北約350m、面積7,500㎡である。遺跡の現況は山林と畑地である。

八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、八木沢川西岸の山地に立地している。調査区の標高は35～45mである。調査区の範囲は東西約15m、南北約45m、面積700㎡である。遺跡の現況は山林と畑地である。

ふたつの遺跡の今回の調査区は、いずれも三陸縦貫自動車道宮古道路建設予定地部分である。　（阿部）

3　周辺の遺跡

宮古市の遺跡数は、平成17年に合併された旧新里村地区、旧田老町地区を含め、579遺跡にのぼる。第５図は平成17年12月31日時点における岩手県遺跡検索システム（註１）に掲載されているもので、本遺跡周辺に分布する遺跡を図示したものである。それに加えて、近年の三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に係り、分布調査で新たに把握された試掘段階の遺跡や、新たに登録された遺跡も掲載した。第５図の図幅内（南北20㎞、東西16㎞）に登録されているのは250遺跡を数える。（第１表参照）

この地域は、縄文時代から近世までの遺跡が分布しており、縄文時代が154遺跡、古代（奈良・平安

とされたものも含む）86遺跡、中世27遺跡、近世が4遺跡を数える（註2）。

縄文時代は、早期から晩期までの遺跡が確認されている。早期は菅ノ沢遺跡(22)、小沢貝塚(43)などで、土器片が確認されている程度であるが、前期に入ると徐々に竪穴住居跡をもつ遺跡数が増え、中期になると、遺跡数、遺物量ともに最盛期を迎える。磯鶏蝦夷森貝塚(131)や上村貝塚(128)、近内中村遺跡(24)などの比較的規模の大きい集落や、その反対に、2～3棟の小規模な集落も数多く営まれるようになる。後・晩期になると、遺跡数は減少するものの、近内中村遺跡（24）のように後期後半から晩期前半の遺構・遺物が大量に検出されるといった大集落が認められる。古代、特に平安時代に入ると、再び遺跡数が増加し、集落内に鍛冶炉、鉄滓、鞴の羽口など、鉄生産に関連する遺構・遺物が、特徴的にあらわれる。鰐沢遺跡（138）、青猿Ⅰ遺跡（74）など多くの遺跡でみられ、特に島田Ⅱ遺跡（158）は当該期の岩手県内屈指の鉄生産遺跡であることが指摘されている。そして、中世に至ると、山口館、重茂館など、城館跡の増加が特筆され、登録されている27件の遺跡のうち、城館跡は22遺跡を数える。いずれも河川や急峻な斜面を自然要害として利用し、平場や空堀を構築するものである。本遺跡周辺には、八木沢古館（159）、八木沢新館遺跡（156）があり、八木沢氏に関わるものと考えられている。近世に入ると、遺跡数は減少し、黒森町Ⅰ遺跡（42）で鋳物工房跡、磯鶏沖（136）で台場跡が検出されている程度である。

次に、第5図の図幅内に図示しえた250遺跡の中から、本遺跡と同時期である縄文時代の集落及び、古代の集落の特徴について主に立地の観点から概観する。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、北上山地から山地・支脈が延びて形成している山地・山麓地帯が大部分を占める宮古地区特有の地形を反映して、その立地に3つの傾向が認められる。第一に臨海性の小丘陵上に位置するもので、上村貝塚（128）、鍬ヶ崎館山貝塚（61）、金浜館（182）などがあげられる。上村貝塚では中期の竪穴住居跡11棟、鍬ヶ崎館山貝塚では中期の住居跡7棟が検出されている。金浜館ではフラスコ状土坑が47基検出されているため、周辺に大規模な集落の存在が推定されている。これらは小丘陵上で広い平坦面や緩斜面を利用して、比較的大規模な集落を形成することが多い。

第二に西流する大河川である閉伊川にそそぐ山口川、近内川などの中河川が形成した、谷底平野及び氾濫平野に立地するもので、近内中村遺跡（24）、高根遺跡（13）、菅ノ沢遺跡（22）、小平Ⅰ遺跡（14）などがあげられる。この場合、周辺の山地から山口川、近内川に流れ込む小河川や沢が形成する崖錐性扇状地や緩斜面に立地する場合もあり、その規模によっては縄文中期から晩期までの拠点集落ともいうべき近内中村遺跡や、中期の竪穴住居跡19棟を検出した小平Ⅰ遺跡のように大集落を形成する場合もある。これらは閉伊川より北部の千徳丘陵域に多くみられる。

第三に八木沢丘陵、千徳丘陵、花輪山地などの小起伏山地のやせ尾根上に立地するものである。当八木沢Ⅱ遺跡はこれに分類されるものであり、他には氣崎Ⅱ遺跡（73）、木戸井内Ⅳ遺跡（106）、八木沢駒込Ⅱ遺跡（165）（現在整理中）などが上げられる。これらは尾根上あるいは尾根先端の緩斜面の狭い範囲を利用するため、竪穴住居跡が2～3棟程度の小規模な集落が多い。

また、縄文時代には遺跡内でも遺構別に立地の違いがみられる。住居跡と貯蔵穴はセットで確認されることが多いが、前述した金浜館遺跡のように、貯蔵穴群のみが検出された例がある。墓壙についても上村貝塚では、竪穴住居跡内から人骨を伴った墓壙が検出される例がある一方、菅ノ沢遺跡のように、墓壙群として単独に確認されている遺跡もある。これらは、集落が大規模化すると、住居跡群と貯蔵穴群及び墓壙群を区分する傾向をもつようになると考えられる。また、陥し穴状遺構に関しては、居住の場、狩猟の場と区分されることが多く、集落跡と離れたところから検出される。また尾根上・斜面・低地と、あらゆる地形に設置する。この立地の差異は、遺構の形状の違いとあわせて、時

期差や、狩猟対象、狩猟方法の違いを反映している可能性がある。

古代

古代の遺跡は、岩手県遺跡検索システムをみると、縄文時代の山地・丘陵上にある遺跡と共伴する例が多くみられる。他地域においては、古代になると、低地に集落が移動するのが一般的な傾向として認められるが、宮古地区ではそれとは異なる様相を示しており、むしろ、縄文時代の第二の特徴としてあげた、山口川・近内川などの中河川流域の、比較的標高の低い地域には、古代の集落が営まれなくなり、標高の高い尾根上や斜面に立地するものが多いのが特徴である。以下で事例を挙げながら、縄文時代の集落との立地の相違点を見ていく。

まず、縄文時代とも共通する立地である臨海性の小丘陵上にある遺跡は、上村貝塚（128）、鍬ヶ崎館山貝塚（61）などがある。上村貝塚は奈良～平安時代の住居跡が16棟、鍬ヶ崎館山貝塚は平安時代の住居跡3棟が検出されている。この場合、比較的広い平坦面を利用しており、集落の立地という点では、縄文時代と大きな変化はみられない。

次に山地・丘陵部の尾根上に集落が築かれているのは、島田Ⅱ遺跡（158）、磯鶏館山貝塚（137）である。これらは縄文時代のやせ尾根上に営まれる集落と立地的には共通しているが、より平坦部の広い尾根上を選択しており、集落の規模も10～30棟程度と飛躍的に大きくなる。そしてもうひとつ特徴的なのは、同じ山地、丘陵部の尾根から谷（洞）に下る斜面上に立地する集落が増加することである。当八木沢Ⅱ遺跡もこれに分類され、他に鰹沢遺跡（138）、木戸井内Ⅳ遺跡（106）があげられる。その谷は低地面が比較的広く、開けた谷部であることが多く、それを見下ろす形の斜面部から竪穴住居跡が検出される。鰹沢遺跡では、奈良時代から平安時代までの住居跡32棟が検出されており、それは時代が下るとともに、緩斜面から急斜面に進出して集落を営む傾向があると指摘されている（註2）。これらの尾根上や尾根からの斜面部に立地する遺跡は、竪穴住居跡とともに、その内外に製鉄関連の遺構（製鉄炉、大鍛冶炉、小鍛冶炉など）を伴うことが多い。そのため鉄生産関連の職人の移動と関連づけて考えられている（註3）。

以上みてきたように、縄文時代と古代の集落は、ともに山地・丘陵上を好んで営まれるという点では一致する。しかし、それは前述したこの地区特有の地形とともに、古代になって、社会的に鉄生産の重要性が増してくる中で、砂鉄が採取できるこの地域としての特異性によるものであり、土地選択の要因となる背景は大きく変化しているといえる。（八重畑）

註

(1) 報告書一覧　41

(2) 2時期以上を含む複合遺跡は重複して数えた。

(3) 報告書一覧　27

4　基本土層

八木沢Ⅱ遺跡は、調査区が北東～南西方向に長さ350m×幅90mと細長く、また尾根部と谷部が連続する複雑な地形であることから、尾根上と裾、谷部など地形に応じて6箇所で基本土層の確認を行った。地点により若干の差がみられるが、各観察地点の土層の堆積状況と基本土層は次のとおりである。

（1）各観察地点の土層の堆積状況と遺構検出面

遺跡の現況は山林で、調査区には伐採した立木の搬出のための作業道が縦断していた。調査区内の土層の堆積をみると、尾根部の上（観察地点②・④・⑤・⑥）や斜面部ではⅠ層直下でⅢ層またはⅣ層が確認された。よってⅢ層または、Ⅳ層が遺構検出面となった。斜面裾や谷部（観察地点①・③）ではⅠ層直下にⅡ

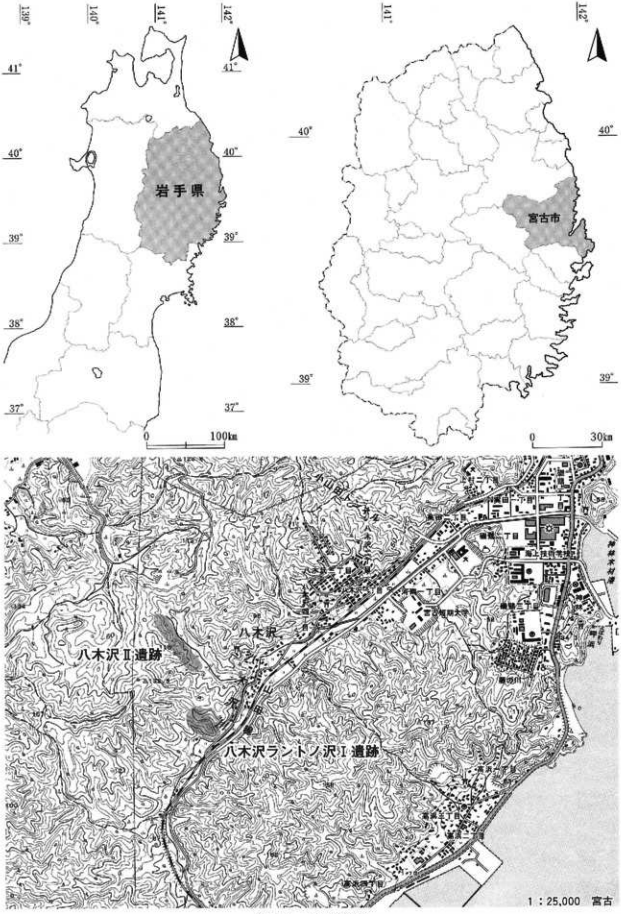
第1表　周辺の遺跡一覧表

遺跡No	遺跡コード LG	遺跡コード No	遺跡名	種別	時代・時期	報告書
1	22	1365	稗縄Ⅲ	散布地	縄文・弥生・古代	
2	22	1388	稗縄Ⅱ	散布地	縄文	
3	22	2547	与成子Ⅰ	戦布地	縄文	
4	22	2583	与成子Ⅱ	散布地		
5	22	2587	原木	散布地	縄文・古代	
6	23	1042	アサヤイ沢	散布地	縄文・古代	
7	23	1068	蛙ヶ沢Ⅱ	散布地		
8	23	1121	蛙ヶ沢Ⅳ	散布地		
9	23	1151	蛙ヶ沢Ⅲ	散布地		
10	23	1216	小平Ⅱ	散布地	縄文	
11	23	1233	牛沢	散布地	縄文	
12	23	1234	小平Ⅲ	散布地	縄文	
13	23	1253	高根	寺院跡	縄文	19・27
14	23	1255	小平Ⅰ	散布地	縄文	5
15	23	1295	赤堀東	散布地	縄文・近現	2
16	23	1309	武沢Ⅰ	散布地		
17	23	1326	風森	散布地		
18	23	1332	風森山	寺院跡		
19	23	1349	本郷	集落跡	縄文・古代	1・17
20	23	1364	風森マキ沢	散布地	縄文	
21	23	2021	権現Ⅰ	戦布地	縄文	
22	23	2024	壱ノ沢	集落跡	縄文・古代	39
23	23	2035	桃川	散布地	縄文・古代	
24	23	2059	近内中村	集落跡	縄文・弥生・古代	40
25	23	2104	蛙ヶ沢Ⅰ	集落跡	縄文・古代	
26	23	2133	近内西城	散布地		
27	23	2162	近内船Ⅰ	城館跡	中世	
28	23	2194	近内白石Ⅰ	墓跡跡		
29	23	2196	近内大笹	城館跡	中世	
30	23	2197	近内白石Ⅱ	散布地	縄文・古代	
31	23	2215	赤堀	散布地	縄文・近世	2・31
32	23	2231	山口新沢Ⅱ	墓跡跡		
33	23	2244	山口新沢Ⅰ	墓跡跡	縄文・古墳	
34	23	2246	大坪山	散布地	縄文・古代・弥生	31
35	23	2282	広町	散布地	縄文	
36	23	2310	山口横	城館跡	中世・古代	6・10・31・34
37	23	2323	坪座神	集落跡	縄文	
38	23	2325	小沢口神塚前	散布地・墓跡跡	縄文・古代	
39	23	2336	小沢原入形跡	散布地	縄文・古代	
40	23	2345	小沢西内金平	散布地	縄文・古代	
41	23	2353	神殿ヶ沢	散布地	縄文・古代	
42	23	2362	長森東Ⅰ	墨書土器・鉄滓遺物	奈良	26
43	23	2377	小沢口深	風穴	縄文	
44	24	1000	羊腸坂Ⅴ	散布地	縄文	
45	24	1020	羊腸坂Ⅳ	散布地	縄文	17
46	24	1069	金沢	集落跡	縄文	
47	24	1166	平松Ⅰ	集落跡	縄文	
48	24	1184	平松Ⅱ	散布地	縄文	
49	24	1187	平松Ⅲ	散布地	縄文	
50	24	2003	日の出町Ⅰ	散布地	縄文	
51	24	2033	日の出町Ⅱ	散布地	縄文	
52	24	2044	日の出町Ⅲ	散布地	縄文	
53	24	2076	武田Ⅰ	散布地	古代	
54	24	2080	小沢Ⅱ大上	戦布地	縄文	35
55	24	2087	武田Ⅱ	散布地		
56	24	2111	横坂町	砦跡跡？	中世	25
57	24	2150	白新町Ⅰ	散布地	縄文	
58	24	2158	井戸ヶ崎	集落跡	縄文	
59	24	2175	白新町Ⅱ	散布地		
60	24	2183	狼ヶ城跡（新山）	城館跡	中世	
61	24	2184	狼ヶ城跡山麓	集落跡・貝塚	縄文～中世	23
62	24	2190	小山堀	散布地	縄文・弥生・古代	
63	32	1333	下横市	散布地	縄文	
64	32	2333	田神原（「石器祭り」	城館跡	中世	
65	32	2358	田神	散布地	縄文・古代	
66	33	0087	宗神沢Ⅰ	散布地	縄文・古代	
67	33	0099	若田沢	散布地	縄文・古代	
68	33	0138	近内寺本	散布地	縄文・古代	
69	33	0148	小田沢	散布地	古代	
70	33	0197	千駄城遺跡群	城館跡	奈良・平安・中世	13・24
71	33	0202	青葉Ⅱ	散布地	縄文・古代	
72	33	0207	鶴岡	集落跡	縄文・奈良・平安	21
73	33	0218	泉町狐崎Ⅱ	集落跡	縄文・奈良・平安	20
74	33	0220	青葉Ⅰ	集落跡・貝塚跡	縄文・平安	18・24
75	33	0222	青葉Ⅲ	集落跡	弥生・平安	
76	33	0225	矢敷Ⅳ	散布地		
77	33	0229	矢敷Ⅴ	散布地		
78	33	0234	矢敷Ⅱ	散布地	古代	
79	33	0236	長坂堂ヶ	集落跡		
80	33	0239	泉町狐崎Ⅲ	散布地		
81	33	0243	長根Ⅱ	散布地	古代	
82	33	0247	長根堂ヶ	散布地	縄文・古代	
83	33	0253	長根Ⅰ	散布地	弥生・平安	3
84	33	0257	長根寺前	散布地	縄文・古代	
85	33	0321	泉町狐崎Ⅰ	戦布地	古代	21
86	33	0311	横崎Ⅰ	集落跡	古代	
87	33	0322	横崎Ⅱ	散布地	古代	
88	33	0340	芝原横	城館跡	中世	
89	33	0385	柳山	集落跡・貝塚	古代	
90	33	1008	鹿沢Ⅱ	散布地		
91	33	1019	板瀬Ⅰ	散布地		
92	33	1120	板瀬Ⅱ	散布地		
93	33	1247	古ヶ沢	散布地	縄文・古代	
94	33	1273	水沢前代	散布地	縄文	
95	33	1370	小山道端	城館跡	中世	
96	33	1380	小山道Ⅰ	散布地	古代	
97	33	1389	小山道Ⅱ	城館跡	中世	
98	33	2386	宗神横	城館跡	古代・中世	
99	33	2362	松山下谷地	散布地	縄文・古代	
100	33	2366	松山大松沼西	集落跡	古代	
101	33	2189	隠武Ⅱ	集落跡	縄文・古代	
102	33	2197	隠武Ⅰ	集落跡	縄文・古代	
103	33	2214	本戸前西Ⅱ	散布地	古代	
104	33	2227	本戸前西Ⅰ	散布地	縄文・弥生	
105	33	2260	隠武Ⅲ	散布地	縄文	12
106	33	2263	本戸前内Ⅰ	集落跡	古代・縄文	12・38
107	33	2288	八木沢ヶ入館Ⅱ	散布地	縄文	
108	33	2292	隠武Ⅲ	集落跡	縄文・古代	12
109	33	2306	小田田Ⅱ	散布地	古代	
110	33	2343	寺窪ヶ	散布地	古代・縄文	
111	33	2319	横崎前田Ⅱ	集落跡	縄文・古代	
112	33	2351	八木沢ヶ入館Ⅰ	散布地	縄文・古代	
113	33	2372	八木沢ヶ入館Ⅲ	散布地	縄文・古代	
114	33		所地住ヵ			
115	33		可能性ヵ			
116	34	0025	荒田横	城館跡	中世	
117	34	0122	蒲原	散布地	縄文	
118	34	0103	狼ヶ崎前町	散布地	縄文	
119	34	0124	狼ヶ崎上町	散布地	縄文	
120	34	0143	光源地	集落跡・貝塚	縄文	
121	34	1007	海原上町Ⅰ	散布地	縄文・古代	
122	34	1027	海原上町Ⅱ	集落跡	奈良	
123	34	1045	海原上町Ⅲ	散布地	縄文・古代	
124	34	1047	磯浦山横	散布地	縄文・古代	
125	34	1073	小沢田	古墳	縄文・古代	
126	34	1075	与成	古墳	縄文・弥生	
127	34	1084	三村Ⅱ	散布地	縄文・古代	
128	34	1085	七村山根	集落跡・貝塚	縄文・平安	4
129	34	1091	三村Ⅲ	散布地	縄文・古代	33
130	34	2001	上村Ⅳ	散布地	縄文・古代	
131	34	2007	磯浦横西長尾根	古墳	縄文・古代	
132	34	2013	磯浦竹原Ⅰ	集落跡	平安・古代	
133	34	2076	仏沢Ⅰ	散布地	古代	
134	34	2091	岳田Ⅰ	集落跡	平安	
135	34	2097	仏沢Ⅱ	集落跡	縄文・平安	
136	34	2133	磯浦沖	古墳	近世・中世	
137	34	2155	磯浦鎧山	集落跡・城館跡	縄文～中世	22・30
138	42	0355	鹿沢	集落跡	平安・奈良	28
139	42	0384	石塚横	城館跡	中世	
140	42	1312	石久保	城館跡	中世	
141	42	1395	下折橋Ⅱ	城館跡	中世	
142	42	2326	下折橋Ⅰ	散布地	縄文	
143	42	2391	中折橋Ⅰ	散布地	縄文	
144	42	2398	下入野Ⅰ	散布地	縄文	
145	43	0044	高木所	散布地	縄文	
146	43	0102	七所沢Ⅰ	散布地	古代	
147	43	0122	七所沢Ⅱ	散布地	縄文	
148	43	0138	屋敷横	散布地		
149	43	0163	七所沢Ⅲ	散布地	縄文	

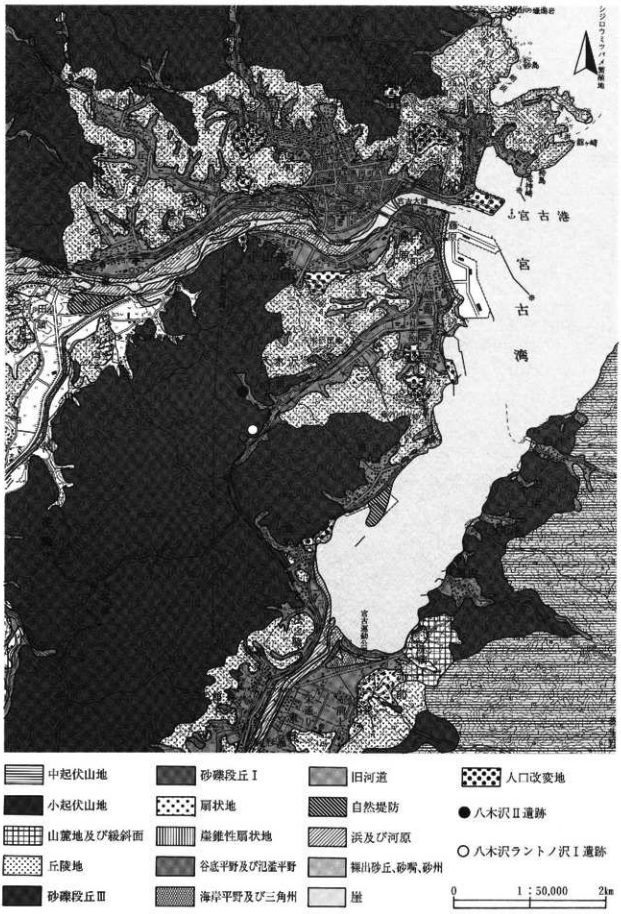
掲載No	遺跡コード LG	No	遺跡名	種別	時代・時期	報告書
150	43	0200	猫塚IV	散布地	縄文・古代	
151	43	0205	八木沢II	散布地	縄文	11
152	43	0212	猫塚V	散布地	古代	
153	43	0230	猫塚VI	散布地	古代	
154	43	238	八木沢I遺	生産遺跡	古代	
155	43	0301	八木沢平ノ越I	散布地	縄文	
156	43	0312	八木沢新橋	城館跡	中世・近世	
157	43	0330	八木沢I 自山P	散布地	縄文	
158	43	0338	麻田II	集落跡	古代	7-8・9
159	43	0357	八木沢古館	城館跡	中世	37
160	43	1012	沢沢	散布地	縄文	
161	43	1040	柳沢館	城館跡	中世	
162	43	1042	柳沢I	集落跡		
163	43	1071	柳沢II	散布地	縄文	
164	43	1206	八木沢新込I	集落跡	縄文・古代	12・37
165	43	1244	八木沢新込II	散布地	縄文	11
166	43	1257	八木沢野妙	墓塚跡	縄文	11
167	43	1369	高沢原横張貝	散布地	縄文	
168	43	1398	高沢V下地神	墓塚跡	縄文	
169	43	2008	大谷地III	墓塚跡		
170	43	2076	大谷地IV	墓塚跡	縄文	
171	43	2143	大谷地I	散布地	縄文	
172	43	2147	上大谷地II	散布地	縄文	
173	43	2170	大谷地II	集落跡	縄文	
174	43	2204	上大谷地I	集落跡	縄文	
175	43	2206	上大谷地I	散布地	縄文	11
176	43	2208	豊ノ野	散布地	縄文	11
177	43	2222	上大谷地III	散布地	縄文	
178	43	2233	上大谷地IV	散布地	縄文	
179	43	2264	上大谷地V	散布地	縄文	
180	43	2314	金清屋ヶ沢	製鉄跡		
181	43	2316	高清河原神	散布地	縄文	
182	43	2336	金清屋	城館跡	中世	15
183	43	2342	金清I	散布地	縄文	
184	43	2363	金清II	集落跡	古代	
185	43	2384	金清III	散布地	縄文・近代	
186	43	2394	金清IV	散布地	縄文	
187	43	2333	可能性あり①			11
188	43	2331	可能性あり②			11
189	43	2331	可能性あり③			11
190	43	2320	可能性あり④			11
191	43	2310	可能性あり⑤			11
192	43	2229	可能性あり⑥			11
193	43	0279	八木沢ヤンノ沢I			11・12
194	43		可能性あり⑦			11
195	43		可能性あり⑧			11
196	43	0364	八木沢中荒			37
197	44	0003	機織中谷地	散布地	古代	
198	44	0095	谷沢I 民ノ下	散布地	縄文	
199	44	0208	白浜II	散布地	縄文	
200	44	0287	白浜III	散布地	縄文	
201	44	0351	白浜I	集落跡	縄文	
202	44	1013	高浜五ヶ今ノ岡	散布地	縄文	
203	44	1082	高浜五岡岡	集落跡	縄文	
204	44	1115	鹿内I	散布地	縄文	
205	44	1209	白浜IV	散布地	縄文	
206	44	1234	白浜太田原I	散布地	縄文	
207	44	1247	白浜太田原II	散布地		
208	44	1271	白浜太田原III	散布地	縄文	
209	44	1282	白浜太田原IV	散布地	縄文	
210	44	1290	白浜太田原V	散布地	縄文	
211	44	1311	白浜V	散布地	縄文	
212	44	2167	磯内II	散布地	縄文	
213	44	2176	磯内V	散布地	縄文	
214	44	2195	磯内IV	散布地	縄文	
215	44	2290	磯内III	散布地	縄文	
216	52	0328	下大野II	散布地		
217	52	0336	中大野I	散布地		
218	52	0347	中大野II	散布地		
219	52	0357	上大野I	集落跡	縄文	
220	52	0379	長沢横野遺跡	散布地		
221	52	0387	上大野II	散布地	縄文	
222	52	1317	上大野III	散布地		
223	52	1306	上大野IV	散布地	古代	
224	53	0027	入谷地V	散布地	縄文	
225	53	0060	長沢横野遺I	散布地	縄文	
226	53	0072	長沢横野遺II	散布地	縄文	
227	53	0046	高越II	集落跡	古代	
228	53	0098	長越I	散布地	縄文・古代	
229	53	0033	金清V	散布地	縄文	
230	53	0982	山崎館	城館跡	中世	
231	53	1093	長沢横野遺IV	散布地	縄文	
232	53	1194	板井沢巻ヶ沢	散布地	古代	
233	53	1207	津軽台大森	散布地	縄文	
234	53	1225	清里	集落跡	縄文・古墳	35
235	53	1266	清里館	城館跡	中世	
236	53	1273	板井沢穴田I	散布地	縄文・古代	
237	53	1281	板井沢穴田II	散布地	縄文	
238	53	1290	板井沢穴田III	散布地	縄文	
239	53	1389	久保田	散布地	縄文・古代	
240	53	2001	横井沢穴田IV	散布地	縄文	
241	53	2205	森平館	城館跡	中世	
242	54	0089	赤面V柳沢	散布地	縄文・古代	14・32
243	54	0113	小瀬内I	集落跡	縄文・弥生	
244	54	0123	小瀬内II	散布地	縄文	
245	54	0142	小瀬内III	散布地	縄文・弥生	32
246	54	0160	赤面V五反ヶ沢	散布地	縄文・古代	14・32
247	54	1008	赤面V入牧田	集落跡	縄文・平安	14・32
248	54	1025	赤面III	集落跡	縄文・平安	14・32
249	54	1064	赤面館	城館跡	中世	14
250	54	1072	赤面I 十了沢	散布地	縄文	14・29

周辺の遺跡　報告書一覧表

岩手県埋蔵文化財センター		
集	報告書名	年
1	第43集　「東北自動車道関連埋蔵文化財調査報告書」	1981
2	第142集　「東北自動車道関連埋蔵文化財調査報告書」	1989
3	第145集　「長根工業団地造成関連埋蔵文化財調査報告書」	1990
4	第150集　「上村山遺跡発掘調査報告書」	1990
5	第299集　「小平下遺跡発掘調査報告書」	1999
6	第310集　「田口遺跡発掘調査報告書」	1999
7	第337集　「高田II遺跡試掘調査報告書」	1999
8	第358集　「高田II遺跡発掘調査報告書」	2001
9	第450集　「高田II遺跡第2・4次発掘調査報告書」	2004
10	第465集　「田口・長越遺跡発掘調査報告書」	2006
11	第490集　「平成17年度発掘調査報告書」	2006
12	第505集　「平成18年度発掘調査報告書」	2007
宮古市教育委員会		
13	第2集　「宮古市千鶴地区発掘調査概報」	1980
14	第5集　「赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査」	1984
15	第7集　「金沢遺跡」	1986
16	第10集　「中谷地・高田遺跡」	1987
17	第12集　「根岸・早稲田B遺跡」	1987
18	第14集　「宮古II・丁在遺II・千鶴遺跡群」	1988
19	第19集　「長根遺跡」	1989
20	第20集　「鳥屋II遺跡」	1989
21	第22集　「新海遺跡」	1990
22	第24集　「横横的山遺跡　第2次調査　」	1990
23	第25集　「嶽ヶ崎遺跡」	1990
24	第27集　「赤前I遺跡・千鶴地遺跡群」	1991
25	第28集　「根岸町遺跡」	1990
26	第32集　「生出町I遺跡」	1992
27	第33集　「東前遺跡第2次調査」	1992
28	第34集　「鍛冶遺跡」	1992
29	第42集　「赤前I中下沢遺跡」	1995
30	第43集　「遠畑前山遺跡」	1995
31	第51集　「赤面・大代山・山口横地」	1998
32	第53集　「小堀内I・小瀬II・赤面IV入牧田・赤面IV柳沢・赤面IV五反ヶ沢遺跡」	1999
33	第56集　「木ノ井内I・赤ノ井穴倉・下村II遺跡」	1999
34	第57集　「山口横地」	2002
35	第58集　「小沢II・大上遺跡」	2002
36	第60集　「上松井沢I遺跡・新里遺跡」	2003
37	第67集　「八木沢八新・八木沢中田・八木沢新込I遺跡」	2006
38	第68集　「木ノ井内IV遺跡」	2006
39	第69集　「宮ノ沢遺跡」	2006
40	「花巻中村遺跡・第1次・7次発掘調査の概要　」	2001
岩手県教育委員会事務局		
41	「岩手県遺跡検索システム（宮古地方損害地）バージョン1.05（平成17年12月31日現在）」	


139°
140°
141°
142°
41°
40°
39°
38°
37°
岩手県
0
100km
141°
142°
40°
39°
宮古市
0
30km
八木沢
八木沢Ⅱ遺跡
八木沢ランドノ沢Ⅰ遺跡
1：25,000　宮古

第１図　遺跡位置図



第２図　遺跡周辺の地形分類図

第３図　遺跡周辺の地質分類図

第4図　宮古市域図

層の堆積が確認された。このⅡ層は遺物をほとんど含まない層であるが、調査では、この層より焼土遺構や若干の遺物を確認している。よって谷部では、Ⅱ層上面を1次検出面、Ⅲ層上面を二次検出面とし、Ⅱ層が厚く堆積するところは、段階的に掘り下げて遺構の確認を行った。

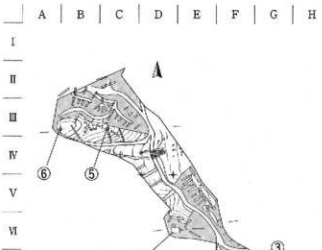
八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡の基本土層の堆積状況と遺構検出面は八木沢Ⅱ遺跡と同様である。

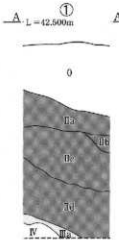
(2) 基　本　土　層

遺跡の基本土層の色調・層厚・土性などの特徴は、以下のとおりである。

Ⅰ層　10YR 2/2　黒褐色　層厚10～110cm　シルト　締り疎　現表土（盛土、漸移層含）
Ⅱ層　10YR 3/4　暗褐色　層厚20～120cm　シルト　締り中（谷部の一次検出面）
Ⅲ層　10YR 5/6　黄褐色　層厚20～40cm　粘土　締り密　地山(尾根部の一次検出面、谷部の2次検出面)
Ⅳ層　10YR 8/2　灰黄褐色　層厚50cm以上　マサ土　基盤の礫層に続く(尾根部の二次検出面)
(阿部)

第５図　周辺の遺跡分布図





基本土層①　A－A'

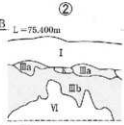
層位	色調	土性
0.	10YR5/2　灰褐色	シルト　緩まりなし　炭化物1%含。
Ⅱa.	10YR3/4　暗褐色	シルト　緩まりゆ　炭化物1%含。
Ⅱb.	10YR2/1　黒　色	シルト　緩まりゆ。
Ⅱc.	10YR2/2　黒褐色	シルト　緩まりゆ。
Ⅱd.	10YR2/1　黒　色	シルト　緩まり密　炭化物3%含。

Ⅱc層とⅡd層の間に径3cm大の亜角礫が混じる砂層が入る。

Ⅲa.	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂土　緩まり密

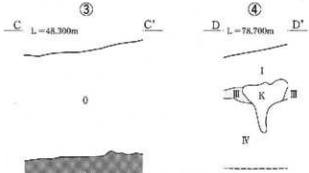
Ⅲ層とⅣ層の間に5cm大の亜角礫からなる礫層が入る。

Ⅳ.	10YR8/2　灰白色	マサ土　緩まり密。



基本土層②　B－B'

層位	色調	土性
I.	7.5YR2/3　極暗褐色	シルト　緩まりやや密　植根多量に含　炭土。
Ⅲa.	10YR5/2　灰黄褐色	シルト質砂土　緩まりゆ　細砂含　遺構確認面。
Ⅲb.	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土　緩まりゆ。
Ⅳ.	10YR8/2　灰白色	マサ土　緩まり密　遺構最終確認面。



基本土層③　C－C'

層位	色調	土性	
0.	盛　土。		
Ⅰa.	10YR2/2　黒褐色	シルト　緩まり密	小礫（径5cm）3%含。
Ⅰb.	10YR2/1　黒　色	シルト　緩まり密	小礫（径5cm）1%含。
Ⅰc.	10YR2/2　暗褐色	シルト　緩まり密	小礫（径5cm）3%含。
Ⅲa.	10YR4/4　褐　色	粘　土　緩まり密	小礫（径5cm）1%含。

基本土層④　D－D'

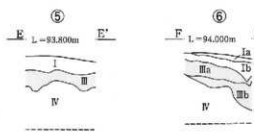
層位	色調	土性
I.	10YR3/3　暗褐色	シルト

緩まり度　植根多量に含　炭土。

Ⅲ.	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土

緩まりやや密　遺構確認面。

Ⅳ.	10YR7/2　にぶい黄褐色	マサ土　緩まり密　遺構最終確認面。



基本土層⑤　E－E'

層位	色調	土性
I.	10YR2/2　黒褐色	シルト

緩まり度　植根多量に含　炭土。

Ⅲ.	10YR5/8　黄褐色	粘土

緩まりゆ　上層はⅠ層の影響を受けて汚れている。

Ⅳ.	10YR8/1　灰白色	マサ土

緩まり密。

基本土層⑥　F－F'

層位	色調	土性
Ⅰa.	10YR3/4　暗褐色	シルト

緩まりゆ　植根多量に含　炭土。

Ⅰb.	10YR2/2　黒褐色	シルト

緩まりゆ。

Ⅲa.	10YR7/6　明黄褐色	シルト質粘土

緩まりゆや　遺構確認面。

Ⅲb.	10YR5/8　黄褐色	粘土

緩まりゆ。

Ⅳ.	10YR8/2　灰白色	マサ土

緩まりゆ　角質化しブロック状に削離する　岩盤。

0　1：40　1m

第6図　基本土層図

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野　外　調　査

（1）調査区の設定と遺構の命名

①　八木沢Ⅱ遺跡

調査区の地区割にあたっては、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点をもとにして、調査区全体にメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点・補点の座標値（世界測地系）は、以下のとおりである。

基準点１	X＝－41,772.000	Y＝94,200.000	H＝94.044m
基準点２	X＝－41,772.000	Y＝94,248.000	H＝84.726m
補　点１	X＝－41,820.000	Y＝94,284.000	H＝68.273m
補　点２	X＝－41,820.000	Y＝94,316.000	H＝58.711m
補　点３	X＝－41,940.000	Y＝94,380.000	H＝67.341m
補　点４	X＝－41,940.000	Y＝94,400.000	H＝66.217m

グリッドは、原点（X＝－41,660.000、Y＝94,160.000）を北西側隅にして、40m四方の大グリッドを設定し、さらに４m四方の小グリッドを設定した。グリッド名は、大グリッドは北から南に向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ（ローマ数字）…、西から東に向かってA・B・C（アルファベット大文字）…とし、小グリッドは北から南に向かって１・２・３（アラビア数字）…、西から東に向かってa・b・c（アルファベット小文字）…とした。それぞれの組み合わせでⅠA１a・ⅠB１bグリッドの区画名を付し、区画左上の杭をもって、その区画のグリッド名称を表した。

②　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡

調査区の地区割の方法は、八木沢Ⅱ遺跡に準じている。

（2）遺　構　の　名　称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、検出順にそれぞれ番号を付けて、SI01・SK02のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。本調査で使用した遺構略号と遺構名は以下に記したとおりである。報告にあたっては、現場で命名した遺構名をそのまま使用しているため一部欠番を生じている。

SI：竪穴住居跡、SKI：竪穴状遺構、SK：陥し穴状遺構・土坑、SN：焼土遺構、SZ：土器埋設遺構、SD：溝跡、SW：炭窯跡

①　八木沢Ⅱ遺跡

検出された遺構種別・検出数・遺構名は以下に記したとおりである。なお、遺構名の一覧表は第２表に記した。

遺構種別：検出数：遺構名

竪穴住居跡６棟：SI01・02・03・04・05・06

竪穴状遺構２棟：SKI01・02

第２表　遺構一覧表

No	遺構名	種別	No	遺構名	種別	No	遺構名	種別	No	遺構名	種別
1	SI01	竪穴住居跡	14	SK30	陥し穴状遺構	27	SK15	土坑	40	SN02	焼土遺構
2	SI02	竪穴住居跡	15	SK01	土坑	28	SK16	土坑	41	SZ02	土器埋設遺構
3	SI03	竪穴住居跡	16	SK03	土坑	29	SK17	土坑	42	SZ04	土器埋設遺構
4	SI04	竪穴住居跡	17	SK04	土坑	30	SK18	土坑	43	SD01	溝跡
5	SI05	竪穴住居跡	18	SK05	土坑	31	SK19	土坑	44	SD02	溝跡
6	SI06	竪穴住居跡	19	SK06	土坑	32	SK21	土坑	45	SD03	溝跡
7	SK101	竪穴状遺構	20	SK07	土坑	33	SK23	土坑	46	SD04	溝跡
8	SK102	竪穴状遺構	21	SK08	土坑	34	SK24	土坑	47	SD05	溝跡
9	SK02	陥し穴状遺構	22	SK09	土坑	35	SK26	土坑	48	SD06	溝跡
10	SK14	陥し穴状遺構	23	SK10	土坑	36	SK27	土坑	49	SD09	溝跡
11	SK20	陥し穴状遺構	24	SK11	土坑	37	SK28	土坑	50	SW01	炭窯跡
12	SK22	陥し穴状遺構	25	SK12	土坑	38	SK29	土坑	51	SW02	炭窯跡
13	SK25	陥し穴状遺構	26	SK13	土坑	39	SN01	焼土遺構			

陥し穴状遺構６基：SK02・14・20・22・25・30

土　坑24基：SK01・03・04・05・06・07・08・09・10・11・12・13・15・16・17・18・19・21・23・24・26・27・28・29

焼土遺構２基：SN01・02

土器埋設遺構２基：SZ02・04※01・03欠番

溝　跡７条：SD01・02・03・04・05・06・09※07・08欠番

炭窯跡２基：SW01・02

②　八木沢ラントノ沢Ｉ遺跡

陥し穴状遺構１基：SK01

土　坑１基：SK02

（３）試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅１～２ｍ、長さ５～10ｍのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。試掘溝の設定にあたっては、平成17年度の試掘調査の成果を考慮しながら、計129本の試掘溝を入れている。試掘の結果、急斜面地で遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断された区域は、試掘調査のみで調査を終了した。それ以外の区域においては、試掘結果にもとづいて表土掘削を行った。調査区全体の表土の厚さは20～30cm程あり、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。

遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、尾根上では、Ⅲ層の黄褐色土層（一次検出）またはⅣ層マサ土層（二次検出）で行い、谷部では、Ⅱ層黒褐色土層（一次検出）またはⅢ層黄褐色上層（二次検出）で検出を行った。

（４）遺　構　精　査

検出された遺構の精査は、原則として住居跡や炭窯跡など人形の遺構の場合は４分法、土坑類は２分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行っている。陥し穴の底面で確認された副穴は、径が小さく深いことから、トレンチを設定して断面観察による記録を優先して作成した。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成をしている。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Card（以下F・Cと略す）を使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

（5）実測・写真撮影

平面実測はグリッドごとに合わせた１ｍメッシュを基準として行った。平面図・断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類・炭窯跡などは１／20を基本として、マイラー用紙に記録した。レベルは、基準高をもとに絶対高で測った。なお、トレンチ位置図・個々の遺構平面図については、グリッド杭・水糸によって設けられた基準から計測する簡易遣り方測量ではなく、電子平板を用いて図化作業を行った。断面実測については、任意の高さを基に設定した水糸を基準として計測を行った。

写真撮影は、35㎜モノクロームとカラーリバーサル各１台、モノクローム６×９㎝判１台、補助用としてデジタルカメラ１台を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。また、調査終了段階でセスナ飛行機による遺跡の航空写真撮影を行った。

（6）土　層　注　記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）をもとに行っているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の５段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、埋没した土の起源の把握を課題として記録した。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内覆土をアラビア数字（１・２・３）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、Ⅰa・Ⅰb・Ⅰc・…などと表わした。

（7）上　壌　水　洗

縄文時代の住居跡においては、動物遺存体が存在する可能性、古代の住居跡においては、製鉄関連の遺構である可能性を考慮し、住居跡の覆土下位（床上５㎝）の覆土、住居跡の炉跡の覆土及び焼土・カマドの覆土及び焼土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩（５㎜・３㎜・１㎜）による仕分け、磁着作業を行った。この工程を経て得られた遺物には、土器・石器の細片や砂鉄などがある。

（8）調　査　の　経　過

① 八木沢Ⅱ遺跡

調査期間は４月12日～８月10日で、作業実働日数は80日であった。作業員の登録人数は、当初35人で始まり、一日の平均稼働作業員数は25人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

４月12日(水)　資材搬入、調査開始、作業員登録35人
４月24日(水)　基準点測量（釜石測量設計株式会社）
６月11日(月)　作業員５人隠里Ⅲ遺跡へ支援（７月13日まで）
７月18日(水)　作業員６人森崎Ⅱ遺跡へ移動（８月１日まで）
７月21日(土)　現地説明会：13：00～15：00、見学者100人
８月１日(水)　航空写真撮影（東邦航空）
８月10日(金)　終了確認、調査終了・撤収

具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、平成17年度に試掘調査が行われた30,600㎡よ

り、本調査対象範囲として示された12,600㎡である。調査区の現況は山林で、木は伐採されていたが、木を積み出す際に旧地形を造成して設けられた作業道が、調査区を縦断していた。

作業は、調査区の確認を行った後、人力で雑物撤去を行い、各所に雑物を集積した。集積した雑物は、後に重機で調査区域外に搬出している。重機による雑物撤去が終了したのは５月11日で、雑物撤去に約12日間を要している。

雑物撤去が終了した区域から、任意にトレンチを設けて試掘調査を行った。試掘調査の留意点は、遺構の検出面の把握と尾根部・谷部が連続する調査区における土層の確認である。また、平成17年度に行われた試掘調査で確認されている、遺構の確認にも留意して行った。今回の調査では、トレンチ129本を設定している。調査区は、急傾斜地も含まれるため、遺構の分布を把握することにも留意し、遺構が確認される可能性が低いと判断した区域は、全面表土掘削を行わなかった。調査区を南側から便宜的に１・２・３・４・５区と仮称して調査を進めた。

４月は雑物撤去と１・２・４・５区の試掘を中心に進めた。５区は遺構・遺物は確認できなかったことから、以後、土捨場として利用した。

５月は１区の遺構精査・２区の遺構精査及び、３区の試掘、４区の表土掘削を行った。６月は３区の表土掘削及び４区の遺構精査、７月は、３区の遺構精査・４区の遺構精査及び試掘を行っている。排出する土量を考え、５月14日から重機（BH・CD）による排土処理を開始した。以後、重機は、調査終了時まで断続的に使用した。土捨場は、調査区の南側（調査対象外）と北側（５区）の２箇所に設け、連日、重機による残土の搬出作業を行った。７月以降、連日30度を超える真夏日が続いており、野外作業は継続して行い、併行して土壌水洗・仕分け等の作業を事務所内で行っている。

調査区の全容が見え始めた７月21日に現地説明会を行った。以後、作業の進行に併せて航空写真撮影を行った。遺構数がほぼ確定し、調査終了の目処が付いた８月10日に終了確認を受け、調査を終了して撤収した。

②　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡

調査期間は10月９日～10月25日で、作業実働日数は13日であった。作業員の登録人数は当初６人で始まり、一日の平均稼働作業員数は４人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

10月９日㈫　調査開始、作業員登録６人

10月24日㈬　航空写真撮影（東邦航空）

10月25日㈭　終了確認。調査終了。

実際の調査は、隣接する八木沢駒込Ⅰ遺跡の調査と併行して行われた。　（阿部）

2　室　内　整　理

八木沢Ⅱ遺跡の室内整理の期間は、平成19年11月１日～平成20年３月31日で、整理に従事した作業員は１名である。八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡の室内整理の期間は、平成19年12月３日～平成19年12月14日である。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

（1）遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、第二原図を作成してトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で入手した情報をそのまま保存することとし、打ち出したデータ

は、手実測で記録したその他の実測図と合わせて、マイラー用紙に第２原図を作成している。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

（2）遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を台帳に登録し、その登録No.を全破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物はグリッドごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実物大とし、トレースは遺物の状況に応じて実物大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・炭化材の年代測定の分析は外部の専門家に委託した。

（3）遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

a　土器

はじめに出土地点別に重量計測を行った。土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、原則としては計測値（器高・口径・底径）１箇所以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化した。破片資料は、優先的に口縁部破片を選択したが、一部胴部破片も選んでいる。そして、該当する土器の型式名を記録して数的処理を行った。底部破片は、底部圧痕・調整が認められる破片を選別して図化した。掲載にあたっては、縄文・弥生土器と土師器を分けて掲載した。

b　石器

石器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物を優先して図化することにし、それ以外の石器は、観察表・写真を掲載するに留めた。

c　土製品・石製品

土製品・石製品は、出土したすべてを対象として、仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点について、観察表・図・写真を掲載した。

d　陶磁器

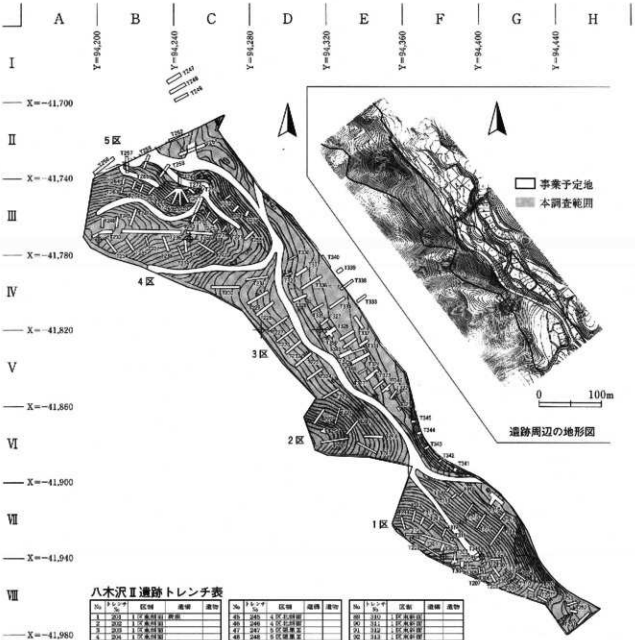
陶磁器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物及び19世紀代までの陶磁器を可能な限り図化することにし、それ以外の陶磁器は、観察表・写真を掲載するに留めた。

e　鉄製品・ガラス製品

鉄製品・ガラス製品は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点の観察表・図・写真を掲載した。

f　植物遺存体

炭化種実と炭化材がある。炭化種実・炭化材とも、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行った。炭化種実は、観察表・写真掲載とした。炭化材は、観察表のみの掲載とし、樹種名を掲載するに留めた。なお、遺構内出土の資料を中心に炭化種実２点・炭化材６点について、専門家による種実同定と放射性炭素年代測定を行い、分析結果を掲載した。（阿部）



八木沢Ⅱ遺跡トレンチ表

No.	トレンチ No.	区域	遺構	遺物
1	203	1区亀岡面	畑跡	
2	203	1区亀岡面		
3	204	1区亀岡面		
4	205	1区亀岡面		
5	206	1区亀岡面		
6	206	1区亀岡面		
7	207	1区亀岡面		
8	208	1区亀岡面		
9	209	1区亀岡面		
10	210	1区亀岡面		
11	211	1区長石沢面		
12	212	1区長石沢面		
13	213	1区長石沢面		
14	214	1区長石沢面		
15	215	1区長石沢面		
16	216	1区長石沢面		
17	217	2区長石沢面		
18	218	2区長石沢面		
19	219	2区長石沢面		
20	220	2区河原面		
21	221	2区イ尻面	土坑	
22	222	2区長石沢面		
23	223	2区長石沢面		
24	224	2区長石沢面		
25	225	2区長石沢面		
26	226	2区長石沢面		
27	227	2区長石沢面		
28	228	2区長石沢面		
29	229	2区長石沢面		
30	230	2区長石沢面		土師
31	231	2区長石沢面		石器
32	232	2区長石沢面		
33	233	2区長石沢面		
34	234	2区長石沢面		
35	235	2区長石沢面		
36	236	2区尾根	7,8,9区一つ	土師
37	237	2区長石沢		土師
38	238	2区長石沢		土師
39	239	2区長石沢		
40	240	2区尾根		
41	241	2区亀岡面		
42	242	2区亀岡面		
43	243	2区亀岡面		土師
44	244	2区亀岡面		
45	245	2区亀岡面		
46	246	2区亀岡面		
47	247	2区亀岡面		
48	248	2区亀岡面		
49	249	2区亀岡面		
50	250	2区亀岡面		
51	251	1区鉢山沢		
52	252	1区鉢山沢		
53	253	1区鉢山沢		
54	254	2区尾根先		
55	255	2区尾根先		
56	256	2区尾根先		
57	257	2区尾根		
58	258	2区尾根		
59	259	2区尾根		
60	260	3区尾根	土師	
61	261	3区尾根		
62	262	3区尾根		
63	263	4区石神面		
64	264	4区石神面		
65	265	4区石神面		
66	266	4区石神面	土師	
67	267	4区石神面		
68	268	4区石神面	土師	
69	269	4区石神面	土師	
70	270	4区石神面	土師	
71	271	4区石神面		
72	272	4区石神面		
73	273	4区東沢砂防		
74	274	4区東沢砂防		
75	275	4区東沢砂防		
76	276	4区東沢砂防		
77	277	4区東沢砂防		
78	278	4区東沢砂防		
79	279	4区東沢砂防		
80	301	1区白石砂防		
81	302	1区竹尻南		
82	303	1区白石砂防		
83	304	1区白石砂防		
84	305	1区白石砂防		
85	306	1区白石砂防		
86	307	1区白石砂防		
87	308	1区白石砂防		
88	309	1区白石砂防		
89	310	1区白石砂防		
90	311	1区白石砂防		
91	312	1区白石砂防		
92	313	1区白石砂防		
93	314	1区白石砂防		
94	315	1区白石砂防		
95	316	1区白石砂防		
96	317	1区白石砂防		
97	318	1区白石砂防		
98	319	1区白石砂防		
99	320	1区白石砂防		
100	321	1区白石砂防		
101	322	1区白石砂防		
102	323	1区白石砂防		
103	324	1区白石砂防		
104	325	1区白石砂防		
105	326	1区白石砂防		
106	327	1区白石砂防		
107	328	1区白石砂防		土師
108	329	1区白石砂防		
109	330	1区白石砂防		
110	331	1区白石砂防		
111	332	1区白石砂防		土師
112	333	1区白石砂防		
113	334	1区白石砂防		
114	335	1区白石砂防		
115	336	1区白石砂防		土師
116	337	1区白石砂防		
117	338	1区白石砂防		
118	339	1区白石砂防		石器？
119	340	1区白石砂防		
120	341	1区白石砂防		
121	342	1区白石砂防		縄文
122	343	1区白石砂防		
123	344	1区白石砂防		
124	345	1区白石砂防		
125	346	1区白石砂防		
126	347	1区白石砂防		
127	348	1区白石砂防		
128	349	1区白石砂防		
129	350	1区白石砂防		

トレンチNo.280～300：欠番

第７図　トレンチ位置図

Ⅳ　八木沢Ⅱ遺跡

1　検出遺構

（1）検出遺構の概要（第8～28図）

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡4棟、古代の竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構2棟、陥し穴状遺構6基、土坑24基、焼土遺構2基、土器埋設遺構2基、炭窯跡2基である。

遺構の占地をみると、縄文時代の遺構のうち竪穴住居跡や大形の土坑類は、調査区北端の尾根上に占地し、古代の竪穴住居跡は尾根の裾にあたる緩斜面に占地している。調査区南端の南斜面では現代の炭窯跡が検出された。時期によって遺構の占地が異なる特徴がある。以下、遺構毎に詳述する。

（阿部）

（2）竪穴住居跡（第10～12図）

縄文時代中期の竪穴住居跡が4棟、古代の竪穴住居跡が2棟、計6棟が検出された。いずれも斜面上に築かれており、遺存状態はよくない。立地をみると、縄文時代の住居跡は、調査区北端のやせ尾根上にSI01・03・06の3棟と、その尾根から谷に向かう、谷頭にあたる箇所（Ⅲ区）でSI02が検出された。古代の住居跡はその尾根から谷に向かう西斜面上（Ⅲ区）からSI04・05の2棟が検出された。

（八重畑）

SI01竪穴住居跡

遺構（第10図、写真図版3）

［位置・検出状況］ⅢB7h・8hグリッド。尾根中央にトレンチを入れた段階で、表土直下から多数の縄文土器片と炉の焼土を検出した。その後、炉より斜面上部である西側に、暗褐色土の広がりを確認した。遺構確認面はⅣ層である。

［重複関係］SI03、SKI01、SK08を切る。SK07、SZ02に切られる。

［規模・平面形］径4.39×(2.26)mで、円形基調と推定される。

［覆土・堆積状況］暗褐色土・明黄褐色土を主体とする。自然堆積とみられる。

［壁・床面］壁・床面とも、斜面上部にあたる住居跡西半で明瞭に残存する。壁は外傾して立ち上がる。床面は西側では基盤層であるⅣ層を床面としているが、斜面下部である東側ではⅢ層を床面としていたものとみられ、土砂の流出などの要因により、残存していなかった。

［柱穴・配置］PP1～PP14の14個が検出された。西側半分から検出される柱穴は、規模が30～50cmで深さは30～60cmである。一方、東側半分から検出された柱穴は、規模が90～100cm前後と大きくなる。配置は不明である。

［炉］地床炉である。住居跡中央より、やや北西寄りに位置すると考えられる。SK07に切られ、三日月状に残存する。規模は66×(33)cmを測る。焼土の厚さは16cmを測る。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第29・32・41・42・46図、写真図版22・29・30・33・34）

［出土状況］覆土、床上、柱穴内から縄文土器片（総重量4390.6g）、石器、炭化種実が出土している。

［土器］縄文土器（1～8）。
［石器］石鏃（151）・楔形石器（155）・不定形石器（157）・磨石（165・166）。
［石製品］三角形状石製品（201）。
［炭化種実］コナラ属（251）。
時期　出土遺物からみて、縄文時代中期末葉と思われる。　（八重畑）

SI02竪穴住居跡

遺構（第11図、写真図版4）
［位置・検出状況］Ⅳ C 4 b～5 cグリッド。Ⅱ層で黒褐色土の広がりとして確認した。当該地点の表土除去中にトレンチを入れたところ、遺構の覆土状の堆積層と床面と思われる平坦面を確認したことから、住居跡の可能性を考えて調査を行った。このトレンチにより住居跡の北東側の床・壁の一部を失っている。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］南側が調査区域外であるため正確な規模・形状は不明である。残存している部分は、径5.54×(3.26)mで、残された壁は曲線的であり、平面形は円形基調と思われる。
［覆土・堆積状況］黒褐色土・にぶい黄褐色土・暗褐色土から構成される。自然堆積と考えられる。
［壁・床面］壁・床は、Ⅲ層を掘り込んでつくられている。残存している北壁は外傾して立ち上がる。壁高は126.3cmである。床はほぼ平坦だが、西から東にかけて若干傾斜する。壁の立ち上がりが確認された北西側は、壁際が帯状の高まりを持って床面より一段高くなっている。
［柱穴・配置］PP 1～9の9基を確認した。PP 1・2は主柱になる可能性がある。その他は、壁際に設けられた柱穴で規模が小さい。柱穴の開口部が住居跡の内側に向くように掘り込まれている柱穴がある。
［炉］地床炉が1基確認されている。焼成面が床面よりやや高く、凹凸があることなど若干の問題があるが、炉跡と認定した。炉の位置は、推定される住居跡の形状のなかで、北寄りの位置に当たる。炉の規模・平面形は、径61×31cmの不整形である。焼土の厚さは4cmである。
遺物（第29・30・32・33・39・41～45図、写真図版22・23・28～30・32）
［出土状況］覆土下位から床上にかけて土器（総重量3,606g）・土製品・石器・炭化材が出土している。炭化材は、住居跡の北西壁に沿って出土している。磨石が4点出土している。
［土器］縄文土器（9～23）。
［土製品］きのこ形土製品（141）。
［石器］不定形石器（158）・磨製石斧（162・163）・磨石（167～170）・台石（190・191）。
時期　出土した遺物から縄文時代中期末葉と推定される。出土した炭化材（クリ）について放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代4090±40年の結果が得られている。
（阿部）

SI03竪穴住居跡

遺構（第12図、写真図版5）
［位置・検出状況］ⅢB 8 h、9 hグリッド。人力で表土を除去していたところ、Ⅲ層上から石囲炉を検出した。その後、石囲炉より斜面上部である北東側に黄褐色土の広がりを確認した。
［重複関係］SI01に切られる。SI06を切る。またSK17と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模・平面形］住居跡東南部は斜面のため、土層流出などの理由で失われていた。残存部で径（3.26）×（2.48）mを測る。円形基調であると推定される。

［覆土・堆積状況］黄褐色土、褐色土など5層の堆積である。自然堆積と考えられる。

［壁・床面］検出された北部の壁も、SI06によりⅣ層を壁としていなかったため、判断が難しかったが、覆土の差異と、SI03の床面がSI06の床面より若干低く、床から壁への立ち上がりが少しではあるが認められたため、SI03の壁を特定することができた。床面は斜面上部では基盤層であるⅣ層を利用しているが、斜面下部はⅢ層を床面としていたものとみられ、土層流出などの要因により残存していなかった。

［柱穴・配置］PP１～11の11個が検出された。規模は30～50cm前後で、深さは20～50cm前後を測る。配置は不明である。

［炉］石囲炉である。住居跡のほぼ中央に位置すると考えられる。炉石は６個の流紋岩で弧を描くように配置されていた。礫はすべて節理面で剥離されたものを用い、炉の内側に面をあわせるように配置している。しかし、この炉石は床面と推定した部分より10cm程度高いレベルで検出されている。これが床面の掘りすぎによるものなのか、木の根などの自然営為により、上に持ち上げられたものなのかは判断がつかなかった。また石囲炉から80cm程斜面を下ったところに、炉石が流れた落ちたものとみられる、同じ石材の礫が１個検出されている。石囲炉内に焼土はほとんど確認されなかった。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第30・33・43図、写真図版23・31）

［出土状況］覆土、石囲炉内から縄文土器片（総重量737.6ｇ）、石器が出土している。

［土器］縄文土器（24～28）。

［石器］磨石（171）・砥石（193）。

時期　出土遺物からみて、縄文時代中期中葉と思われる。出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代90±30BPの結果を得ている。試料採取に際して誤りがあった可能性がある。

（八重畑）

SI04竪穴住居跡

遺構（第13図、写真図版６）

［位置・検出状況］ⅢD10ｇ～ⅣD１ｇグリッド。Ⅳ層で黒褐色土と焼土の広がりを確認し、住居跡の可能性を考えた。その後、煙道の煙出し部分を確認したことから古代の竪穴住居跡と認識して調査を行った。

［重複関係］遺構の遺存状況が悪いため、明確にできないが、平面的にはSK14陥し穴状遺構と重複していた可能性がある。

［規模・平面形］斜面下の西側が残っていないため明確ではない。残存している部分は、一辺3.19×（1.35）mで、残された壁は直線的である。主軸方向はN－86°－Wである。

［覆土・堆積状況］不明である。カマドの燃焼部の上には黒褐色土が堆積していた。

［壁・床面］詳細は不明である。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は41.1cmである。床はほぼ平坦であるが、西から東に緩く傾斜している。

［柱穴・配置］PP１・２の２個を確認した。カマドを挟んで対になるように位置している。住居跡全体の柱配置は不明である。

［カマド］住居跡の西壁中央より南側に偏った位置に設けられている。斜面上方に当たる。袖部は、

地山の削り出しと思われるが、燃焼部の南側にわずかに残る程度である。燃焼部は、径40cmほどの範囲で焼土が形成されており、焼土の厚さは2cmほどである。煙道は刳り貫き式で、径20cm、長さ1mの横穴を掘り抜いてつくられている。2方向から掘った穴の接合部は、きれいに接合せず、微妙に食い違っている。煙道の覆土には、径15～20cmほどの亜角礫が詰められていた。

［その他の付属施設］カマドの北側で、部分的に貼床が施されていた。

遺物

［出土状況］土器片（総重量30.3g）が出土している。小片のため掲載していない。

時期　詳細は不明だが、古代と考えられる。　（阿部）

SI05竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版6・7）

［位置・検出状況］ⅣD2fグリッド。Ⅲ層で、黒褐色土の広がりとして検出した。検出した段階で、斜面下方は失われていたが、斜面上方の一辺が直線的であったことから、古代の住居跡の可能性を考えて調査を行った。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］斜面下の西側が残っていないため明確ではない。残存している部分は、一辺3.71×(1.45) mで、残された壁は直線的である。主軸方向はN－58°－Wである。

［覆土・堆積状況］黒褐色土・黒色土・黄褐土から構成される。自然堆積と考えられる。

［壁・床面］詳細は不明である。Ⅳ層を掘り込んでつくられている。残存している西壁は外傾して立ち上がる。壁高は67.5cmである。床はほぼ平坦である。

［柱穴・配置］確認できていない。

［カマド］住居跡の西壁中央より北側に偏った位置に設けられている。斜面の上方に当たる。袖部は、燃焼部の両側に礫を心材として周囲に粘土を貼りつけて構築されていた。燃焼部は、径60×50cmほどの焼土の広がりが形成されていた。焼土の厚さは5cmほどである。煙道は刳り貫き式で、径25cm、長さ1.4mの横穴を掘り抜いてつくられている。煙出し部の深さは1mを測る。煙道の覆土には、黒褐色土・褐色土が堆積する。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第30・38・39図、写真図版27・28・33）

［出土状況］覆土の下位から床上にかけて、土器（総重量10,409g）・石器の遺物が多く出土している。

［土器］土師器（29・121～130）。

［石器］台石（192）。

時期　出土遺物から9世紀中頃と考えられる。

SI06竪穴住居跡

遺構（第12図、写真図版8）

［位置・検出状況］ⅢB8g・9hグリッド。SI03を精査中に、その西側から、別の遺構と見られる覆土（褐色土・黄褐色土）の広がりが確認され、SI03の調査終了を待って、精査を開始した。遺構確認面はⅣ層である。

［重複関係］SI03に切られる。

［規模・平面形］残存部で径（2.36）×（2.43）mを測る。円形基調と推定される。

［覆土・堆積状況］上部は黄褐色土、下部は明黄褐色土主体である。覆土上層から炭化物粒～ブロックが多く認められ、覆土下層には炭化材が多く含まれていた。この堆積状況から焼失住居の可能性が考えられるが、住居跡の大半が切りあいや、土砂の流出などにより失われているため、不明である。

［壁・床面］木根の影響を受けている部分もあるが、ほぼ外傾して立ち上がる。床面はⅣ層を利用している。

［柱穴・配置］PP１～４の４個を検出した。規模は直径30～40cm程度で、深さは30～60cmを測る。PP１とPP２には炭化物粒が多く含まれていた。柱穴の配置は不明である。

［炉］検出されなかった。

［その他の付属施設］なし。

遺物

［出土状況］PP４から微細な土器片（総重量4.2g）が出土している。また、覆土３層から炭化材（クリ・ケヤキ・ナラ）が４点出土している。

時期　遺構の新旧関係からみて、縄文時代中期中葉と思われる。なお炭化材のうち１点について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代4270±40BPとの結果がでている。　（八重畑）

（３）竪穴状遺構（第15図・写真図版８）

Ⅳ区の尾根上で検出した２棟を登録した。覆土が浅く、不明瞭な点が多いが、壁の立ち上がりが一部分でも検出されたこと、また床面が平坦で、柱穴が確認できたことから、竪穴状遺構とした。

（八重畑）

SKI01竪穴状遺構

遺構（第15図、写真図版８）

［位置・検出状況］ⅢＢ７ｈ・８ｉグリッド。当初、暗褐色土の広がりを土坑と想定し、精査を開始したが、断面の観察により、二次堆積のマサ土を竪穴状遺構の床面として、そこから柱穴を掘り込んでいることが判明した。その後、周辺にサブトレンチを入れるなどして、遺構範囲を特定し、精査を再び開始した。よって、当初土坑として掘り進めた部分の床面は消失している。検出面はⅢ層である。

［重複関係］SI01に切られる。

［規模・平面形］残存部で径（3.40）×（3.04）mを測る。平面形は円形基調と推定される。

［覆土・堆積状況］暗褐色土・明黄褐色土が主体である。自然堆積とみられる。

［壁・床面］壁は外傾して立ち上がるが、一部木根の影響で歪みがある。床面は二次堆積のマサ土を利用している。

［柱穴・配置］PP１～７の７個を検出した。配置は不規則である。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第30・33・43図、写真図版23・31）

［出土状況］覆土、柱穴内から縄文土器片（総重量49.0g）、覆土上層から石器が出土した。

［土器］縄文土器（30）。

［石器］磨石（172・173）。

時期　遺構の新旧関係から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

SK02竪穴状遺構

遺構（第15図、写真図版８）

［位置・検出状況］ⅢＢ８ｊ・ⅢＣ９ａグリッド。当初、木根が密集していることから、平面から遺構の存在を確認していなかったが、ベルトを設定して表土を除去していたところ、Ⅳ層から柱穴らしきプランを検出した。その後、周辺を精査し、西側に壁の立ち上がりを検出したため、竪穴状遺構とした。検出面はⅣ層である。

［重複関係］SK10・12・16と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模・平面形］不明な点が多いが、残存部で径1.8mを測る。形状は不明である。

［覆土・堆積状況］覆土は浅く、暗褐色の腐植土や、Ⅳ層起源の黄褐色土が堆積している。自然堆積とみられる。

［壁・床面］壁は東側で検出されている。外傾してなだらかに立ち上がる。床面はⅣ層を用いている。

［柱穴・配置］ＰＰ１～10の10個を検出した。規模は直径30～45cm前後、深さは30～60cm前後である。配置は不規則である。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第30・33・44図、写真図版23・31）

［出土状況］覆土、柱穴内から縄文土器片（総重量347.4ｇ）、石器が出土している。

［土器］縄文土器（31・32）。

［石器］磨石（174）。

時期　出土遺物からみて、縄文時代中期中葉～後葉と思われる。

（４）陥し穴状遺構（第16・17図、写真図版９・10）

形状から、陥し穴としての機能が考えられる穴である。６基確認された。そのうち５基がⅣＤ～ＶＤグリッドの平坦面に位置する。平面形は、長方形、楕円形、溝状などの形を呈し、副穴を伴うものもある。出土遺物がないため、詳細な時期は不明であるが、縄文時代と推測される。

（阿部）

SK02陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版９）

［位置・検出状況］ⅦＥ６ａグリッド。Ⅳ層で褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径157×94cm、底部径128×44cm、平面形は楕円形を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは、126cmである。

［覆土・堆積状況］褐色土・黒褐色土から構成される。覆土中には植根が多量に入り、締まりが弱い。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ真直ぐに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK14陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版９）

［位置・検出状況］ⅣＤ１ｇグリッド。Ⅳ層で褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］東側にあるSI04竪穴住居跡と重複していた可能性がある。

［規模・平面形］規模は、開口部径223×44cm、底部径149×22cm、平面形は溝状を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは55cmである。

［覆土・堆積状況］褐色土・黄褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面はほぼ平坦である。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK20陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版９）

［位置・検出状況］ⅣＤ２ｉ～３ｊグリッド。Ⅲ層で黒色土の広がりとして検出された。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径192×117cm、底部径158×46cm、平面形は楕円形を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは、107cmである。

［覆土・堆積状況］黒色土・明黄褐色土・暗褐色土から構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は直立的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

［その他の付属施設］底面に副穴を２個確認した。開口部が10cmに満たない細長い穴である。逆茂木を立てた痕跡であると思われる。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK22陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版10）

［位置・検出状況］ＶＥ８ｈ～９ｈグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径237×76cm、底部径289×11cm、平面形は溝状を呈するが、中央付近に膨らみを持つ。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは、138cmである。

［覆土・堆積状況］黒褐色土・暗褐色土・明黄褐色土から構成される。自然堆積と思われる。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は、長軸方向の両端部が開口部より奥に入り込んでいる。底面は、湾曲しながら長軸方向の東から西に傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK25陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版10）

［位置・検出状況］ＶＥ８ｈ～９ｈグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径237×76cm、底部径289×11cm、平面形は楕円形を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは、138cmである。

［覆土・堆積状況］黒色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土から構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

［その他の付属施設］底面に副穴を２個確認した。径４～６cmの細長い穴である。逆茂木を立てた痕跡であると思われる。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

SK30陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版10）

［位置・検出状況］ＶＥ３ｆ～３ｇグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径245×27cm、底部径228×17cm、平面形は溝状を呈する。等高線に沿って長軸が設けられている。深さは、30cmである。

［覆土・堆積状況］暗褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面は直線的で長軸方向の東から西にかけて緩く傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明だが、縄文時代と推定される。

（５）上　坑（第18図、写真図版23）

用途不明のものを含む穴を一括した。24基ある。このなかには、北尾根でまとまって確認された、定形的な規模・形状をもち、貯蔵穴としての用途が想定される土坑８基を含めている。時期は、概ね縄文時代と考えられるが、出土遺物を欠くものについては、時期の詳細は不明である。また、SK01・02土坑は、SW01・02炭窯跡との関連性が考えられ、現代の遺構の可能性がある。（阿部）

SK01土坑

遺構（第18図、写真図版11）

［位置・検出状況］ＶＣ６ｇ～６ｈグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出された。南側が調査区域外にかかる。

［重複関係］SK03を切っている。

［規模・平面形］規模は、開口部径213×(194)cm、底部径55×38cm、平面形は円形を呈する。深さは、147cmである。

［覆土・堆積状況］暗褐色土・褐色土で構成される。
［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は緩く湾曲している。
［その他の付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。SW01・03炭窯跡との関連も考えられる。

SK03土坑

遺構（第18図、写真図版11）
［位置・検出状況］ⅧG６ｇグリッド。SK01精査中に確認されたものである。SK01の壁面から黒褐色土の覆土の広がりとして検出された。南東側が調査区域外にかかる。
［重複関係］SK01に切られている。
［規模・平面形］規模は、開口部径（87）×（55）cm、底部径（69）×（50）cm、平面形は円形基調と思われるが、詳細は不明である。深さは、30cmである。
［覆土・堆積状況］黒褐色土・褐色土・暗褐色土で構成される。
［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は東から西に緩く傾斜する。
［その他の付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。SW01・02炭窯跡との関連も考えられる。

SK04土坑

遺構（第19図、写真図版11）
［位置・検出状況］ⅦE２bグリッド。Ⅳ層で黒色土の広がりとして検出された。その広がりは斜面の等高線に平行する形状で広がっており、断面観察から複数の土坑が重複する遺構と認識した。西側でSK05と重複しており、平面形状など正確に認識できていない。
［重複関係］SK05と重複していた可能性がある。
［規模・平面形］規模は、開口部径（180）×210cm、底部径（140）×160cm、平面形は円形基調だが、不整形を呈する。深さは、30cmである。
［覆土・堆積状況］黒色土で構成される。
［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は南から北に傾斜する。
［その他の付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK05土坑

遺構（第19図、写真図版11）
［位置・検出状況］ⅦE２a～２bグリッド。Ⅳ層で黒色土の広がりとして検出された。その広がりは斜面の等高線に併行する形状で広がっており、断面観察から複数の土坑が重複する遺構と認識した。東側でSK04、西側でSK06と重複しており、平面形状を正確に認識できていない。
［重複関係］SK04・06と重複する。SK06を切る。
［規模・平面形］規模は、開口部径（300）×130cm、底部径（250）×130cm、平面形は不整形を呈する。

深さは、110cmである。

［覆土・堆積状況］暗褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は南から北に緩く傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK06土坑

遺構（第19図、写真図版11）

［位置・検出状況］ⅥＥ２ａグリッド。Ⅳ層で黒色土の広がりとして検出された。その広がりは斜面の等高線に併行する形状で広がっており、断面観察から複数の土坑が重複する遺構と認識した。東側でSK05と重複しており、平面形状を正確に認識できていない。

［重複関係］SK05に切られる。

［規模・平面形］規模は、開口部径（250）×190cm、底部径（240）×100cm、平面形は不整形を呈する。深さは、70cmである。

［覆土・堆積状況］黒色土・黒褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。底面は南から北に緩く傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK07土坑

遺構（第19図、写真図版11・12）

［位置・検出状況］ⅢＢ７ｈ・８ｈグリッド。SI01の床面を精査していたところ、黄褐色土の広がりとして確認した。

［重複関係］SI01の炉を切っており、SI01より新しい。

［規模・平面形］開口部径106×100cm、底部径162×139cm、円形を呈する。深さはSI01の床面から130cmを測る。

［覆土・堆積状況］全体的に黄褐色土、暗褐色土を主体とする。覆土12層で焼土と炭化物、覆土17層で炭化物が検出され、ともにその付近から土器が出土している。人為的堆積の可能性がある。

［壁・底面］底部に向かって広がるフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

［所見］貯蔵穴と考えられる。

遺物（第30・33図、写真図版23）

［出土状況］覆土上位から下位にわたって縄文土器片（総重量2560.6ｇ）が出土している。北半部の12層から一個体の深鉢（Ｐ１、№35）が土圧で押し潰されたような状態で出土し、その直下から焼土と炭化物が検出されている。また17層から深鉢（Ｐ２、№34）の破片と炭化物が出土した。

［土器］縄文土器（33～36）。

時期　出土遺物と遺構の新旧関係から、縄文時代中期末葉と思われる。なお、覆土17層から出土した炭化材（クリ）について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代3910±30BPとの結果が出て

いる。　　（八重畑）

SK08土坑

遺構（第20図、写真図版12）

［位置・検出状況］ⅢＢ８ｇ・８ｈグリッド。SI01の壁を精査中に明黄褐色土の広がりとして確認した。検出面はⅣ層である。

［重複関係］SI01のPP12に切られており、SI01より古い。

［規模・平面形］開口部径110×110cm、底部径114×111cmで円形を呈する。深さは98cmである。

［覆土・堆積状況］上部は明黄褐色土が主体で、下部は黒褐色土などが堆積している。堆積状況は不明である。

［壁・底面］底部に向かって若干広がっており、フラスコ状を呈する。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

［所見］貯蔵穴と考えられる。

遺物

［出土状況］微細な縄文土器片（総重量27.0ｇ）が覆土中～下層で出土しているが、図示し得ない。また炭化種実（252）が３～４層で出土している。種実同定の結果、コナラ属コナラ亜属の子葉との鑑定結果を得ている。

時期　遺構の新旧関係からみて、縄文時代中期中葉～後葉と思われる、なお５層から出土した炭化材（ケンポナシ属）について放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代4060±40BPとの分析結果がでている。

SK09土坑

遺構（第20図、写真図版12）

［位置・検出状況］ⅢＢ８ｉ・９ｉグリッド。Ⅳ層で黄褐色土の広がりとして確認した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部径154×143cm、底部径118×116cmの円形を呈する。深さは98cmである。

［覆土・堆積状況］上部は黄褐色土が主体で、下部は褐色土、明黄褐色土などが堆積している。堆積状況は不明である。

［壁・底面］壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、ビーカー状を呈する。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

［所見］貯蔵穴と考えられる。

遺物（第30・34図、写真図版23）

［出土状況］縄文土器片（総重量107.9ｇ）が覆土上位から下位にわたって出土した。

［土器］縄文土器（37）。

時期　出土遺物からみて、縄文時代中期中葉と思われる。

SK10土坑

遺構（第20図、写真図版12）

［位置・検出状況］ⅢＢ７ｊ・８ｊグリッド。Ⅳ層で暗褐色土、黄褐色粘土の広がりとして確認した。

［重複関係］SK102と重複しているが、新旧関係は不明である。

［規模・平面形］開口部径193×183cm、底部径147×122cmの円形で、深さは108cmである。
［覆土・堆積状況］上部は暗褐色土が主体で、下部は黄褐色土が主体である。一部に根の影響を受ける。自然堆積とみられる。
［壁・底面］壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。
［その他の付属施設］なし。
遺物（第30・34図、写真図版23）
［出土状況］覆土上層から縄文土器片（総重量62.7g）が出土している。
［土器］縄文土器（38・39）。
時期　出土遺物から見て、縄文時代中期中葉と思われる。

SK11土坑

遺構（第20図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅢC8aグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして確認した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径128×97cm、底部径112×72cmの楕円形を呈する。深さは35cmである。
［覆土・堆積状況］褐色土・黄褐色土の堆積である。堆積状況は不明である。
［壁・底面］壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。
［その他の付属施設］なし
遺物　なし。
時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、形状、覆土などから縄文時代中期と考えられる。

SK12土坑

遺構（第20図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅢB7j・ⅢC8aグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして確認した。
［重複関係］SK102と重複するが、新旧関係は不明である。
［規模・平面形］開口部径148×127cm、底部径130×90cmの楕円形を呈する。深さは54cmである。
［覆土・堆積状況］褐色土と黄褐色土の２層である。自然堆積とみられる。
［壁・底面］ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。
［その他の付属施設］なし。
遺物（第31・34図、写真図版23）
［出土状況］覆土上層から下層にわたって縄文土器片（総重量39.0g）が出土した。
［土器］縄文土器（40）。
時期　詳細な時期は不明だが、遺構の形状及び遺物からみて、縄文時代中期と思われる。

SK13土坑

遺構（第21図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅢC8aグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして確認した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径104×58cm、底部径51×23cmの不整楕円形を呈する。深さは30cmである。
［覆土・堆積状況］褐色土、黄褐色土を主体とする。自然堆積とみられる。

［壁・底面］擂鉢状に立ち上がる。底面は段差を有する。
［その他の付属施設］なし。
遺物（第31・34図、写真図版23）
［出土状況］覆土１層から縄文土器片１点（19.7ｇ）が出土している。
［土器］縄文土器（41）。
時期　詳細な時期は不明だが、遺物からみて、縄文時代中期と思われる。

SK15土坑

遺構（第21図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅢＢ８ｇグリッド。Ⅳ層で明黄褐色土の広がりとして確認した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径140×122cm、底部径94×80cmの楕円形を呈する。深さは106cmである。
［覆土・堆積状況］全体的に明黄褐色土が主体である。自然堆積とみられる。
［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、ビーカー状を呈する。底面は平坦である。
［その他の付属施設］なし。
［所見］貯蔵穴と考えられる。
遺物（第31・45図、写真図版32）
［出土状況］石器（凹石）が覆土中層より出土している。
［石器］凹石（187）。
時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土などから縄文時代中期と考えられる。

SK16土坑

遺構（第21図、写真図版14）
［位置・検出状況］ⅢＢ８ｉ・９ｊグリッド。Ⅳ層で黄褐色土の広がりとして確認した。
［重複関係］SKI02と重複するが、新旧関係は不明である。
［規模・平面形］開口部径142×133cm、底部径145×132cmの円形を呈する。深さは93cmである。
［覆土・堆積状況］上部は黄褐色土主体、下部は褐色土主体である。堆積状況は不明である。
［壁・底面］やや内傾するが、ほぼビーカー状を呈する。底面は平坦である。
［その他の付属施設］なし。
［所見］貯蔵穴と考えられる。
遺物（第31・44図、写真図版31）
［出土状況］覆土から石器（磨石）が２点出土している。そのうち１点は壁にくい込むような形で出土した。
［石器］磨石（175・176）。
時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状、遺構の新旧関係と覆土などから縄文時代中期と考えられる。

SK17土坑

遺構（第21図、写真図版14）

［位置・検出状況］ⅢＢ８ｈ・９ｉグリッド。SI03の精査中に障害となっていた杉の根を取り除いたところ、SI03とは別個の褐色土の広がりとして確認した。検出面はⅣ層である。

［重複関係］SI03と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模・平面形］開口部径131×124㎝、底部径142×133㎝の円形を呈する。深さは85㎝である。

［覆土・堆積状況］褐色土、黄褐色土、明黄褐色土などで、土壌化した炭化物粒を含む層が多くみられた。堆積状況は人為的である可能性がある。

［壁・底面］やや内傾するがビーカー状を呈する。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

［所見］貯蔵穴と考えられる。

遺物（第31・34・41図、写真図版24・29）

［出土状況］覆土上層から縄文土器片１点（228.7ｇ）と石器が出土している。

［土器］縄文土器（42）。

［石器］不定形石器（159）。

時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土などから縄文時代中期と考えられる。

SK18土坑

遺構（第21図、写真図版14）

［位置・検出状況］ⅢＢ９ｇグリッド。Ⅳ層に褐色土の広がりとして確認した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部径151×141㎝、底部径146×126㎝の円形を呈する。深さは81㎝である。

［覆土・堆積状況］上層は褐色土、下層は黄褐色土が主体である。自然堆積とみられる。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、ビーカー状を呈する。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

［所見］貯蔵穴と考えられる。

遺物（第31・34図、写真図版24）

［出土状況］微細なものも含め、縄文土器片（総重量181.7ｇ）が覆土上層から下層にわたって出土した。

［土器］縄文土器（43）。

時期　詳細な時期は分からないが、遺物・遺構の形状などから縄文時代中期と思われる。

SK19土坑

遺構（第21図、写真図版15）

［位置・検出状況］ⅢＢ９ｈグリッド。SI03の床面精査中に、黄褐色土の広がりとして確認した。

［重複関係］SI03と重複している。新旧関係は不明である。

［規模・平面形］開口部径88×68㎝、底部径58×51㎝の円形を呈する。深さは46㎝を測る。

［覆土・堆積状況］黄褐色土と褐色土の２層である。自然堆積とみられる。

［壁・底面］外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

［その他の付属施設］なし。

遺物

［出土状況］覆土から微細な縄文土器片１点（8.4ｇ）が出土しているが、図示し得なかった。

時期　縄文時代中期と思われる。

SK21土坑

遺構（第22図、写真図版15）

［位置・検出状況］ⅣＤ４ｉ～４ｊグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径408×52cm、底部径378×19cm、平面形は溝状を呈する。深さは、15cmである。

［覆土・堆積状況］暗褐色土・褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。底面は、穴の長軸方向である南西から北東に緩く傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

（阿部）

SK23土坑

遺構（第22図、写真図版15）

［位置・検出状況］ⅣＤ５ｊ～６ｊグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径102×98cm、底部径89×91cm、平面形は円形を呈する。深さは、21cmである。

［覆土・堆積状況］黒褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。底面は、ほぼ平坦である。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK24土坑

遺構（第22図、写真図版15）

［位置・検出状況］ⅣＥ３ａ～４ｂグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径（131）×96cm、底部径（84）×40cm、平面形は円形基調である。深さは、26cmである。

［覆土・堆積状況］黒褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。底面は、南西から北東方向に向かって傾

斜している。
［その他の付属施設］なし。
遺物（第31・34図、写真図版24）
［出土状況］覆土から土器（7.6g）が出土している。
［土器］縄文土器（44）。
時期　縄文土器が出土しているが、詳細は不明である。

SK26土坑

遺構（第23図、写真図版16）
［位置・検出状況］ⅢB7gグリッド。Ⅳ区北斜面のⅢ層から石棒が出土し、その周りに黄褐色土の広がりとして確認した。断面の観察により、当初遺構として想定していた範囲より、小さい土坑であることが判明したため、土坑南東側の壁は、ベルト部以外は失われている。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径41×(25)㎝、底部径20×(16)㎝の楕円形を呈する。深さは36㎝である。
［覆土・堆積状況］黄褐色土1層の堆積である。堆積状況は不明である。
［壁・底面］外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
［その他の付属施設］
遺物（第31・46図、写真図版33）
［出土状況］石棒が横位の状態で、覆土上部から出土している。
［石製品］石棒（202）。
時期　詳細な時期は不明だが、遺物からみて、縄文時代中期と思われる。

（八重畑）

SK27土坑

遺構（第22図、写真図版16）
［位置・検出状況］ⅢB7i・8iグリッド。SKI01の床面の検出時に、明黄褐色土の広がりとして検出した。
［重複関係］SKI01と重複するが、新旧関係は不明である。
［規模・平面形］開口部径123×109㎝、底部径95×93㎝の円形である。深さはSK27の床面から36㎝を測る。
［覆土・堆積状況］明黄褐色土と黄褐色土の2層で構成される。自然堆積とみられる。
［壁・底面］外傾して立ち上がる。底面は平坦である。
［その他の付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土などから縄文時代中期と考えられる。

SK28土坑

遺構（第23図、写真図版16）
［位置・検出状況］ⅣC5c～5eグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径143×107㎝、底部径56×32㎝、平面形は楕円形である。深さは、56㎝である。

［覆土・堆積状況］黒褐色土・黒色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。底面は、緩く湾曲している。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

（阿部）

SK29土坑

遺構（第23図、写真図版16）

［位置・検出状況］ⅢＣ９ｆグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径85×55㎝、底部径43×13㎝、平面形は楕円形である。深さは、29㎝である。

［覆土・堆積状況］暗褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。底面は、緩く湾曲している。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

（６）焼土遺構（第24図、写真図版17）

２基検出した。いずれも３区の谷部での検出である。焼土遺構の周囲では、柱穴や壁など住居跡としての痕跡は確認できていない。そのため、単独の遺構と認識し、焼土遺構として報告する。

（阿部）

SN01焼土遺構

遺構（第24図、写真図版17）

［位置・検出状況］ⅣＥ５ｂグリッド。Ⅱ層黒褐色土中でにぶい赤褐色土として検出された。同一検出面で南東側に黒色土の広がりを検出しているが、遺構にはならなかった。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］径33×14㎝の不整な楕円形を呈する。南東側に長さ80㎝ほどの長さで、部分的に石組を伴う。

［被熱土］にぶい赤褐色の焼土で、厚さは３㎝ほどである。

［所属施設］なし。

遺物

［出土状況］焼土から炭化材が出土している。樹種はアサダ。放射性年代測定では補正年代4040±30の結果が得られている。

時期　出土遺物がなく、時期の詳細は不明だが、年代測定から縄文時代中期と推定される。

SN02焼土遺構

遺構（第24図、写真図版17）

［位置・検出状況］　ⅣD４bグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりのなかにある焼土を確認した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］黒褐色土の広がりは、径50×40cm、確認された焼土の広がりは二箇所で、それぞれの焼土の広がりは、径10×９cm、径17×15cmである。

［被熱土］明黄褐色土の焼土で、焼土の厚さは、４cmと13cmほどである。

［所属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物がなく、時期の詳細は不明である。

（７）土器埋設遺構

土器埋設遺構は、Ⅳ区尾根上から２基検出されている。どちらも単独で検出されており、屋外にあったと思われる。当初、４基を登録して調査したが、掘り方が確認されず、除外したものが２基あるため、欠番が生じている。

（八重畑）

SZ02土器埋設遺構

遺構（第24図、写真図版17）

［位置・検出状況］ⅢＢ７ｇ・７ｈグリッド。SI01の壁を検出している際に、埋設土器の一部が出土し、その周辺をさらに慎重に掘り下げたところ、掘り方とみられる明黄褐色土の広がりを確認した。SI01の壁の調査と同時に検出されたため、掘り方の東半分は失われている。検出面はⅣ層である。

［重複関係］SI01を切る。

［掘り方の規模・平面形・覆土］開口部は径28×(24)cmを測り、円形を呈するものと思われる。覆土は明黄褐色土などの３層が堆積している。

［埋設方法］正立した状態で埋設している。

［土器内部の様子］明黄褐色土。

［所属施設］なし。

遺物（第31・34図、写真図版24）

［土器］縄文土器（46）。深鉢形土器で底部～胴部下半部である。

時期　遺構の新旧関係と遺物からみて、縄文時代中期末葉と思われる。

SZ04土器埋設遺構

遺構（第24図、写真図版17）

［位置・検出状況］ⅢＢ７ｇグリッド。Ⅳ区北斜面の土層の堆積が不明瞭な箇所に、サブトレンチを入れたところ、埋設土器の一部が出土した。その後、周辺を慎重に掘り下げ、掘り方とみられる明黄褐色土の広がりを確認した。このため、サブトレンチ部分の東半分の壁は失われている。

［重複関係］なし。

［掘り方の規模・平面形・覆土］開口部は径60×(53)cmを測る。円形を呈すると思われる。覆土は明

黄褐色土の1層である。
［埋設方法］口縁部が上を向いた状態で、斜位に埋設している。
［土器内部の様子］黄褐色土。
［所属施設］なし。
遺物（第31・34図、写真図版24）
［土器］縄文土器（47）。深鉢形土器の底部～胴部上半部である。
時期　詳細な時期は不明だが、遺物からみて、縄文時代中期と思われる。

（8）溝跡（第25～27図、写真図版18・19）

溝状を呈する遺構で7条検出された。検出された地点から2つに分けることができる。ひとつは、3区の谷部で確認された6条の溝跡で、旧地形である谷部に沿って形成されており、調査時にも湧水を確認している。もうひとつは、2区の斜面地で確認された溝跡で、傾斜に直交して形成されており、人工的に設けられた可能性が高い。いずれの溝跡も時期を明確にできない。

（阿部）

SD01溝跡

遺構（第25図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅣC5eグリッド～ⅣD6cグリッド。Ⅲ層で黒色土の細長い広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。東から西に向かう傾斜地において、谷部の地形に沿って等高線に直交するように形成されている。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部の長さ（34）m、幅130～230cm。斜面上方の東側から斜面下方の西側に緩く蛇行しながら下りている。東側の斜面下方で溝跡は収束すると思われるが、終点は確認できていない。
［覆土・堆積状況］径10cm大の亜角礫を20％含む黒色土から構成される。
［壁・底面］Ⅲ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。底面は湧水がある。
［付属施設］なし。
遺物（第31・44図、写真図版31）
［出土状況］覆土から土器（21.9g）・磨石が出土している。
［石器］磨石（177・178）。
時期　縄文土器片は出土しているが、時期の詳細は不明である。

SD02溝跡

遺構（第25図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅣD6d～ⅣD4hグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の細長い広がりとして検出された。西から東に向かう傾斜地において、斜面に沿って形成されている。
［重複関係］東側でSD03と重複するが、SD03を切っている。
［規模・平面形］開口部の長さ（14）m、幅50～90cm、深さ20cmである。南西から北東方向に向かって緩く蛇行しながら下っている。溝跡が始まる斜面上方において始点は確認されていない。
［覆土・堆積状況］黒褐色土で構成される。

［壁・床面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面は緩く湾曲する。
［付属施設］なし。
遺物（第31・34図、写真図版24）
［出土状況］覆土から土器（55.8g）が出土している。
［土器］縄文土器（45）。
時期　縄文土器が出土しているが、時期の詳細は不明である。

SD03溝跡

遺構（第25図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅣD5d～ⅣD4hグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の細長い広がりとして検出された。西から東に向かう傾斜地において、斜面に沿って形成されている。
［重複関係］西側でSD02と重複するが、SD02に切られている。
［規模・平面形］開口部の長さ（15.2）m、幅70～130cm、深さ20cmである。南西から北東方向に向かって緩く蛇行しながら下っている。溝跡が始まる斜面上方において始点は確認されていない。
［覆土・堆積状況］径10cm大の亜角礫を50%含む黒褐色土で構成される。
［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾する。底面は緩く湾曲する。
［付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

SD04溝跡

遺構（第25図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅣD4d～ⅣD4fグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の細長い広がりとして検出された。西から東に向かう傾斜地において、斜面に沿って形成されている。ⅣD5c付近で、東側と西側に別れるが、同一の遺構と判断している。北側でSD05と隣接している。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部の長さ（25.5）m、幅70～130cm、深さ50cmである。西から東方向に向かって緩く蛇行しながら下っている。溝跡が始まる斜面上方において始点は確認されていない。
［覆土・堆積状況］径5cm大の亜角礫を10%含む黒褐色土で構成される。
［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾する。底面は緩く湾曲する。
［付属施設］なし。
遺物　なし。
時期　出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

SD05溝跡

遺構（第25図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅣD4d～ⅣD4gグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の細長い広がりとして検出された。西から東に向かう傾斜地において、斜面に沿って形成されている。ⅣD5c付近で、東側と西側に別れるが、同一の遺構と判断している。南側でSD04と隣接している。
［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長さ（26.0）m、幅100～140cm、深さ70cmである。西から東方向に向かって緩く蛇行しながら下っている。溝跡が始まる斜面上方において始点は確認されていない。

［覆土・堆積状況］径５cm大の亜角礫を10％含む黒褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾する。底面は緩く湾曲する。

［付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

SD06溝跡

遺構（第25図）

［位置・検出状況］ⅣＣ５ｅグリッド。Ⅲ層で黒色土の細長い広がりとして検出した。東側が調査区域外にかかる。東から西に傾く斜面において、等高線に直交して形成されている。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長さ（280）cm、幅110cmで、北東－南西方向に長軸をもつ。深さは、30cmほどである。

［覆土・堆積状況］黒色土で構成される単層である。

［壁・底面］壁・底面ともⅢ層を掘り込んでいる。床面は調査時に湧水が確認された。壁は外傾する。底面は湾曲する。

［付属施設］なし。

遺物（第31・47図、写真図版34）

［出土状況］覆土から陶磁器が出土している。

［陶磁器］陶磁器（211）。

時期　19C代の碗が出土しているが、詳細は不明である。

SD09溝跡

遺構（第27図、写真図版19）

［位置・検出状況］ＶＥ５ｇ～ＶＥ10グリッド。Ⅲ層で、黒色土の細長い広がりとして検出した。南西から北東に向かって低くなる斜面で、等高線に沿って形成されている。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長さ23.7m、幅0.6～1.2mで、北西－南東方向に長軸を持つ直線的な溝跡である。深さは、10～20cmである。

［覆土・堆積状況］黒色土・暗褐色土からなる。溝跡の中央やや北側のベルトＣ－Ｃ′（ＶＥ６ｈグリッド）付近で、覆土中に礫群の廃棄がみられた。礫群は、径10～20cm大の亜角礫から構成され、５×1.5mほどの範囲で広がっていた。その部分の斜面上方は広がっている。礫群のなかに石器は含まれていない。

［壁・底面］壁・底面ともⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾する。底面は西から東に緩く傾斜する。

［付属施設］なし。

遺物（写真図版34）

［出土状況］覆土から陶磁器が出土している。

［陶磁器］陶磁器片（212）。

時期　詳細は不明だが、比較的新しい可能性がある。

（9）炭窯跡（第28図、写真図版20・21）

調査区南側で炭窯跡が2基検出された。緩やかな南斜面で、少し位置を移動して2基の炭窯がつくられている。新しい炭窯が古い炭窯より大きい。炭窯の形態から、現代の炭窯と判断される。

（阿部）

SW01炭窯跡

遺構（第28図、写真図版20・21）

［位置・検出状況］ⅧG5hグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして検出された。旧試掘のトレンチ№36で確認されていた炭窯跡である。

［重複関係］南側にSW02が位置するが、SW02を切ってつくられている。

［規模・平面形］規模は、開口部の径309×228cm、底部の径285×201cmで、楕円形を呈している。

［覆土・堆積状況］褐色土・明赤褐色土・赤褐色土から構成される。上屋の崩落土が主体である。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は74.5cmである。底面は、ほぼ平坦で硬く締まる。

［焚口・排煙口・煙道］焚口は斜面下位南側、煙道は斜面上位北側に設けられている。焚口には、焼土が形成されていた。煙道は、レンガと鉄板を組み合わせて、窯部分との境をつくっている。

［その他の付属施設］なし。

遺物（第31・40・47図、写真図版28・34）

［出土状況］煙道部分を構成する部品として、レンガ・鉄板が出土し、炭窯北側から土管が横転した状態で出土している。炭窯内ではないが、周辺から鉄板・鋸なども出土しており、炭窯と関連した遺物である可能性がある。

［土製品］レンガ（144・145・146・147）、土管（148）。

［鉄製品］鉄板（231）。

時期　炭窯の形態と聞き取り調査から、戦後の1950年代に使用された炭窯と考えられる。

SW02炭窯跡

遺構（第28図、写真図版21）

［位置・検出状況］ⅧG6hグリッド。SW01炭窯跡の精査中に掘り方の確認のため床下を掘り下げたところ、SW02炭窯跡を確認した。

［重複関係］SW01に切られている。

［規模・平面形］開口部の径197×168cm、底部の径194×197cmで、楕円形を呈している。

［覆土・堆積状況］暗褐色土・にぶい褐色土から構成される。上屋の崩落土が主体である。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は103.5cmである。底面はほぼ平坦で硬く締まる。

［焚口・排煙口・煙道］焚口は斜面下位南側に設けられ、排煙口・煙道は斜面上位北側に設けられている。焚口部分には焼土が形成されており、煙道部分は、レンガ等を組み合わせてつくられている。

遺物　なし。

時期　炭窯の形態と聞き取り調査から、戦後の1950年代に使用された炭窯と考えられる。

第3表　竪穴住居跡観察表（縄文）

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	床面	平面形	規模（m）	壁高（cm）	炉の形態	炉の規模（cm）	焼土の厚さ（cm）	柱穴・柱配置	覆土の堆積状況（上位→下位）	付属施設（旧→新）	重複関係	遺物	備考	時期
10	3	SI01	ⅢB7h,8h	Ⅳ	Ⅳ	円形？	4.39×(2.26)	55.8	地床炉	(33)×66	16	14	暗褐土、褐色土、明黄褐土	なし	SK06→SI01→SK07	土器・石器		中期末葉
11	4	SI02	ⅣC4b,5c	Ⅱ	Ⅲ	円形？	5.54×(3.26)	126.3	地床炉	64×31	4	9	黒褐土、におい黄褐土、暗褐土	なし	なし	土器・石器		中期末葉？
12	5	SI03	ⅢH8h,9h	Ⅳ	Ⅳ	円形？	(3.26)×(2.48)	31.8	石囲炉	54×(22)	0	11	黄褐土、褐色土、明黄褐土	なし	SI06→SI03、SK17と重複	土器・石器		中期中葉
12	8	SI06	ⅢB8g,9h	Ⅳ	Ⅳ	円形？	(2.36)×(2.43)	46.9	不明	—	—	4	黄褐土、黒褐土、明黄褐土	なし	SI06→SI03	土器・炭		中期中葉

第4表　竪穴住居跡観察表（古代）

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	床面	平面形	規模（m）	壁高（cm）	カマド位置	燃焼	主軸方位	柱穴・柱配置	覆土の堆積状況（上位→下位）	付属施設	重複関係（旧→新）	遺物	備考	時期
13	6	SI04	ⅢD10g、ⅣD1g	Ⅳ	Ⅳ	方形？	3.19×(1.35)	41.1	西壁南寄り	刎り貫き式	N－86°－W	2	不明	なし	SK14と重複	なし		古代
14	6,7	SI05	ⅣD2f	Ⅲ	Ⅳ	方形？	3.71×(1.45)	67.5	西壁北寄り	刎り貫き式	N－58°－W	不明	黒褐土、黒色土、黄褐土	なし	なし	土器		9C中頃

第5表　竪穴状遺構観察表

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	床面	平面形	規模（m）	壁高(cm)	柱穴・柱配置	覆土の堆積状況（上位→下位）	付属施設	重複関係（旧→新）	遺物	備考	時期
15	8	SK101	ⅢB7h,8i	Ⅲ？	Ⅳ	円形？	(3.40)×(3.04)	23.8	7	暗褐土、明黄褐土	なし	SK101→SI01	土器・石器		中期後葉以前
15	8	SK102	ⅢB8j、ⅢC9a	Ⅳ	Ⅳ	？	(1.80)×(－)	12.1	10	暗褐土、黄褐土、褐色土	なし	SK10,12,16と重複	土器・石器		中期中～後葉

第6表　陥し穴状遺構観察表

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模（cm）			底面のレベル(m)	覆土の堆積状況（上位→下位）	重複関係（旧・新）	性格	付属施設	備考	時期
						開口部	底部	深さ							
16	9	SK02	ⅦE6a	Ⅳ	長方形	157×94	128×44	126.6	72.808	褐色土、黒褐土	なし	陥			縄文時代？
16	9	SK14	ⅣD1g	Ⅳ	溝状	223×44	149×22	55.6	58.681	褐色土、黄褐土	SI04と重複	陥			縄文時代？
16	9	SK20	ⅣD21,3j	Ⅲ	楕円形	192×117	158×46	107.4	55.534	黒色土、明黄褐土、暗褐土	なし	陥	隅穴2側		縄文時代？
17	10	SK22	ⅤE8h,9h	Ⅲ	溝状	237×76	289×11	138.7	52.883	黒褐土、暗褐土、明黄褐土	なし	陥			縄文時代？
17	10	SK25	ⅣE4b,5b	Ⅲ	楕円形	210×142	83×31	136.5	53.945	黒色土、暗褐土、黄褐土	なし	陥	隅穴2個		縄文時代？
17	10	SK30	ⅤE3f,3g	Ⅲ	溝状	245×27	228×17	45.6	52.572	暗褐土	なし	陥			縄文時代？

第7表 土坑観察表

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模（cm） 開口部	規模（cm） 底部	規模（cm） 深さ	底面のレベル（m）	覆土の堆積状況（上位→下位）	重複関係（旧→新）	性格	付属施設	備考	時期
18	11	SK01	Ⅷ G 6 g, 6h	Ⅲ	円形	213×(194)	55×38	147.8	47.016	暗褐土、褐色土、褐色土	SK03→SK01	土	なし		不明
18	11	SK03	Ⅷ G 6 g	Ⅲ	楕円形？	(87)×(35)	(69)×(50)	124.0	47.214	黒褐土、褐色土、暗褐土	SK03→SK01	土	なし		不明
19	11	SK04	Ⅶ E 2 b	Ⅳ	楕円形？	(180)×210	(140)×160	30.0	67.212	黒色土	なし	土	なし		不明
19	11	SK05	Ⅶ E 2 a, 2b	Ⅳ	不整形	(300)×200	(250)×130	110.0	67.028	黒褐土、黒色土、褐色土	SK06→SK05	土	なし		不明
19	11	SK06	Ⅶ E 2 a	Ⅳ	楕円形？	(250)×190	(240)×100	70.0	67.572	黒色土、黒褐土	SK06→SK05	土	なし		不明
19	11, 12	SK07	Ⅲ B 7 h, 8h	Ⅳ	円形	106×100	162×139	130.0	85.810	黄褐土、褐色土、明黄褐土	SI01→SK07	貯	なし		縄・中期末葉
20	12	SK08	Ⅲ B 8 g, 8h	Ⅳ	円形	110×110	114×111	98.8	86.744	明黄褐土、褐色土、浅黄褐土	SK08→SI01	貯	なし		縄・中期中～後
20	12	SK09	Ⅲ B 8 i, 9i	Ⅳ	円形	154×143	118×116	98.4	85.565	黄褐土、褐色土、明黄褐土	なし	貯	なし		縄・中期中葉
20	12	SK10	Ⅲ B 7 j, 8j	Ⅳ	円形	193×183	147×122	108.1	84.887	暗褐土、黄褐土、明黄褐土	SK102と重複	土	なし		縄・中期中葉
20	13	SK11	Ⅲ C 8 a	Ⅲ	楕円形	128×97	112×72	35.6	85.041	褐色土	なし	十	なし		縄・中期
20	13	SK12	Ⅲ B 7 j, Ⅲ C 8 a	Ⅲ	楕円形	148×127	130×90	54.1	85.215	褐色土、黄褐土	SK102と重複	土	なし		縄・中期
21	13	SK13	Ⅲ C 8 a	Ⅲ	不整楕円	104×58	51×23	30.5	85.195	褐色土、黄褐土	なし	土	なし		縄・中期
21	13, 14	SK15	Ⅲ B 8 g	Ⅳ	楕円形	140×122	94×80	106.4	87.571	明黄褐土、にぶい黄橙土	なし	貯	なし		縄・中期
21	14	SK16	Ⅲ B 8 i, 9j	Ⅳ	円形	142×133	145×132	33.7	85.231	黄褐土、明黄褐土、褐色土	SK102と重複	貯	なし		縄・中期
21	14	SK17	Ⅲ B 8 h, 9i	Ⅳ	円形	131×124	142×133	85.1	85.846	褐色土、黄褐土、明黄褐土	SI03と重複	貯	なし		縄・中期
21	14	SK18	Ⅲ B 9 g	Ⅳ	円形	151×141	146×126	81.0	86.413	褐色土、暗褐土、黄褐土	なし	貯	なし		縄・中期
22	15	SK19	Ⅲ D 9 h	Ⅳ	円形	88×68	58×51	46.6	86.380	黄褐土、褐色土	SI03と重複	十	なし		縄・中期
22	15	SK21	Ⅳ D 4 i, 4j	Ⅲ	溝状	408×52	378×19	80.7	56.149	暗褐土、褐色土	なし	土	なし		不明
22	15	SK23	Ⅳ D 5 j, 6j	Ⅲ	円形	102×98	89×81	21.2	56.760	黒褐土	なし	土	なし		不明
22	15	SK24	Ⅳ E 3 a, 4b	Ⅲ	楕円形？	(131)×96	(84)×40	26.6	55.020	黒褐土	なし	十	なし		不明
23	16	SK26	Ⅲ B 7 g	Ⅲ	楕円形	41×(25)	20×(16)	36.1	87.739	黄褐土	なし	十	なし	石棒	縄・中期
22	16	SK27	Ⅲ B 7 i, 8i	Ⅳ	円形	123×109	95×93	36.0	86.018	明黄褐土、黄褐土	SK101と重複	土	なし		縄・中期
23	16	SK28	Ⅳ C 5 c, 5e	Ⅲ	楕円形	143×107	56×32	56.3	69.376	黒褐土、黒色土	なし	土	なし		不明
23	16	SK29	Ⅲ C 9 f	Ⅲ	楕円形	85×55	43×13	29.8	78.820	暗褐土	なし	十	なし		縄・中期

第8表 焼土遺構観察表

（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模（cm） 平面	規模（cm） 厚さ	状況	備考	出土遺物	時期
24	17	SN01	Ⅳ E 5 b	Ⅱ	不整楕円	33×14	3	にぶい赤褐色の焼土	石組みあり	なし	不明
24	17	SN02	Ⅳ D 4 b	Ⅲ	円形	10×9 17×15	4 13	明黄褐色の焼土	黒褐色土中に焼土がある。	なし	不明

第9表 土器埋設遺構観察表

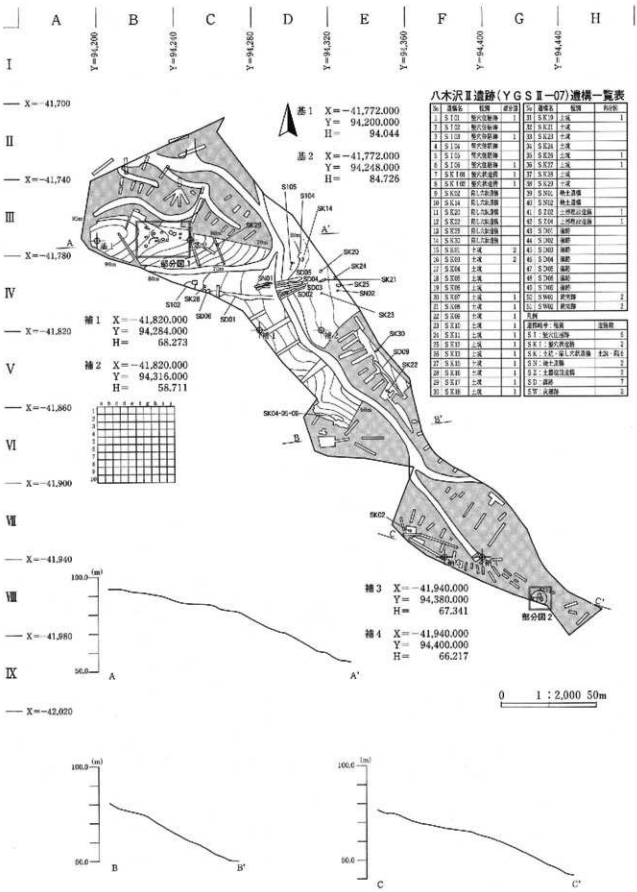
（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	掘り方の規模（cm） 平面	掘り方の規模（cm） 深さ	掘り方の覆土の状況	埋設状況	埋設土器の状況	埋設土器の内部	重複関係（旧→新）	備考	出土遺物	時期
24	17	SZ02	Ⅲ B 7 g, 7h	Ⅳ	円形？	28×(24)	18.0	明黄褐土、にぶい黄褐土	正立	底部～胴部下半	埋土	SI01→SZ02		土器	中期末葉
24	17	SZ04	Ⅲ B 7 g	Ⅲ	円形？	60×(53)	32.9	明黄褐土	斜位	底部～胴部上半	覆土	なし		土器	中期

第10表 炭窯跡観察表

（数値）：残存値

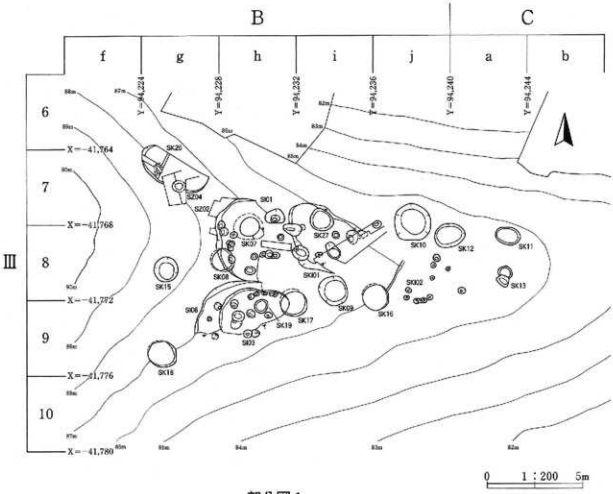
図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模（cm） 開口部	規模（cm） 底部	規模（cm） 深さ	床面積（㎡）	底面のレベル（m）	覆土の堆積状況	重複関係	性格	付属施設	備考	時期
28	20, 21	SW01	Ⅷ G 5 h, 6h	Ⅲ	卵形	309×228	285×201	74.3	4.465	48.257	褐色土、明赤褐土、赤褐土	SW02→SW01	黒炭製炭	なし		現代
28	21	SW02	Ⅷ G 6 h	Ⅲ	卵形	197×168	194×147	103.5	2.162	47.917	暗褐土、にぶい褐色土	SW02→SW01	黒炭製炭	なし		現代



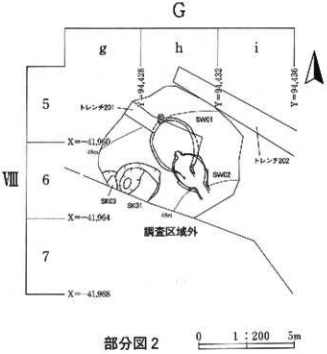
八木沢Ⅱ遺跡（ＹＧＳⅡ−07）遺構一覧表

No.	遺構名	種類	規模	No.	遺構名	種類	規模
1	S T01	竪穴住居跡	1	31	S K29	土坑	1
2	S T02	竪穴住居跡		32	S K31	土坑	
3	S T03	竪穴住居跡	2	33	S K33	土坑	
4	S T04	竪穴住居跡		34	S K34	土坑	
5	S T05	竪穴住居跡		35	S K36	土坑	1
6	S T06	竪穴住居跡	1	36	S K37	土坑	1
7	S K14	竪穴遺構	1	37	S K38	土坑	
8	S K10	竪穴遺構	1	38	S K39	土坑	
9	S K02	陥し穴遺構		39	S N01	焼土遺構	
10	S K04	陥し穴遺構		40	S N02	焼土遺構	
11	S K05	陥し穴遺構		41	S F01	二列陥し穴遺構	1
12	S K12	陥し穴遺構		42	S F04	二列陥し穴遺構	1
13	S K25	陥し穴遺構		43	S N01	埋甕	
14	S K32	陥し穴遺構		44	S N02	埋甕	
15	S K01	土坑	2	45	S N03	埋甕	
16	S K03	土坑	2	46	S N04	埋甕	
17	S K04	土坑		47	S N05	埋甕	
18	S K05	土坑		48	S N06	埋甕	
19	S K06	土坑		49	S N07	埋甕	
20	S K07	土坑	1	50	S N08	埋甕	
21	S K08	土坑	1	51	S N09	炭化物	2
22	S K09	土坑	1	52	S N10	炭化物	2
23	S K10	土坑	1	凡例中，種類		遺構数	
24	S K11	土坑	1	S T：竪穴住居跡			6
25	S K12	土坑	1	S K：土坑・陥し穴遺構			2
26	S K13	土坑	1	S N：焼土遺構			2
27	S K15	土坑	1	S F：土器埋設遺構			2
28	S K16	土坑	1	S D：溝状			7
29	S K17	土坑	1	S T：炭焼跡			2
30	S K18	土坑	1				

第８図　遺構配置図（1）：全体図



部分図1



部分図2

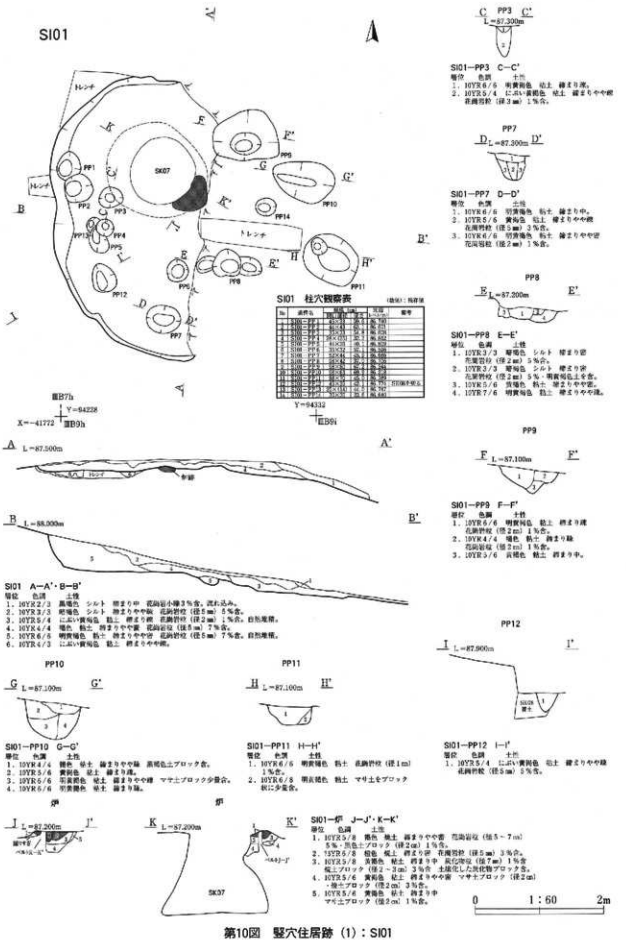
部分図1　遺構一覧表

No	遺構名	種別	部分図
1	SI01	竪穴住居跡	1
3	SI03	竪穴住居跡	1
6	SI06	竪穴住居跡	1
7	SK101	竪穴状遺構	1
8	SK102	竪穴状遺構	1
20	SK07	土坑	1
21	SK08	土坑	1
22	SK09	土坑	1
23	SK10	土坑	1
24	SK11	土坑	1
25	SK12	土坑	1
26	SK13	土坑	1
27	SK15	土坑	1
28	SK16	土坑	1
29	SK17	土坑	1
30	SK18	土坑	1
31	SK19	土坑	1
35	SK26	土坑	1
36	SK27	土坑	1
41	SZ02	土器埋設遺構	1
42	SZ04	土器埋設遺構	1

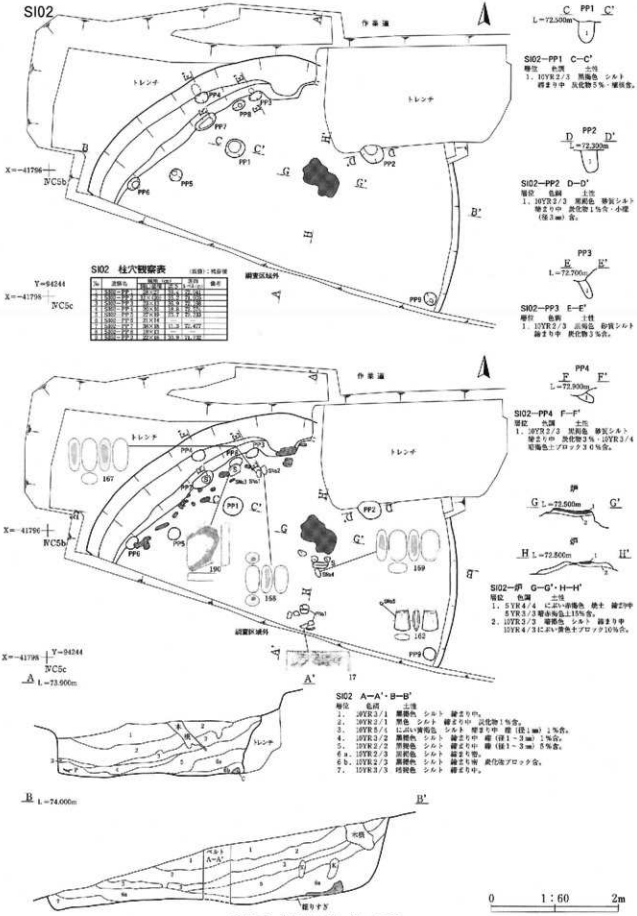
部分図2　遺構一覧表

No	遺構名	種別	部分図
19	SK01	土坑	2
16	SK03	土坑	2
50	SW01	民家跡	2
51	SW02	民家跡	2

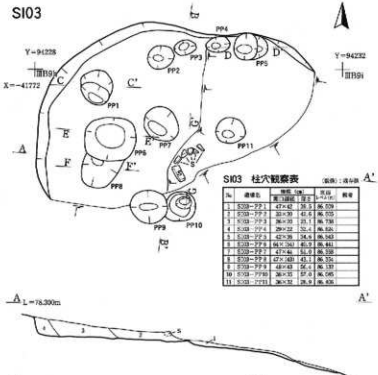
第9図　遺構配置図（2）：部分図



第10図　竪穴住居跡（1）：SI01



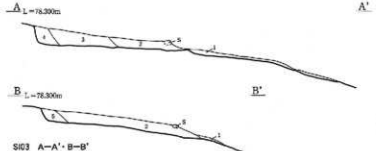
第11図　竪穴住居跡（2）：SI02



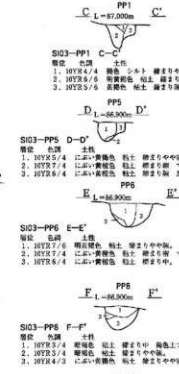
SI03　柱穴観察表

（観察：遠藤英）

No.	遺構名	規模（cm） 長軸(直径)	短軸	深さ	形状	備考
1	SI03－PP1	47×42	36.5	86.639		
2	SI03－PP2	30×30	41.6	86.555		
3	SI03－PP3	36×30	23.1	86.736		
4	SI03－PP4	29×22	32.4	86.524		
5	SI03－PP5	42×38	34.8	86.542		
6	SI03－PP6	64×36	45.9	86.441		
7	SI03－PP7	47×44	54.8	86.330		
8	SI03－PP8	47×38	43.1	86.334		
9	SI03－PP9	49×40	56.4	86.137		
10	SI03－PP10	36×35	57.0	86.065		
11	SI03－PP11	36×32	28.9	86.436		



SI03　A—A'・B—B'
層位　色調　土性
1. 10YR4/4　褐色　シルト　締まりやや弱　花崗岩粒（径2mm）1%含。
2. 10YR5/6　黄褐色　粘土　締まりや　赤褐岩粒（径5mm）1%含。
3. 10YR4/4　褐色　シルト質粘土　締まりやや弱　炭化物粒（径3mm）微かに含。
4. 10YR3/3　暗褐色　シルト質粘土　締まり強　土器化した焼塊ブロック3%含。
5. 10YR6/6　明黄褐色　粘土　締まりやや強　赤褐岩粒（1%含。



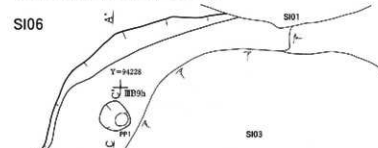
SI03—PP1　C—C'
層位　色調　土性
1. 10YR4/4　褐色　シルト　締まりやや緩　炭化物1%含。
2. 10YR5/6　明黄褐色　粘土　締まり緩　マサ土ブロック含。
3. 10YR5/5　黄褐色　粘土　締まりやや緩。

SI03—PP5　D—D'
層位　色調　土性
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　締まりやや弱。
2. 10YR7/4　にぶい黄色　粘土　締まり緩　マサ土ブロック含。
3. 10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土　締まり強　炭化物1%含。

SI03—PP6　E—E'
層位　色調　土性
1. 10YR7/6　明黄褐色　粘土　締まりやや弱。
2. 10YR7/4　にぶい黄色　粘土　締まり強　マサ土ブロック3%含。
3. 10YR6/4　にぶい黄褐色　粘土　締まり中。

SI03—PP8　F—F'
層位　色調　土性
1. 10YR3/4　暗褐色　粘土　締まり中　褐色土ブロック1%含。
2. 10YR3/4　暗褐色　粘土　締まりやや強。
3. 10YR4/3　にぶい褐色　粘土　締まりやや弱。

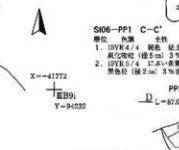
SI03—石囲炉　G—G'
層位　色調　土性
1. 10YR3/6　黄褐色　粘土　締まりやや薄　明黄褐色粘土ブロック（径1cm）1%含。
2. 10YR4/6　褐色　粘土　締まり中。
3. 10YR4/6　明黄褐色　粘土　締まりやや薄。



SI06　柱穴観察表

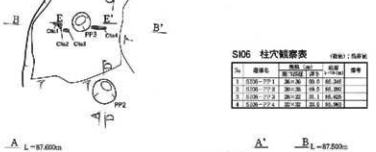
（観察：馬場紀）

No.	遺構名	規模（cm） 長軸(直径)	短軸	深さ	形状	備考
1	SI06－PP1	36×36	55.5	85.345		
2	SI06－PP2	30×36	48.5	85.380		
3	SI06－PP3	28×22	35.1	85.625		
4	SI06－PP4	32×32	33.5	85.580		



SI06—PP2　D—D'
層位　色調　土性
1. 10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　締まりやや緩　炭粒（径2mm）1%含。
2. 10YR4/4　褐色　粘土　締まりやや緩　炭化物粒（径5mm）3%含。
3. 10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土　締まり中　黒色粒（径2mm）3%含。

SI06—PP3　E—E'
層位　色調　土性
1. 10YR4/6　明黄褐色　粘土　締まりやや緩　マサ土粒（径5mm）1%含。
2. 10YR6/6　明黄褐色　粘土　締まりやや緩　マサ土粒を含まない。

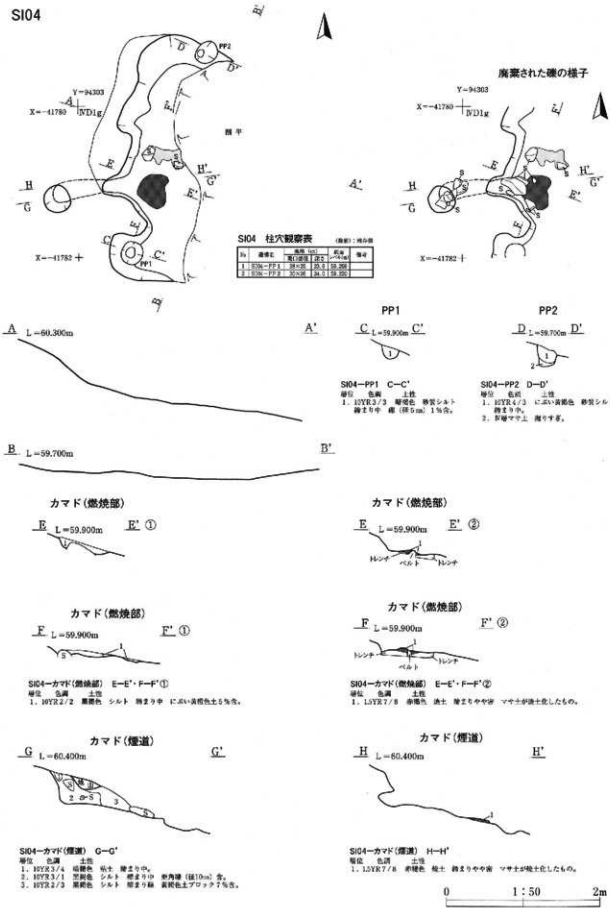


SI06　A—A'・B—B'
層位　色調　土性
1. 10YR4/4　褐色　粘土　締まり中　花崗岩粒（径2～4mm）7%含。
2. 10YR5/6　黄褐色　粘土　締まりやや緩　炭化物粒（径7mm）1%含。
3. 10YR2/3　黒褐色　粘土　締まりやや弱　炭化物ブロック（径2～5cm）7%含。
4. 10YR6/6　明黄褐色　粘土　締まり中　花崗岩粒（径2～5mm）5%含。
5. 10YR4/6　明黄褐色　粘土　締まり中　花崗岩粒の量が少ない。
6. 10YR4/4　褐色　粘土　締まりやや弱　水の跡の影響を受ける。

0　1：50　2m

第12図　竪穴住居跡（3）：SI03・06

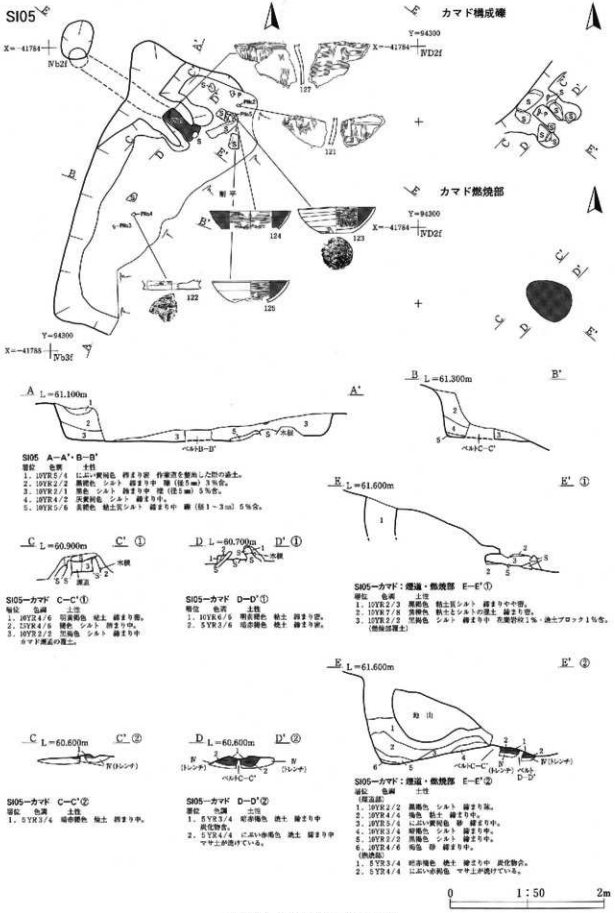
SI04



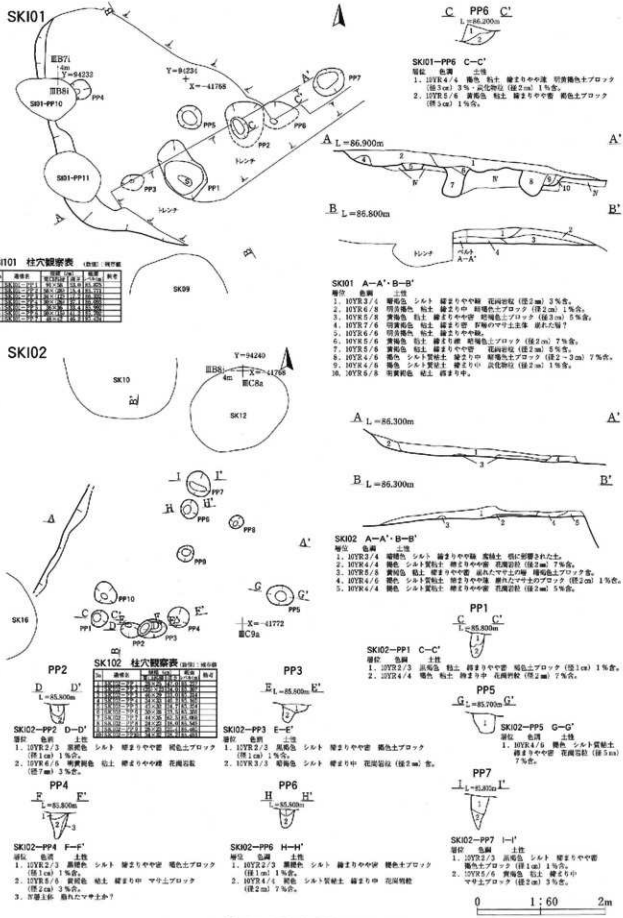
SI04 柱穴観察表 (数値):埋め戻

No	遺構名	規模 (cm) 長径(深度)	短径	底面レベル(m)	備考
1	SI04—PP1	34×26	20.3	59.399	
2	SI04—PP2	30×26	24.1	59.550	

第13図　竪穴住居跡 (4)：SI04



第14図　竪穴住居跡（5）：SI05



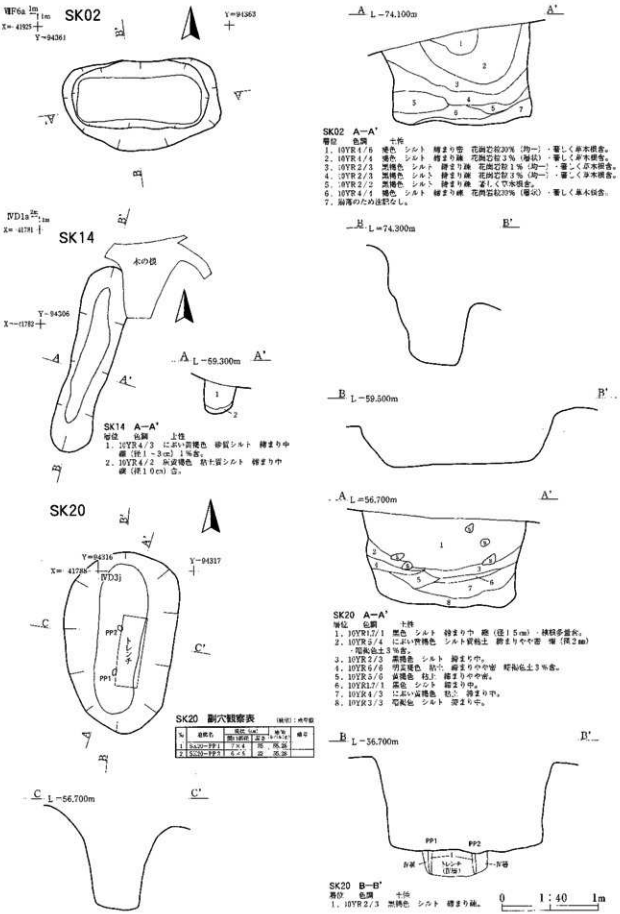
SKI01 柱穴観察表（数字：列平面）

No.	遺構名	平面形	規模	断面
1	SKI01-PP1	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
2	SKI01-PP2	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
3	SKI01-PP3	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
4	SKI01-PP4	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
5	SKI01-PP5	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
6	SKI01-PP6	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
7	SKI01-PP7	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
8	SKI01-PP8	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
9	SKI01-PP9	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
10	SKI01-PP10	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
11	SKI01-PP11	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形

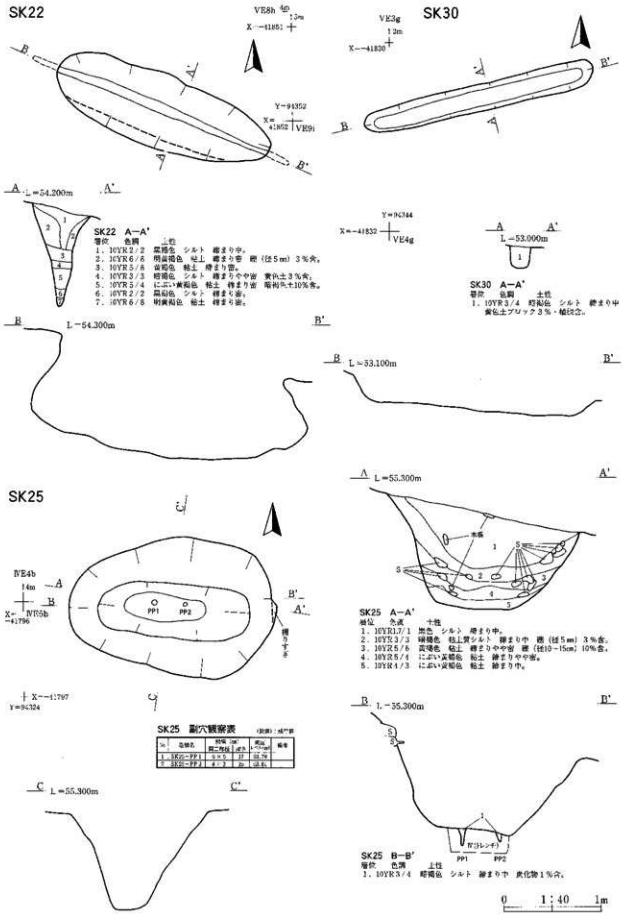
SK102 柱穴観察表（数字：列平面）

No.	遺構名	平面形	規模	断面
1	SK102-PP1	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
2	SK102-PP2	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
3	SK102-PP3	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
4	SK102-PP4	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
5	SK102-PP5	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
6	SK102-PP6	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形
7	SK102-PP7	楕円形	長径 25cm 短径 21cm	円形

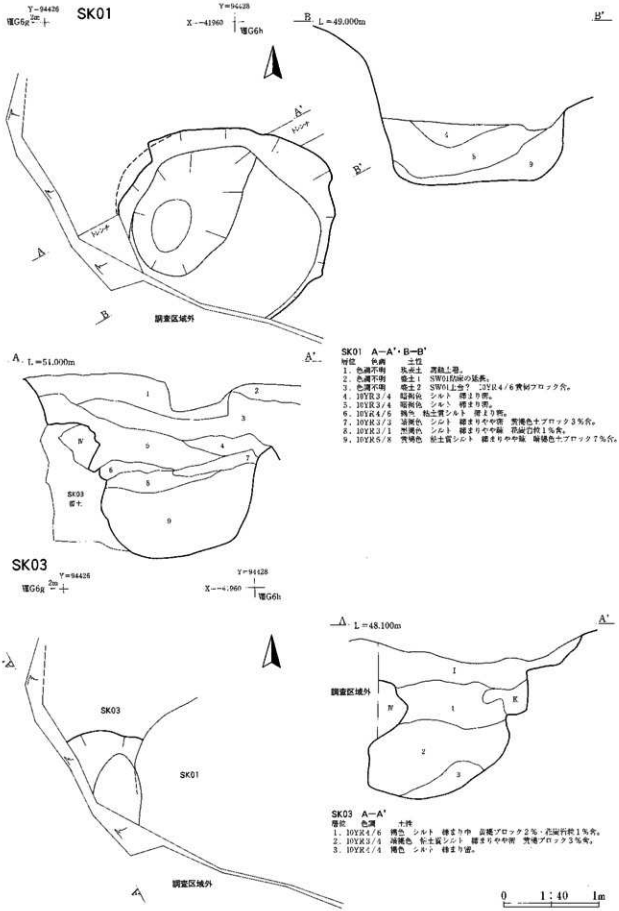
第15図　竪穴状遺構：SKI01・02



第16図　陥し穴状遺構（1）：SK02・14・20



第17図　陥し穴状遺構（2）：SK22・25・30



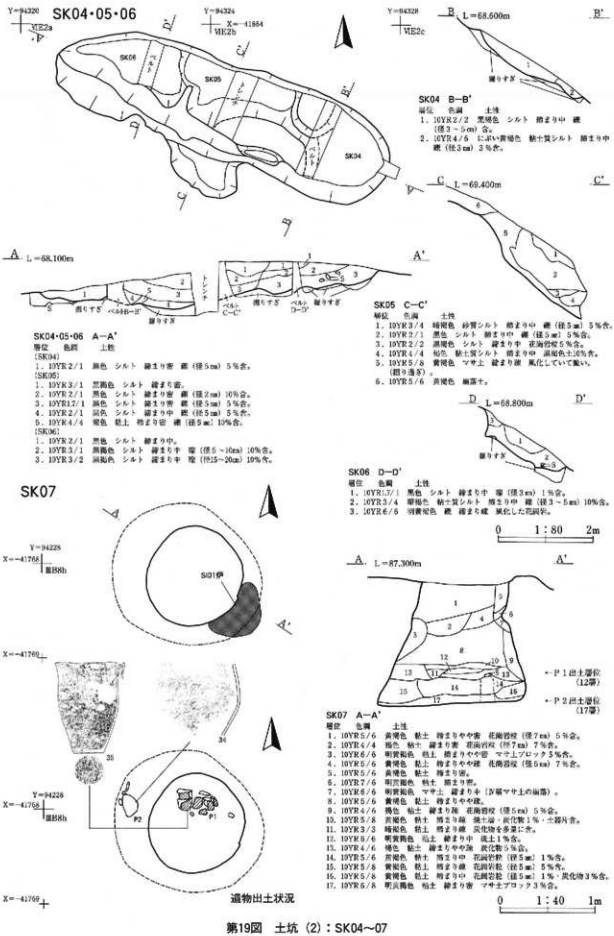
SK01　A—A'・B—B'

層位	色調	土性
1.	色調不明	表土　表土
2.	色調不明	盛土1　SW01区画の盛土。
3.	色調不明	盛土2　SW01土台？　25YR4/6黄褐ブロック含。
4.	10YR3/4	暗褐色　シルト　極まり悪。
5.	10YR3/6	暗褐色　シルト　極まり悪。
6.	10YR4/6	褐色　粘土質シルト　悪まり悪。
7.	10YR3/3	暗褐色　シルト　極まりやや悪　黄褐色ナブロック3％含。
8.	10YR3/1	黒褐色　シルト　極まりやや悪　炭化物粒1％含。
9.	10YR5/8	黄褐色　粘土質シルト　極まりやや悪　暗褐色ナブロック7％含。

SK03　A—A'

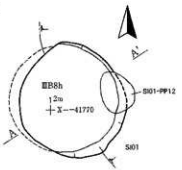
層位	色調	土性
1.	10YR4/6	褐色　シルト　極まり中　黄褐ブロック2％・花崗岩粒1％含。
2.	10YR3/4	暗褐色　粘土質シルト　極まりやや悪　黄褐ブロック3％含。
3.	10YR4/4	褐色　シルト　極まり悪。

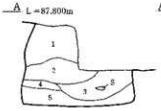
第18図　土坑（1）：SK01・03



第19図　土坑（2）：SK04～07

SK08

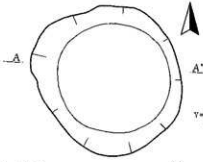


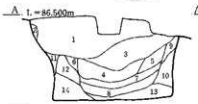


SK08　A—A'

層位	色調	土性
1.	10YR2/6	明黄褐色　シルト　締まり密　炭化物（径10mm）1％含。
2.	10YR8/6	黄橙色　シルト　締まり密。
3.	10YR4/6	褐色　シルト　締まり密　炭化物（径5～10mm）5％含。
4.	10YR2/3	黒褐色　シルト　締まり悪。
5.	10YR8/4	浅黄橙色　シルト　締まり密。

SK09

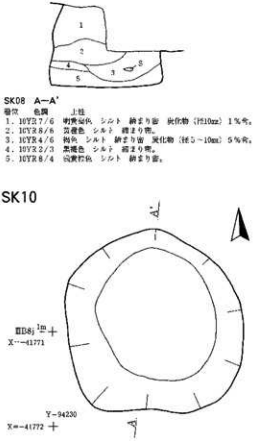


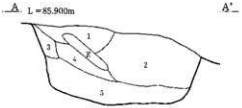


SK09　A—A'

層位	色調	土性
1.	10YR5/6	黄褐色　砂土　締まりやや密　炭粒状炭（径7mm）5％・炭化物1％含。
2.	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりやや密　マサキブロック（径2cm）3％含。
3.	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりや　炭化物1％含。
4.	10YR4/4	褐色　粘土　締まりやや密　黒色土ブロック（径1～2cm）3％含。
5.	10YR6/8	褐色　粘土　締まり密　炭化物1％含。
6.	10YR5/8	黄橙色　粘土　締まり密。
7.	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりや中　黒色土ブロック（径1cm）3％含。
8.	10YR3/4	暗褐色　粘土　締まり密　炭粒状炭（径7mm）1％・炭化物7％含。
9.	10YR6/6	明黄褐色　粘土　締まりやや密　花崗岩粒（径5mm）7％含。
10.	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まりやや密　炭化物1％含。
11.	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まりやや密　マサキブロック（径2cm）5％含。
12.	10YR6/6	明黄褐色　粘土　締まりやや密　マサキブロック（径1cm）3％含。
13.	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まり密　花崗岩粒（径5mm）3％含。
14.	10YR6/6	明黄褐色　粘土　締まりやや密　花崗岩粒（径3mm）1％・炭化物1％含。

SK10

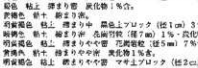




SK10　A—A'

層位	色調	土性
1.	10YR3/4	暗褐色　シルト　締まり中　黄褐色粘土ブロック（径3cm）1％含。
2.	10YR5/8	黄橙色　粘土　締まりやや強　花崗岩粒（径5mm）3％含。
3.	10YR5/8	黄褐色　粘土　締まりやや密　花崗岩ブロック（径3cm）1％含。
4.	10YR5/6	にぶい黄褐色　砂土　締まりやや密　花崗岩ブロック（径2cm）1％含。
5.	10YR6/8	明黄褐色　粘土　締まり密　マサ土ブロック（径3cm）3％含。

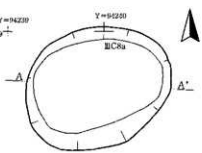
SK11

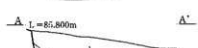


SK11　A—A'

層位	色調	土性
1.	10YR4/4	暗色　砂土黄シルト　締まり中。

SK12



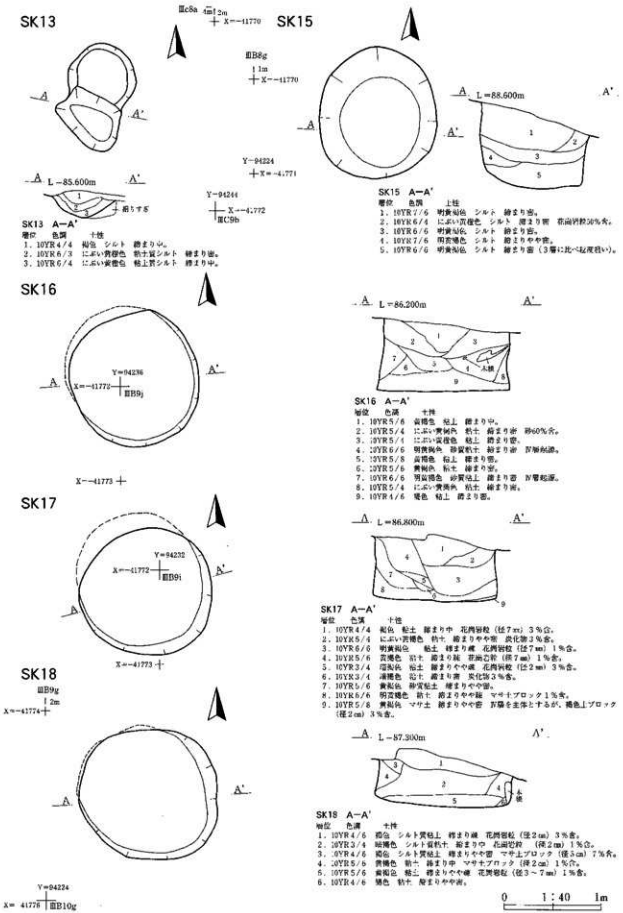


SK12　A—A'

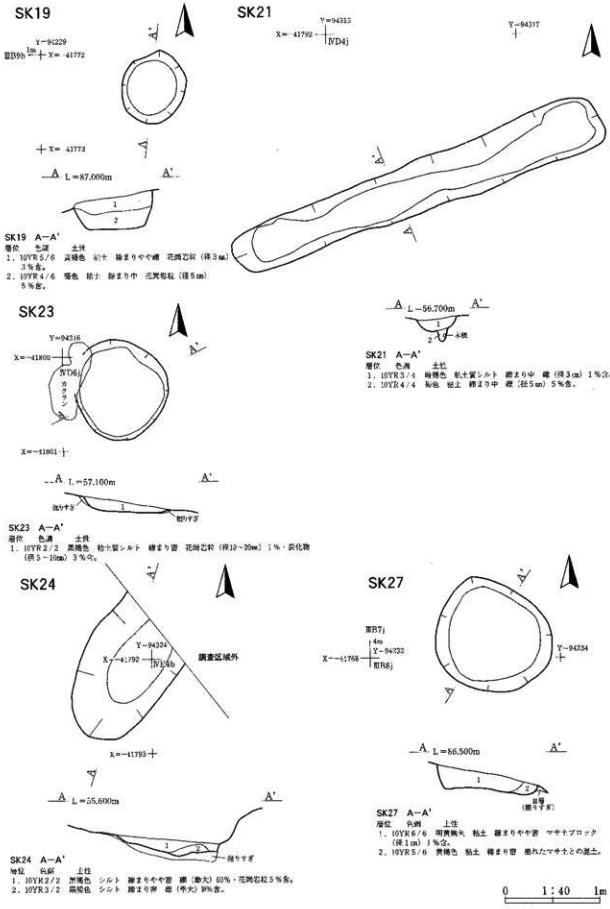
層位	色調	土性
1.	10YR4/4	褐色　粘土黄シルト　締まり中。
2.	10YR5/6	黄褐色　粘土黄シルト　締まり密。

0　1:40　1m

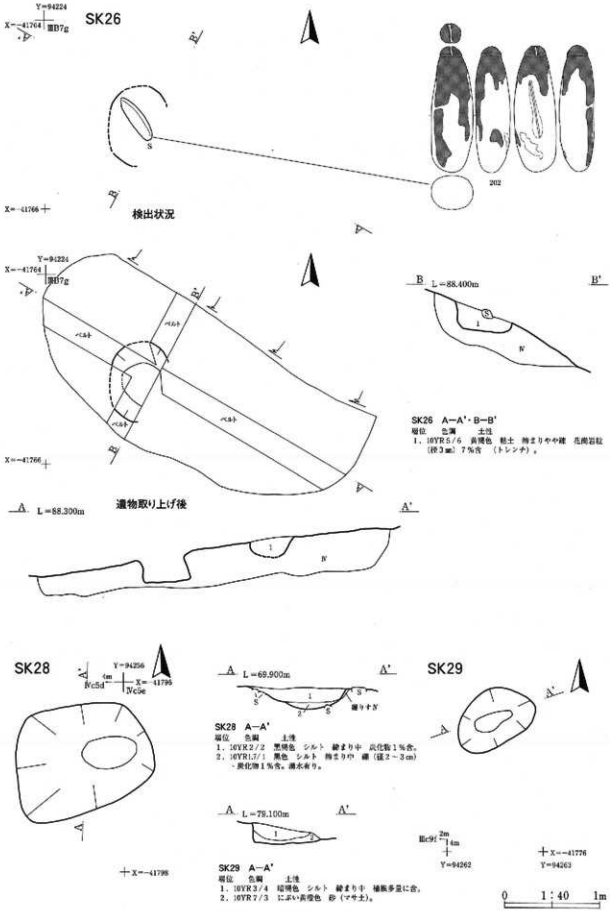
第20図　土坑（3）：SK08～12



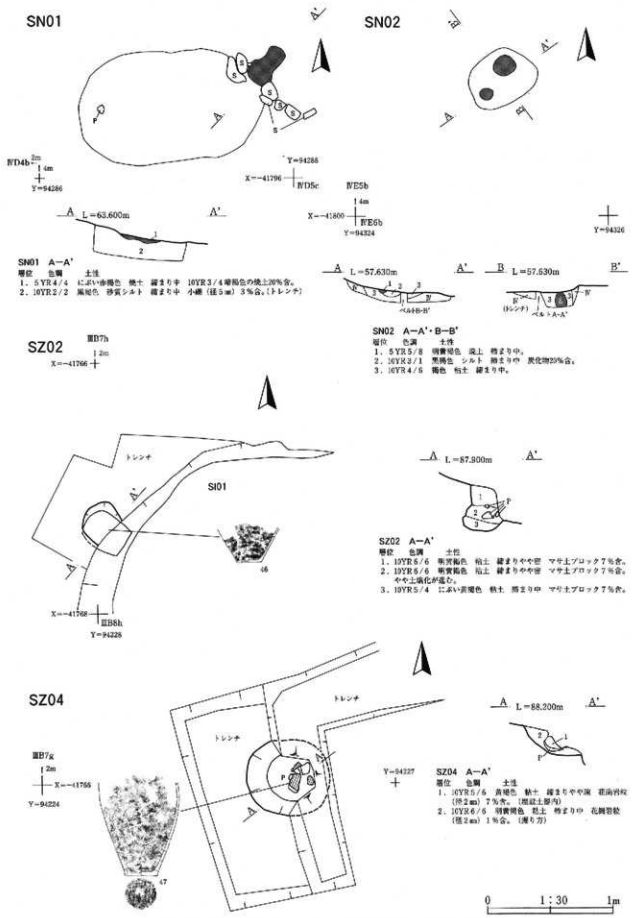
第21図　土坑（4）：SK13・15～18



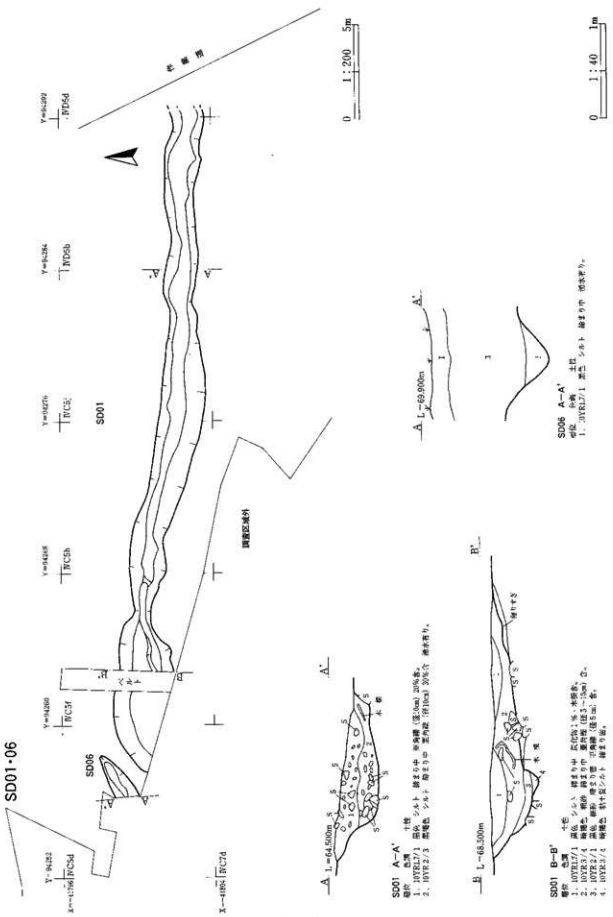
第22図　土坑（5）：SK19・21・23・24・27



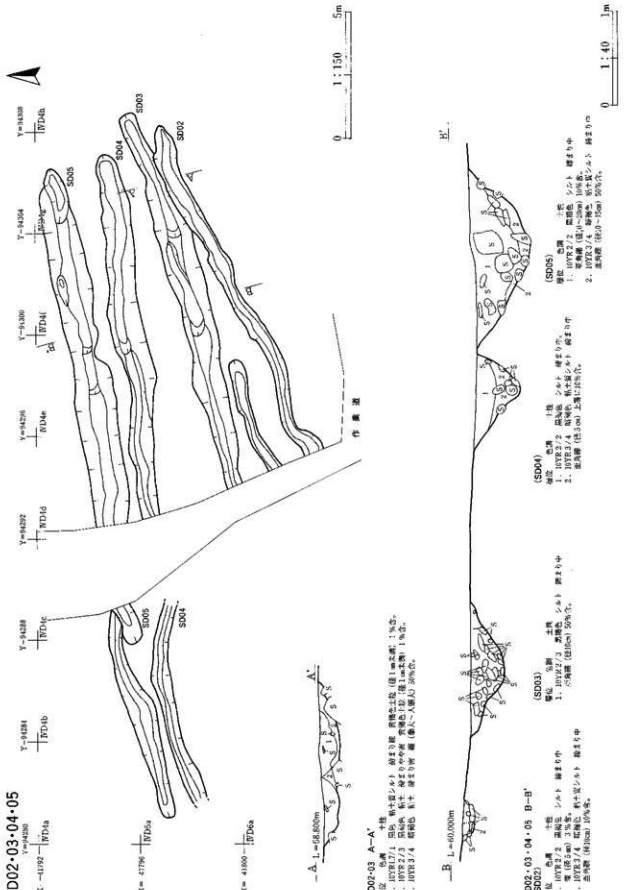
第23図　土坑（6）：SK26・28・29



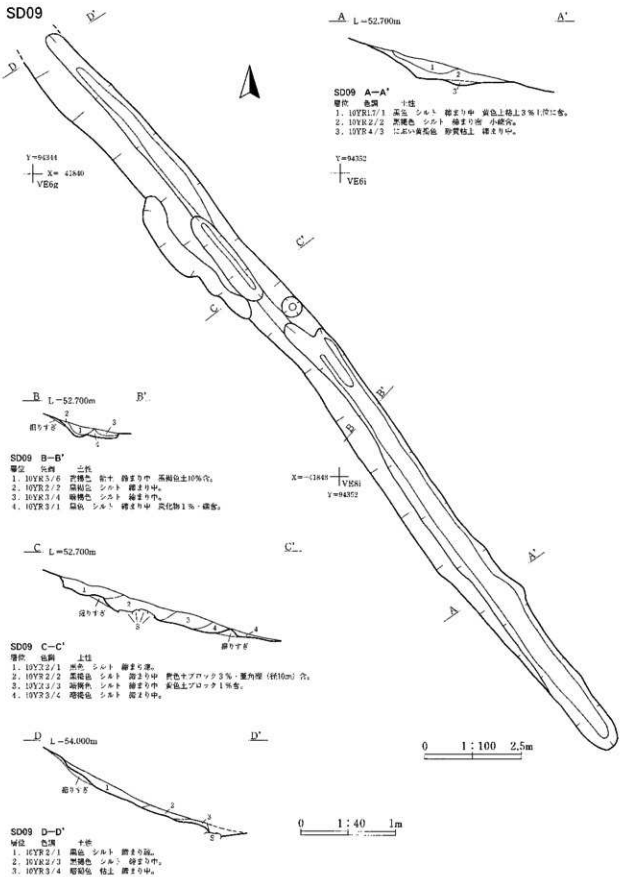
第24図　焼土遺構：SN01・02、土器埋設遺構：SZ02・04



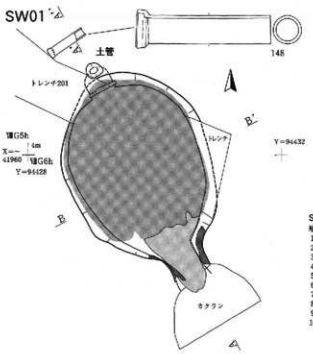
第25図　溝跡（1）：SD01・06

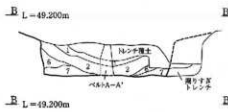


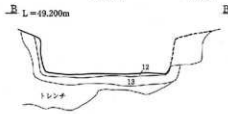
第26図　溝跡（2）：SD02～05



第27図　溝跡（3）：SD09

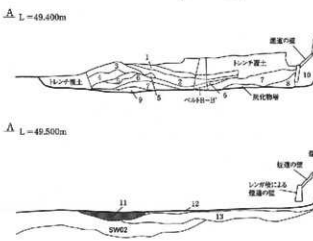






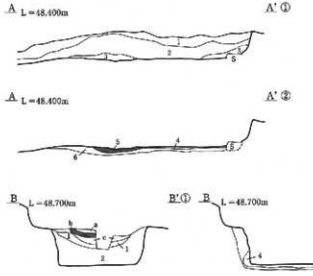
SW01　A—A'・B—B'①

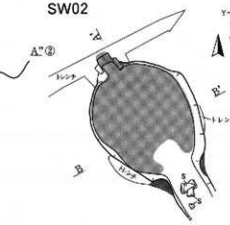
層位　色調　土性
1. 10YR2/3　黒褐色　締まり極　表土　腐植土。
2. 10YR4/6　褐色　シルト　締まり極　花崗砂粒（径1～5mm）少量含。
3. 5YR4/8　赤褐色　シルト質粘土　締まりやや密　花崗岩粒（径1～5mm）少量含。
4. 5YR4/8　赤褐色　シルト質粘土　締まりやや密　花崗岩粒（径1～5mm）少量含。
5. 10YR6/1　褐灰色　シルト質粘土　締まりやや密　花崗砂粒（径1～10mm）を少量含。
6. 5YR5/8　明赤褐色　シルト質粘土　締まりやや密　花崗砂粒（径1mm以上）少量含。
7. 5YR4/8　赤褐色　シルト質粘土　締まりやや密　花崗岩粒（径1mm以上）少量含。
8. 10YR1.7/1　黒色　シルト　締まり密。
9. 10YR6/3　にぶい黄褐色　灰　締まり密　植根多く含。
10. 10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　締まり極。（遺跡）
※3～7層は天井の崩落土。



SW01　A—A'・B—B'②

層位　色調　土性
12. 5YR5/8　明赤褐色　焼土　締まり密。
13. 10YR1.7/1　黒色　（植床が炭化したもの）。
13. 10YR5/8　黄褐色　シルト　締まり密　花崗岩粒7%含。





SW02　A—A'・B—B'①

層位　色調　土性
a. SW01の埋土（床）
b. SW01の埋土（焼土）
c. SW01の埋土（結床）
1. 10YR3/4　暗褐色　シルト　締まり極。
2. 7.5YR3/4　暗褐色・10YR5/3　純い黄褐色の混土　シルト質粘土　締まり密。
3. 10YR6/3　にぶい黄褐色　灰　締まり密。

SW02　A—A'・B—B'②

層位　色調　土性
4. 10YR1.7/1　黒色　（結床が炭化したもの）。
5. 5YR5/8　暗赤褐色　焼土　締まり密　結床が焼土化したもの。
6. 10YR5/2　灰黄褐色　粘土　締まり密（結床）。

0　1:60　2m

第28図　炭窯跡：SW01・02

2　出　土　遺　物

（1）出土遺物の概要（第29～47図、写真図版22～34）

出土遺物は、土器、土製品、石器、石製品、陶磁器、鉄製品、ガラス製品、炭化材、炭化種実などがある。いずれも量は少ない。総量は大コンテナ（40×30×30cm）5箱分である。以下、遺物の種別ごとに詳述する。

（阿部）

（2）土器（第29～39図、写真図版22～28）

土器は、重量計測を行った後に接合を行い、口径・器高・底径の計測値のうち1箇所以上計測可能なものを立体土器として登録・図化し、掲載した。破片資料はすべて実見し、以下の基準で選別した。掲載資料は、遺物の残存状況が良くないため、部位に関係なく大きさ径3cm以上のものを選んでいる。底部破片は全て掲載した。掲載した土器はすべて図・写真・観察表を掲載した。個々の土器の文様などの特徴は、第8表土器観察表に記載している。

（八重畑）

縄文土器・弥生土器

① 観察項目

以下の項目について、観察を行った。

・計測値（器高・口径・底径）※立体土器のみ
・器形：口縁部：平縁・波状縁他
・色調：土色帳に照合する。
・内面調整：ミガキ・ナデの有無と方向
・器種：深鉢・浅鉢・ミニチュア土器など
・文様：各部位の縄文原体と施文方法
・胎土：繊維・礫などの混入物
・煤の付着の有無
・その他：成形の痕跡（輪積痕）、使用の痕跡（補修孔・煮炊の痕跡・アスファルト・朱の付着）など。

② 分類

以上の観察結果から、出土した土器を以下のように分類した。分類の基準としては、器形・文様要素・胎土・器種などがあげられるが、本遺跡では破片資料が大多数を占めることから、主に文様要素と胎土からみた分類となっている。既存の土器型式と比定できるものは、＜　＞内に記述している。時期的には縄文時代前期・中期、弥生時代後期の土器が出土している。総重量は53,155.5gである。

Ⅰ群：縄文時代前期（10）

10は胎土に繊維を多く含む土器で、棒状工具による深い沈線を横位に施し、その上下に縦位の浅い沈線を隙間無く充填する。横位沈線の直下にはLRを横位に短く施文している。

Ⅱ群：縄文時代中期

1類　中葉＜大木8a式＞

口縁部に細い粘土紐で横位に波状文を描出するもの。(33)

33は胎土に石英を多く含む。口縁部にLRを横位に施した後、粘土紐による波状文を貼付する。

2類　中葉＜大木8b式＞

a種　口縁部に横位の隆帯または隆沈線をもつもの。(20・28・50・56・87・91・109・113)

20・28は細い粘土紐を貼り付け、断面が三角形を呈する隆帯である。20は横位に2条、縦位に1条隆帯を垂下させる。28は横位に1条、縦位には隆帯ではなく沈線を施してい

る。56・87・91・109・113は横位の太い隆帯を持ち、その下部には縄文を施文する。87は隆帯上に深い沈線を沿わせ、沈線の末端に円形状にアクセントをつける。113は太い沈線によって文様帯を区画している。50は横位の隆沈線をもつ土器である。

b種　口縁部に平行沈線で文様帯を区画するもの。(80・94)

80は口縁部が内湾する器形で、地文縄文LRをもち、横位の平行沈線で文様帯を区画する。その区画内に平行沈線で波状文を描出する。94は横位の平行沈線を1条巡らし、その上部は無文、その下部は縄文RLRを施す。

c種　口縁部文様帯が無文なもの。(25)

無文の口縁部破片であるが、外反する器形から大波状（2波）口縁をもつ深鉢と思われる。

d種　胴部に縦・横位の隆沈線をもつもの　(24・32・37・38・63・68・86)

これらはすべて隆線の両脇に沈線を沿わせるものである。37・63・68・86は縦位に1～2条の隆沈線を施し、その両脇には地文縄文が施される。24・32も同様であるが、縦位のほか、横位にも隆沈線を施す。38は横位の隆沈線の沈線部分に刺突文をもつ。

3類　後葉<大木9式>

a種　口縁部から沈線で∩字文を垂下させ、その区画内を縄文で充填するもの。(58・110)

58・110とも区画内はLR縄文で、胎土に細礫を多く含む。

b種　胴部に縦位に2条1単位の沈線を垂下させ、その外側に縄文を施すもの。(8・22・26・27・30・48・55・69)

この中で地文縄文に2種類の原体が用いられている。8・26・30・48・55・69はLR縄文、22・27はRLR縄文を用いる。22は底部まで残存する破片で、文様は底部付近まで施される。底面は仕上げにミガキが施されている。

4類　末葉<大木10式>

a種　口縁部から胴部に沈線で文様（S字状もしくはC字状）を描き、その区画内に縄文を充填したもの。(13・65・89・97)

89は口縁部でS字状の一部とみられる沈線の区画内に縄文RLRを充填する。13・97は胴部破片で沈線の区画内に縄文RLを充填する。65は沈線によって∩状と一状を描き、その区画内に縄文LRが充填されている。この意味では3類a種と類似するが、波状口縁の頂部にノの字状の貼付文という新しい要素を持つため、この項に分類した。

b種　口縁部から胴部にかけて沈線で文様を描き、その区画外に縄文を施すもの。「ノ」・「L」字状無文体を描出する破片と思われる。(3・9・49・81・90・98・101・112)

98は口縁部破片で、口縁部は無文帯で、その下に横位に1条沈線を施し、そこから縦位に2本沈線を垂下させる。その区画の外側に縄文LRを施文する。101は胴部破片で2本沈線を垂下させ、その外側は縄文RLを施文する。90はL字状に沈線を施し、その外側に縄文LRを施す。その他の3・9・49・81・112は、沈線の屈曲部に粘土紐の貼付文を貼付する。

c種　口縁部に円形刺突文を施すもの。(78・92)

78は薄手の土器で口縁部がくの字状に外反する。口縁部に円形刺突文を横位に1列施文し、その下に沈線を横位に1条、縦位に2条施す。縦位の沈線間は無文であるが、その外側には縄文LRが施文される。92は波状口縁の頂部とみられるが、表面に円形刺突を不規則に施文する。裏面には粘土紐の貼付文がみられる。

d種　口縁部に列点文を施すもの。(15・60・74・95・102)

15は口縁部に2列の列点文を施し、その下部にLRとみられる縄文を施す。74・95は15と同様であるが、口縁部とその下の縄文帯を横位沈線で区画する点で異なる。102は口縁部に1列の列点文を施し、∩字状に沈線を施し、その区画内を縄文RLで充填する。60は102と同様であるが、区画内の縄文が口縁部と同じ列点文に置き換わる。

e種　口縁部は無文帯でその下に刺突を伴った沈線または隆帯をもつもの。(23・67)

23は、くの字状に内湾する器形で、横位の隆帯を施し、その隆帯上に刺突文を施す。隆帯より上部は無文帯で、下部は縄文LRを施す。1箇所貫通孔が穿たれる。67は口縁部が無文帯でその下に横位の隆沈線を施し、その沈線部分に刺突文を施している。

f種　口縁部は無文帯でその下に横位の沈線をめぐらせ、胴部に縄文を施すもの。(5・7・11・19・62・73・77・79・83・93・99・111)

この土器群で、横位沈線の下の縄文にLR・RLの2種類の原体がみられる。LRは5・7・11・19・111で、19が原体を横に回転している以外、すべて縦に回転させている。また111は口縁部の裏面にノの字状の貼付文をもつ。RLの原体を持つのは62・77・79・83・93・99である。これらはすべて原体を縦回転させる。83は口縁部裏面に粘土紐の貼付文をもつ。

5類　縄文のみの施文するもの。(1・2・4・6・12・14・16・17・21・29・31・34・35・36・39・40・41・42・43・46・47・51・52・53・57・64・66・70・71・72・73・75・82・84・85・96・100・103・104・105・106・108)

文様が縄文のみのものを一括した。この中で縄文原体の種類を観察したところ、8種類が確認された。LR、RL、LR＋結節、RL＋結節、LR（0段多条）、RL（0段多条）、RLR、単軸絡条体第1種（L）である。ここでは、おおかたの器形が分かるまで復元された土器(35・42・47・57・70・100）について、器形の特徴も含めてふれる。

35・42・100は胴部半ばで一旦膨らみ、その後はやや外反しながら立ち上がる器形である。すべてLRを縦に施す。35は底部に網代痕（1本超え1潜り）が残る。

47・70は、底部から胴部半ばにかけて膨らみ、その後は内湾して口縁部に至る器形である。47は胴上半部には単軸絡条体第1種のLを、胴下半部にはRLを縦方向に施し、底部には網代痕（1本超え1本潜り）が残る。70はRLを縦方向に施し、2～3㎝の間隔で結節縄文が表れる。

57は底部から胴半ばにかけて広がり、その後は直立気味に口縁部に至る器形である。RLを縦方向に施し、底部には網代痕（1本超え1本潜り）が残る。

6類　ミニチュア土器（18・54・76）

3点とも底部のみが残存しており、底面の直径は3～4㎝を測る。底面に18は網代痕（1本超え1本潜り)、54はミガキ、76は木葉痕がみられる。

7類　その他　微細なもの及び文様要素が少なく不明なもの。(44・45・88)

Ⅲ群　弥生時代後期　＜天王山式＞（59・61）

61は口縁部に横位に3条の平行沈線を施し、その沈線に沿って交互刺突文を施文する。また口縁部は斜位に、胴部は縦位に単軸絡条体第1種を施す。59は胴部破片で、横位の平行沈線を1条、その下部に縦位の単軸絡条体第1種を施す。

③　遺物の出土状況について

竪穴住居跡出土の土器

竪穴住居跡から出土した土器で、図示し得たものは29点である。埋甕・埋甕炉など、時期が確実な土器がなく、ほとんどが覆土中からの破片資料である。その中で量が多かったのは、覆土の堆積が比較的厚かったSI01、02である。ともに大木10式土器が主体である。なお、SI02は尾根からの谷頭に位置することもあって、前期の上器片（10）、及び大木８b式土器（20）など流れ込みとみられる土器も出土している。その他SI03からは、大木８b式土器が３点、９式が２点出土している。

また竪穴状遺構としたSKI01・02からも僅少ではあるが、覆土中から大木８b・９式土器片が出土している。

土坑出土の土器

土坑から出土したもので図示し得たものは12点である。そのうち９点が縄文のみの施文である。時期がわかるものを挙げると、SK07から大木８a式の土器片（33）であるが、この遺構は明らかにSI01（中期末葉）を切って構築されたものであり、埋没時の流れ込みと考えられる。また、SK09・10から大木８b式の上器片が出土している（37・38）。

土器埋設遺構の上器

２基検出されているが、どちらも縄文のみの施文の粗製上器で、時期は特定できるものではなかった。SZ02はSI01を切って構築されていることから、中期末葉以降であると考えられる。深鉢の底部～胴部下半までが出土しており、器厚が0.6㎝と薄手である（46）。また外面に煤の付着が顕著である。SZ04は深鉢の底部～胴部上半までが埋設されており、胴部上半には短軸絡条体第１種、下半にはRLが縦位に施されている（47）。

遺構外出土の土器

66点を図示した。弥生時代の土器片が２片出土している以外は、すべて中期大木８b式から10式に収まる。ほとんどが４区尾根上及び北斜面、南斜面から出土している。３区から出土したのは７点、１区・２区からは出土していない。グリッドで表すと、４区の遺構密集地を中心に、ⅢＢ７ｇグリッドからⅢＣ２ａグリッド付近で多く出土している。出土状況をみると、大木10式の上器片は広く分布しており、前述したグリッドから偏りなく出土するのに対して、大木８b～９式の土器片は４区尾根上の側（ⅢＢ７i・７j、ⅢＢ８j、ⅢＣ９a）から出土する傾向にある。これはSKI01・02付近にあたり、この遺構の構築年代に関連がある可能性が考えられる。

（八重畑）

引用・参考文献

岩手県立博物館　1982　『岩手の土器』

丹羽　茂　1981　「大木式土器」『縄文文化の研究　４』雄山閣

1989　「中期大木式土器様式」『縄文土器大観３』

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第５号

土師器

８点：総重量913.7ｇ出土している。器種の内訳は坏と甕である。SI05及その周辺から出土している。詳細は第14表を参照されたい。123・124・125は、内黒の坏である。123は略完形で、底面はヘラきりの調整が施されている。124・125は底部を欠き、124は外面も黒色化し、ミガキ調整が施されている。121・127は胴部破片、122は底部破片、126・128・129・130・131は口縁部破片である。調整と器形の特徴をみると、甕の口縁の内外面は横ナデ。胴部の内外面はナデ調整が施されている。非ロクロ

で、器形の特徴は口縁部が外傾し、底部が張り出している。坏はロクロ成形で、内面内黒にミガキ調整が施されている。

（3）土製品（第39・40図、写真図版28）

8点：総重量13,253.0g出土している。内訳は、縄文時代の土製品2点、古代の土製品1点、現代の土製品5点である。現代の土製品は炭窯跡との関連で掲載した。詳細は、第15表を参照されたい。

141の土製品は、欠損品であるため、詳細は不明だが、いわゆる、きのこ形土製品と推測される。傘部分と柄の部分が残存している。文様はない。傘部分の外面より内面の調整が丁寧である。142の土製品は、欠損品で詳細は不明だが、棒状に細長い形態の土製品の端部と推定される。両面・側面とも外面には、径5㎜程度の円形の刺突文が施されている。143は、羽口の破片で、詳細は不明だが、端部に溶着部の痕跡が確認できる。148は土管である。長さ64.8㎝、径13.5㎝である。144～147はレンガである。SW01の煙道と竈を区画する壁面に用いられていた。受熱して赤変したものと、付着物が付いて黒色化したものがある。この状況は、煙道の内壁の状況と一致する。144・146・145・147は、片面に記号が彫られているが、詳細は不明である。145と146は、右側に「R」「O」のアルファベッドが確認できることから、同一規格でつくられたものと推測される。

（4）石器（第41～45図、写真図版29～33）

44点、総重量24,335.5g出土している。内訳は、石鏃3点、石錐1点、楔形石器2点、不定形石器4点、礫器1点、磨製石斧3点、磨石22点、凹石2点、石皿1点、台石3点、砥石2点である。器種と石材の関係をみると、石鏃・石錐・楔形石器・不定形石器など剥片石器は頁岩が使われており、磨石は花崗閃緑岩の使用頻度が50％と高く、凹石・石皿・台石類は、流紋岩が用いられている。用途に応じて石材が使い分けられている。以下、器種ごとに概要を述べる。個々の石器の計測値・特徴などは、第16表　石器観察表を参照されたい。石鏃は3点出土している。石材は頁岩（2）・めのう（1）である。2点を図化した。形態で分類すると、凹基無茎鏃2点、平基無茎鏃1点である。153は欠損部位が多く、詳細は不明である。厚さは0.5～0.6㎝である。石錐は1点出土している。石材は頁岩である。つまみを有する形で、錐部の先端が欠損している。楔形石器は2点出土している。石材は頁岩である。1点を図化した。相対向する2辺に対となる剥離をもつ石器である。方形基調の剥片と縦長基調の剥片を使用しているものがある。不定形石器は4点出土している。石材は頁岩である。3点を図化した。主要剥離面と反対側の長さを持つ一辺に片面より加工し、刃を付けている。157は刃の角度が急斜度である。礫器は1点出土している。石材は蛇紋岩である。片面の一側縁に加工が施され、刃付けされている。磨製石斧は3点出土している。石材は頁岩（1）・蛇紋岩（2）である。いずれも欠損品である。162・164は基部を欠く、163は、磨製石斧の一辺が剥離したものと思われるが、詳細は不明である。表面には擦痕が確認できる。磨石は、破片も含めて22点出土している。石材は、凝灰岩（1）・砂岩（1）・閃緑岩（1）・花崗閃緑岩（11）・花崗斑岩（1）・安山岩（6）・アプライト（1）で、花崗閃緑岩が多く（50％）用いられている。今回の調査では、もっとも多く出土した石器である。15点を図化した。素材としての礫は球状のものや楕円形状の礫を用いている。使用された部位は、扁平な礫の一側縁または二側縁に使用痕跡がみられるもの、端部の一端または両端に敲打の痕跡があるもの、礫の両面や片面に磨面が形成されているもの、などがある。凹石は2点出土している。石材は流紋岩である。1点を図化した。187は、断面が三角形状の礫を用いて、三面の長軸方向に2～4箇所の複数個所の凹部が連なるように形成されている。凹部の大きさは、径2.5～2.0㎝、深さ0.5㎝の円錐状であ

る。石皿は1点出土している。石材は流紋岩である。台石は2点出土している。190は欠損品で詳細は不明だが、片面に受熱による痕跡として、赤色化した範囲と黒色化した範囲がある。砥石は2点出土している。石材は砂岩である。1点を図化した。193は欠損品で詳細は不明だが、中央がわずかながら凹み、その部分に向かって、溝状の使用痕がみられる。

（5）石製品（第46図、写真図版33）

2点：総重量19053.0g出土している。内訳は三角形状の石製品1点、石棒1点である。石材はいずれも砂岩である。詳細は、第17表を参照されたい。201の石製品は、厚みのある三角形状に整形された製品で、一辺が欠損している。202は大形の石棒で、長さ53.9cm、径17.6cm、重量19,000gである。敲打により成形し、先端部に括れをつくり、溝状の刻み目を一条つくっている。

（6）陶磁器（第47図、写真図版34）

14点：総重量205g出土している。すべては破片である。18・19世紀代の製品を掲載した。詳細は、第21表を参照されたい。211は湯飲み茶碗。213・224は碗の口縁部破片で、218と類似する。217・219は皿の破片。223は瓶または壺の底部破片で、高台付である。218は碗の破片で鉄釉が施されている。

（7）鉄製品（第47図、写真図版34）

4点：総重量5224.9g出土している。内訳は、鋸1点、板状鉄製品2点、船釘1点である。詳細は、第22表を参照されたい。231・232の鉄板は、炭窯の煙道部に利用されていたもので、この鉄板の上にレンガを積んで煙道と炭窯の縁を区画していた。板状のもので、231は一箇所に穿孔がある。233の鋸は、炭窯跡周辺から出土したもので、炭窯との関連性が考えられる。刃部の腐食が著しい。234の鉄製品は幅広の部分が折れている。現在も使われている船釘の形状に類似するものである。

（8）ガラス製品（第47図、写真図版34）

1点：総重量688g出土している。器種はビール瓶である。詳細は、第23表を参照されたい。瓶の下方に「DAINIPPON　BREWLAY」（大日本麦酒）の銘が記されている。戦後にアサヒビールとサッポロビールに分割されるが、それ以前の独占的なビール会社であった大日本麦酒株式会社で製造していたビール瓶である。現在のビール瓶と比較してみると、外形は肩が張り出し、内部は底面の一部が平坦でなく一方が傾斜し、瓶の接合面が縦方向に確認できる、などの特徴がある。

（9）植物遺存体（写真図版34）

2点：0.4g出土している。詳細は、第24表を参照されたい。種実2点は、遺構内からの出土で、縦方向に欠損して炭化している。251は、コナラ属－子葉、252はコナラ属コナラ亜属－子葉との分析結果を得ている（101頁）。炭化材の総重量は937.4gである。樹種にはクリ、ケヤキ、アカマツ、ホホノキ、ナラがある。竪穴住居跡出土の炭化材はクリが多く、ケヤキ、アカマツの多くは、炭窯跡からの出土である。また、炭化材6点について放射性炭素年代測定を行っている（101頁）。　（阿部）

第11表　出土地点別土器重量表

竪穴住居跡（SI）

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SI01	Q 4 層上層	161.6
2	SI01	Q 4 層上下層	196.3
3	SI01	Q 4 床直遺物	110.9
4	SI01	Q 3 層上層	833.0
5	SI01	Q 3 層上下層	430.1
6	SI01	Q 2 層上層	583.3
7	SI01	Q 2 層上下層	223.3
8	SI01	Q 2 床直	157.8
9	SI01	Q 1 層上層	83.0
10	SI01	Q 1 層上下層	291.2
11	SI01	Q 1 床直	71.0
12	SI01	周溝	19.0
13	SI01	炉南東部 1 層	1.5
14	SI01	炉南東部土層サンプル	8.3
15	SI01	炉北東部 1 層サンプル	2.2
16	SI01	炉北西部土層サンプル	1.1
17	SI01	西壁部 1 層	173.1
18	SI01	ベルト A－A' 上層	172.2
19	SI01	ベルト A－A' 下層	173.0
20	SI01	ベルト D－D' 上層	145.0
21	SI01	ベルト B－B' 下層	452.2
22	SI01	PP 1	24.8
23	SI01	PP 7	40.2
24	SI01	PP 8	6.5
25	SI01	PP 21	23.8
26	SI01	PP 12 東半	13.1
		小計	4390.6
27	SI02	東壁部 1 層黒色土	30.0
28	SI02	東壁部 2 層	186.0
29	SI02	南東部 6 層	33.9
30	SI02	東壁部土層 6 層サンプル No 1	829.7
31	SI02	南東部土層サンプル	10.1
32	SI02	南西部 1 層黒色土	72.3
33	SI02	南西 1－2 層	423.8
34	SI02	南西部 6 層	20.1
35	SI02	北東部土 1 層黒色土	258.3
36	SI02	北東部土 2 層暗褐色土	58.3
37	SI02	北東部土 3 層黒色土	87.8
38	SI02	北西部土 1 層黒色土	220.0
39	SI02	北西部土 2 層	332.0
40	SI02	ベルト A－A' 3 層	215.4
41	SI02	ベルト A－A' 5 層	384.3
42	SI02	ベルト A－A' 層 1 6 層	190.1
43	SI02	ベルト B－B' 6 層	44.4
44	SI02	東壁拡張部黒褐土北東	3.3
45	SI02	1 層（3 区 V 230の北西隅）	750.8
		小計	4360.1
46	SI03	南西部 1 層 3 層	9.8
47	SI03	Q 3 下層	35.0
48	SI03	Q 2 上層	7.1
49	SI03	Q 2 W 層	18.1
50	SI03	Q 1 上層	42.6
51	SI03	壁 1 上層（ベルト）	365.5
52	SI03	壁土 2 層（ベルト）	167.6
53	SI03	南北ベルト上層中	11.8
54	SI03	ベルト A－A' 3 層	66.8
55	SI03	石囲炉下	13.3
		小計	737.6
56	SI04	北東壁土下位	20.0
57	SI04	カマド前面壁 1	2.6
58	SI04	カマド南西壁土層	0.7
59	SI04	カマド壁土	7.0
		小計	30.3
60	SI05	掘方 一括	9.2
61	SI05	底面 P－No 1	63.1
62	SI05	底面P－No 2	45.6
63	SI05	底面P－No 3	12.6
64	SI05	底面P－No 4	53.5
65	SI05	底面P－No 5	175.9
66	SI05	底面一括P－No 5 同一？	84.3
67	SI05	カマド焚土 P No 1	36.0
68	SI05	カマド壁土	56.5
69	SI05	カマド内	120.8
70	SI05	カマド焼土内	188.4
71	SI05	煙道部土	7.5
		小計	883.4
72	SI06	Q 4 下層炭化物	2.8
73	SI06	PP 4	4.2
		小計	7.0
		合計	10409.0

竪穴状遺構（SKI）

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SK101	Q 3	30.4
2	SK101	Q 2 下層	4.3
3	SK101	Q 2 床直	9.3
4	SK101	Q 1 下層	4.8
		小計	49.0
5	SK102	Q 4 上層	100.3
6	SK102	Q 3 下層	87.2
7	SK102	上層	14.0
8	SK102	東西ベルト 1 層中	140.0
9	SK102	PP 8	5.9
		小計	347.4
		合計	396.4

土坑（SK）

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SK07	西半下層	300.2
2	SK07	西半最上層	61.0
3	SK07	東半覆土	146.0
4	SK07	西下覆土17層 P－No 2	419.5
5	SK07	北半覆 1 上層	39.0
6	SK07	北半覆土12層焼土	6.8
7	SK07	北半覆土13層 P－No 1	1547.0
8	SK07	北半覆 1 13層	86.0
9	SK07	北下覆土12層焼土	2.3
10	SK07	北半覆 1 17層	39.0
11	SK07	下層	12.7
		小計	2560.6
12	SK08	4 層	6.2
13	SK08	6 層　焼化材	4.2
14	SK08	西半覆 1 中位	16.6
		小計	27.0
15	SK09	西半覆土中位	28.6
16	SK09	西半覆 1 下位	28.8
17	SK09	北下覆土 3 層	4.0
18	SK09	北東覆土 4 層	15.5
19	SK09	北半覆土 7 層	31.0
		小計	107.9
20	SK10	南半上層	44.7
21	SK10	西下覆土 1 層	8.0
22	SK10	西半覆 1 2 層	10.0
		小計	62.7
23	SK12	南下覆土上位	34.0
24	SK12	北半覆 1 下位	5.0
		小計	39.0
25	SK13	北半覆 1 1 層	19.7
		小計	19.7
26	SK17	覆土 1 層	228.7
		小計	228.7
27	SK18	北下2層	83.5
28	SK18	北半3層	8.4
29	SK18	覆土7層	87.8
		小計	181.7
30	SK19	覆土	8.4
		小計	8.4
31	SK24	西半覆 1 黒色土	3.3
32	SK24	北半覆土 1 層	4.3
		小計	7.6
		合計	3243.3

土器埋設遺構（SZ）

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SZ02	開口上部	328.0
		小計	328.0
2	SZ04	埋設土器	962.2
		小計	962.2
		合計	1290.2

溝跡（SD）

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SD01	北半覆 1 黒褐土	5.3
2	SD01	東側覆土	5.8
3	SD01	ベルト南側覆土上位	5.2
4	SD01	ベルト北端覆土	5.6
		小計	21.9
5	SD02	黒褐土下層	19.3
6	SD02	覆土	36.5
		小計	35.8
		合計	77.7

Ⅱ B

No	出土地点	層位	重量(g)
1	BB6c－7c	検付近（Ⅱ）	21.0
2	BB6g	1 層	76.2
3	BB6j	1 層	1522.6
4	BB6j	炉縁上（北側面）	16.1
5	BB6j－7j	北炉側　焼粘土	2272.2
6	BB7f	1 層	9.0
7	BB7g	1 層	1235.0
8	BB7g	2 層	135.7
9	BB7g	黒色層	575.8
10	BB7g	炉縁上	33.6
11	BB7g	暗褐色土（炉縁土の下）	341.7
12	BB7g	北斜面	11.5
13	BB7g	暗褐土層	361.4
14	BB7h	1 層	335.0
15	BB7h	黒層	91.7
16	BB7h	炉縁上遺構確認中	18.6
17	BB7i	1 層	197.1
18	BB7j	黒層	1192.3
19	BB7i	北斜面部下ピット	508.9
20	BB7j	1 層	901.3
21	BB7j	黒層	136.8
22	BB7j	炉縁上	33.0
23	BB8g	1 層	84.6
24	BB8h	1 層	568.8
25	BB8i	1 層	939.1
26	BB8j	2 層	1523.5
27	BB8j	1 層炉土器	372.5
28	BB9e	1 層	16.8
29	BB9g	1 層	1875.7
30	BB9g	炉縁上　遺構確認中	4.7
31	BB9h	1 層	483.8
32	BB9i	1 層	223.5
33	BB9j	1 層	1843.5
34	BB10h	1 層	11.4
35	BB10h	1 層	248.8
36	BB10i	1 層	42.0
37	BB10j	1 層	239.2
		合計	19199.4

Ⅱ C

No	出土地点	層位	重量(g)
1	BC1c	1 層	58.3
2	BC7a	1 層	386.6
3	BC7a	黒層	345.5
4	BC7b	1 層	90.2
5	BC7j	炉縁上　焼粘土中	48.6
6	BC8a	1 層	66.5
7	BC8b	1 層	287.0
8	BC8b	黒層	39.1
9	BC8c	黒色検出面	10.4
10	BC8g	炉土	4.0
11	BC9a	1 層	1412.7
12	BC9b	1 層	45.0
13	BC9c	1 層	15.7
14	BC9d	1 層	35.7
15	BC9e	1 層	17.0
16	BC9f	1 層	3.0
17	BC9g	1 層	86.2
18	BC9i	1 層	7.0
19	BC10d	1 層	41.0
20	BC10e	1 層	32.5
		合計	3064.0

Ⅱ D

No	出土地点	層位	重量(g)
1	BD	古代住居の影響下	29.9
2	BD9h	黒層	4.4
		合計	34.3

Ⅳ B

No	出土地点	層位	重量(g)
1	NB1c	黒褐ベルト除去	39.1
2	NB1e	1 層	36.0
3	NB1g	1 層	102.0
4	NB1h	1 層	135.2
5	NB1h	黒層	695.0
6	NB1i	1 層	65.0
7	NB1i	黒層	574.1
8	NB1j	1 層	723.8
9	NB2g	1 層	43.6
10	NB2i	黒層	1060.6

NB

No	出土地点	層位	重量（g）
11	NB2j	Ⅰ層	2030.7
12	NB2j	Ⅱa層	367.0
13	NB8b	Ⅳ層下	58.4
		合計	6024.3

NC

No	出土地点	層位	重量（g）
1	NC1a	Ⅰ層	311.1
2	NC1b	Ⅰ層	30.3
3	NC1c	Ⅰ層	98.0
4	NC1d	Ⅰ層	11.0
5	NC2a	Ⅰ層	471.1
6	NC2a	表層	65.0
7	NC2c	Ⅰ層	170.0
8	NC4b	Ⅰ層	14.8
9	NC4b	排土	10.1
10	NC4c	Ⅱ層	16.2
11	NC4d	黒色土	250.0
12	NC4e	表層内？黒色土	601.6
13	NC5b	Ⅰ層表土	42.4
14	NC5c	Ⅱ層	277.5
15	NC5d	Ⅰ層	37.5
16	NC5d	Ⅱb層縄文期 1～20cm	194.5
17	NC5e	Ⅰ層	79.6
18	NC5e	Ⅱa層黒褐色土	421.0
19	NC5f	Ⅱ層原地 1～60cm	166.5
20	NC5g	Ⅱ層～50cm	26.1
21	NC5g	Ⅱa層	31.4
22	NC5h	Ⅱa層黒色土表 1～60cm	84.3
23	NC5i	Ⅱa層黒色土表土　60cm	53.0
		合計	3663.1

ND

No	出土地点	層位	重量（g）
1	ND	Ⅰ層	11.6
2	ND	Ⅱ層	48.1
3	ND11	排土	28.3
4	ND4b	Ⅱ層　P～No.1	1579.1
5	ND4b	Ⅱ層　P～No.2（No.1の西側）	37.6
6	ND5b	Ⅱa層原地土	41.0
		合計	1745.7

NE

No	出土地点	層位	重量（g）
1	NE	Ⅱ層	27.7
		合計	27.7

NC

No	出土地点	層位	重量（g）
1	NC4d	南壁排土	13.8
		合計	13.8

3区

No	出土地点	層位	重量（g）
1	3区	低地（側）	7.2
2	3区	Ⅰ層（T239の北側）	9.3
3	3区	Ⅰ層表土（トイレ付近）	51.2
4	3区	Ⅱa層	2044.7
5	3区	縄焼土（トイレンド土坑？）	72.0
		合計	2187.4

4区

No	出土地点	層位	重量（g）
1	4区	東斜面Ⅰ層	148.4
2	4区	北斜面　排土	835.5
3	4区（S102の北側斜面）	下位Ⅱa層縄焼土	200.1
4	4区（S102を切るトレンチ）	排土	213.0
5	4区（S104付近クリーニング）		0.8
6	4区（Ⅲ日トイレ付近）	表採	16.8
7	4区（Ⅲ日9ヶ付近）	排土	2.6
8	4区（NC5gの北側）	Ⅱ層縄焼土 1～20cm	182.0
9	4区（北端部）発掘	Ⅰ層	693.0
10	4区（T184の東側）	Ⅰ層	12.4
11	4区（北端根南斜面（谷底く））	Ⅰ層	14.0
12	4区（北端の斜面）	表採	3.4
13	4区（試掘坑残存）	Ⅰ層	21.0
		合計	2343.0

5区

No	出土地点	層位	重量（g）
1	5区	北斜面排土	84.0
		合計	84.0

トレンチ

No	出土地点	層位	重量（g）
1	T230	Ⅱ層	285.3
2	T231	Ⅱ層	22.6
3	T236	Ⅰ層	765.0
4	T237	表採土　検土粒	27.5
5	T238	Ⅰ層	491.4
6	T238	北土黒褐色土層	34.0
7	T243	Ⅰ層	17.2
8	T260	Ⅱb層縄焼色土層	41.0
9	T266	Ⅰ層	39.3
10	T268	Ⅰ層	21.6
11	T269	Ⅰ層	33.4
12	T270	Ⅰ層	51.7
13	T328	Ⅱ層黒褐土 1層～100cm	5.8
14	T332	Ⅰ層	10.6
15	T336	Ⅱ層黒褐 1層～100cm	13.6
		合計	260.2

不明

No	出土地点	層位	重量（g）
1	不明	排土	5.5
		合計	5.5

遺構種別

No	遺構名	重量（g）	%
1	竪穴住居跡（SI）	10,409.0	19.25%
2	竪穴状遺構（SKI）	396.4	0.73%
3	陥し穴状遺構（SK）	—	0.00%
4	土坑（SK）	3,243.3	6.00%
5	溝跡（SD）	77.7	0.14%
6	地土遺構（SN）	—	0.00%
7	土器埋設遺構（SZ）	1,290.2	2.39%
8	焼場跡（SW）	—	0.00%
9	ⅢB	19,199.4	35.51%
10	ⅢC	3,064.0	5.67%
11	ⅢD	34.3	0.06%
12	ⅣB	6,024.3	11.14%
13	ⅣC	3,663.1	6.77%
14	ⅣD	1,745.7	3.23%
15	ⅣE	27.7	0.05%
16	ⅤC	13.8	0.03%
17	3区	2,187.4	4.05%
18	4区	2,343.0	4.33%
19	5区	84.0	0.16%
20	トレンチ	260.2	0.48%
21	不明	5.5	0.01%
	総合計	54,069.2	100.00%

第12表　遺構別出土遺物一覧表（掲載No.）

No	遺構名	剥片石器	十器器	十製品	石器	石錘	焼礫	不定形礫	礫器	敲石・磨石	磨石	円石	有孔	小石	紡石	石製品	角錐器	鉄製品	ガラス製品	炭化種実
1	SI01	1～8			151		135	107		165・166・186					203					251
2	SI02	9～23		141				158	162・163	167～170				190・191						
3	SI03	24～28								171					193					
4	SI04																			
5	SI05	29	121～130											192						
6	SI06																			
7	SK101	30								172・173										
8	SK102	31・32								174										
9	SK01																			
10	SK02																			
11	SK03																			
12	SK04																			
13	SK05																			
14	SK06																			
15	SK07	33～36																		
16	SK08																			252
17	SK09	37																		
18	SK10	38・39																		
19	SK11																			
20	SK12	40										187								
21	SK13	41																		
22	SK14																			
23	SK15																			
24	SK16									175・176										
25	SK17	42						159												
26	SK18	43																		
27	SK19																			
28	SK20																			
29	SK21																			
30	SK22																			
31	SK23																			
32	SK24	44																		
33	SK25																			

第12表　遺構別出土遺物一覧表（掲載No.）

No	遺構名	土器	土製品	石製品	石器	石錘	剥片	砥石	磨石	凹石	石皿	台石	硬石	石製品	鉄製品	ガラス製品	炭化種実
34	SK26													202			
35	SK27																
36	SK28																
37	SK29																
38	SK40																
39	SX01																
40	SX02																
41	SZ02	46															
42	SZ04	47															
43	SD01								177・178								
44	SD02	45															
45	SD03																
46	SD04																
47	SD05																
48	SD06														211		
49	SD09														212		
50	SW01		144～148													231	
51	SW02																

第13表　土器観察表（1）縄文・弥生

（数値）：推定値　（数値）：残存値

図版No.	写図No.	掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm）口径	胴径	底径	文様（原体）の特徴	煤の付着	炭の付着	胎土	時期
32	22	1	S101	Q4層土層	深鉢	—		—	口：LR縦		N	2	中期
32	22	2	S101	Q3層土上層・下層	深鉢	(4.0)	—	9.8	胴～底：RL縦、輪積痕、底面：網代痕（1本越え1本潜り）	—	K	3	中期
32	22	3	S101	Q3層上下層	深鉢	—	—	—	胴：LR縦・沈線・貼付文　器底あり	●	N	2	大木10
32	22	4	S101	Q2層上下層	深鉢	—	—	—	口：RL縦	—	N	2	中期
32	22	5	S101	Q2層上下層	深鉢	—	—	—	胴：LR縦・沈線	—	N	2	大木10
32	22	6	S101	Q2層土下層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	—	N	2	中期
32	22	7	S101	Q1層土下層	深鉢	—	—	—	口：LR縦・沈線	●	M	1	大木10
32	22	8	S101	ベルトA～A'　覆土下	深鉢	—	—	—	胴：沈線、LR縦	—	N	2	大木9
32	22	9	S102	南東覆土2層	深鉢	—	—	—	胴：RL縦、沈線、刺突文	—	N	3	大木10
32	22	10	S102	南東覆土、黒褐土	深鉢	—	—	—	胴：RL縦、沈線　繊維を含む	—	?	4	縄期？
32	22	11	S102	南西覆土1～2層	深鉢	—	—	—	口：沈線、LR縦　壁画図案	—	K	3	大木10
32	22	12	S102	北東覆土1層黒色土	深鉢	(3.0)	—	9.8	胴：RL縦、底面：網代痕（1本越え1本潜り）	—	K	3	中期
32	22	13	S102	北西覆土1層黒色土	深鉢	—	—	—	胴：RL縦、沈線	—	N	3	大木10
32	22	14	S102	北西覆土2層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	—	N	3	中期
32	22	15	S102	北西覆土2層	深鉢	—	—	—	口：刺突、LR縦？　器底あり	●	N	2	大木10
32	22	16	S102	1層	深鉢	—	—	—	口：LR縦		M	3	中期
32	22	17	S102	覆土6層・P%1	深鉢	(9.9)	30.3	—	口：RL縦		M	2	中期
33	23	18	S102	5層	ミニチュア土器	(1.2)	—	3.8	不明、円周とミガキ、底面：網代痕（1本越え1本潜り）	—	N	2	中期
33	23	19	S102	ベルトA～A'　5層	深鉢	—	—	—	口：LR縦・沈線	—	K	2	大木10
33	23	20	S102	ベルトA～A'　5層	深鉢	—	—	—	口：LR縦・撚糸痕	—	K	4	大木8b
33	23	21	S102	ベルトA～A'　5層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	●	N	2	中期
33	23	22	S102	ベルトA～A'　覆土6層	深鉢	(3.8)	—	7.0	胴：RL縦・下端位置にミガキ、底面：ミガキ	—	N	4	大木9
33	23	23	S102	ベルトB　B'　6層	深鉢	—	—	—	胴：隆帯・刺突、LR縦、貫通孔	●	N	4	大木10
33	23	24	S103	Q1下層	深鉢	(5.5)	—	(5.6)	胴：↑RL横→撚糸縦、底面：ミガキ	—	N	4	大木8b
33	23	25	S103	Q1下層	深鉢	—	—	—	口：↑無文	—	N	4	大木8b
33	23	26	S103	覆土2層（ベルト）	深鉢	—	—	—	胴：LR縦→沈線	—	M	3	大木9
33	23	27	S103	ベルトA～A'　3層	深鉢	—	—	—	胴：RL縦→沈線	—	N	4	大木9
33	23	28	S103 有蓋甕内	覆土	深鉢	—	—	—	口：RL縦？・隆帯貼付→沈線	—	M	2	大木8b
33	23	29	S105	攪乱・P%1	深鉢	—	—	—	胴：LR縦	—	N	3	中期？
33	23	30	SK101	Q3	深鉢	—	—	—	胴：LR縦→沈線	—	N	3	大木9
33	23	31	SK102	Q3上層	浅鉢	—	—	—	胴：RL縦？	—	N	2	中期
33	23	32	SK102	Q3上層	深鉢	—	—	—	胴：LR縦・撚糸痕	—	M?	3	大木8b
33	23	33	SK07	南半段1層	深鉢	—	—	—	口：LR横・沈線・粘土帯貼付　石英多	—	N	4	大木8a
33	23	34	SK07	南半段1層・P%2	深鉢	—	—	—	胴：RL縦	—	N	3	中期
33	23	35	SK07	北半段1層・P%1	深鉢	28.6	20.6	9.3	口～↓LR縦　磨滅調整、底面：網代痕（1本越え1本潜り）、結束孔2ヶ所1ヶ所貫通していないせん孔有り		N	4	中期
33	23	36	SK07	北半段1層・P%1	深鉢	—	—	—	口：RL縦　磨滅あり	—	N	3	中期
34	23	37	SK09	南半段土下層	深鉢	—	—	—	胴：RLR縦→隆沈線	—	N	4	大木8b
34	23	38	SK10	南半1層	深鉢	—	—	—	胴：隆沈線→沈線に刺突	—	N	3	大木8b
34	23	39	SK10	西下段土2層	深鉢	—	—	—	口：（6段多条）RL縦	—	N	2	中期
34	23	40	SK12	南平面土上位	深鉢	—	—	—	胴：（6段多条）LR縦	○	N	3	中期
34	23	41	SK13	北下段土1層	深鉢	—	—	—	胴：単軸絡条体LR縦	—	N	2	中期
34	23	42	SK17	覆土1層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	—	N	3	中期
34	24	43	SK18	北平2層	深鉢	—	—	—	口：LR縦		N	3	中期
34	24	44	SK24	南平面土黒色土	深鉢	—	—	—	胴：沈線		N	2	中期
34	24	45	SX02	覆土	深鉢	(1.8)	—	—	不明、底面：ミガキ？		M	3	中期
34	24	46	SZ02	堀跡土器	深鉢	(10.5)	—	7.6	胴～↓RL縦（一部RL横）、底面：ミガキ	●	M	2	中期
34	24	47	SZ04	堀跡土器	深鉢	(30.8)	—	10.0	上半部：単軸絡条体LR縦、下半部：RL縦、底面：網代痕（1本越え1本潜り）	—	M	3	中期
34	24	48	BB6	1層	深鉢	—	—	—	胴：沈線、LR縦	—	N	3	大木9
34	24	49	BB6	1層	深鉢	—	—	—	胴：沈線、隆帯貼付、LR縦？	—	N	2	大木10
34	24	50	BB6	1層	深鉢	—	—	—	口：隆帯、沈線、LR縦	—	M?	1	大木8b?
34	24	51	BB6	1層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	—	N	3	中期
34	24	52	BB6	1層	深鉢	—	—	—	口：↓RL縦？＋結節縦？　磨滅調査	—	N	2	中期
34	24	53	BB6	1層	深鉢	—	—	—	口：LR縦	—	N	4	中期
35	24	54	BB6	7	皿a	ミニチュア土器	(1.2)	(3.4)	不明、底面：ミガキ	—	N	2	中期
35	24	55	BB6	7	貴種土器出土遺構（覆鉢土器）	深鉢	—	—	胴：沈線、LR縦		N	2	大木9？

図版No.	写真No.	遺構No.	出土地点	層位	層種	出器径(cm) 胴径	口径	底径	文様(原体)の特徴	煤の付着	漆の付着	胎土	時期
35	24	56	第E6-[一7]	表採土器出土	表採	—	—	—	Ⅰ:隆帯、胴:縄文?	●	N	3	大木8b
35	25	57	第B7g	Ⅲ層	深鉢	(23.75)	—	8.8	胴~:RL縦、底部:網代痕(二本縦よ一本潜り)		K	2	中期
35	25	58	第B7i	Ⅲ a層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:沈線、LR縦	●	N	4	大木9
35	25	59	第B7i	Ⅲ a層	深鉢	—	—	—	胴:沈線、早蕨紋?(L)縦	—	N	1	弥生
35	25	60	第B7i	北斜面面下1?中	深鉢	—	—	—	□:沈線、刺突、LR縦?	—	M	2	大木10
35	25	61	第B7i~8j	Ⅲ a層・1層	深鉢	—	—	—	□:RL横、沈線、刺突、胴:単軸絡1(L)原縄文が混在?	—	N	1	弥生
35	25	62	第B7j~9g	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:LR縦		N	3	大木10
35	25	63	第B7j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:RLR縦→隆沈線	-	K?	2	大木8b
35	25	64	第B8g	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:RL縦?	—	N	3	中期?
35	25	65	第B8i	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:沈線、隆帯貼付、LR縦	—	N	2	大木10
35	25	66	第B8i	Ⅰ層	深鉢?	(5.0)		—	胴~:RL縦、底面:網代痕(一本縦よ一本潜り)	—	N?	4	中期
35	25	67	第B8j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、刺突		N	4	大木10?
35	25	68	第B8j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:RL縦→隆沈線		N	4	大木8b
35	25	69	第B8j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:RL縦、沈線(縦位)	—	N	3	大木9
35	25	70	第B8j	Ⅲ層	深鉢	(20.3)	(14.5)	—	□~:RL縦・結節帯縦部欠損	—	M	2	中期
35	25	71	第B8j	1層検1:溝	深鉢		—	—	□:LR縦+結節縦	—	?	4	中期
35	25	72	第B8j	1層検土器	深鉢				□:LR縦+結節縦	—	?	4	中期
35	25	73	第B9g・9h	Ⅲ層	深鉢	(38.6)	(28.0)		Ⅰ:無文体、沈線、胴:RL縦		N	3	大木10
35	26	74	第B9h	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:刺突、沈線、胴:RL縦		M	2	大木10
35	26	75	第B9i	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:LR縦	—	N	3	中期
35	26	76	第B9j	Ⅰ層	ピチュア土器	(1.25)	—	(3.0)	不明、底面:木葉痕	—	N	2	中期
35	26	77	第B9j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:無文、沈線、胴:RL縦	—	?	2	大木10
35	26	78	第B9j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:刺突、沈線、胴:沈線、LR縦	●	N	3	大木10
35	26	79	第B10j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:RL縦		?	2	大木10
35	26	80	第C7a	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:LR横~沈線、隆帯 キャリパー形	—	N?	3	大木8b
35	26	81	第C7a	Ⅲ a層	深鉢	—	—	—	胴:沈線、隆帯貼付	—	N?	4	大木10
35	26	82	第C7a	Ⅲ a層	深鉢	—	—	—	□:LR縦	—	N?	3	中期
35	26	83	第C8b	Ⅰ層	深鉢				□:無文、沈線、胴:沈線、RL縦、隆帯貼付(口縁内面)	—	N?	3	大木10
35	26	84	第C9a	Ⅰ層	深鉢	(2.7)	—	(8.8)	胴~:LR縦、底面:網代痕(一本縦よ一本潜り)		M	3	中期
35	26	85	第C9a	Ⅰ層	深鉢?	(3.2)	—	(7.8)	胴~:RL縦、底面:木葉痕	—	N	3	中期
35	26	86	第C9a	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:RLR縦→隆沈線	—	M	2	大木8b
37	26	87	第W1h	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:隆帯、沈線、胴:RL縦	—	M	3	大木8b
37	26	88	第W1h	Ⅲ層表土	深鉢	(2.5)	—	(9.8)	小型、底面:網代痕(一本縦よ一本潜り)	—	N	3	中期
37	26	89	第W1h	Ⅲ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:沈線による区画、胴:LR縦	—	N	2	大木10
37	26	90	第W2g	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:沈線による区画、LR縦	—	N	3	大木10
37	26	91	第W2i	Ⅲ層	深鉢	—	—	—	□:隆帯、胴:RL縦	—	N	2	中期
37	26	92	第W2j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:刺突、沈線、隆帯(円)	—	?	2	大木10?
37	27	93	第W2j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文帯、沈線、胴:RL縦?	—	N	2	大木10
37	27	94	第W2j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:RLR縦 (口:縄文~軸L結合)	—	?	4	大木8b?
37	27	95	第W2j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	□:沈線、刺突、胴:縄文?	—	K?	2	大木10
37	27	96	第W2j	旧層	深鉢	—	—	—	□:RL縦	—	N	4	大木10
37	27	97	第W6j	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	胴:沈線による区画、LR縦	—	N	2	大木10
37	27	98	第VC1a	Ⅰ層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:沈線、無文帯、LR縦		M	3	大木10
37	27	99	第VC4e	黒褐色7黒色土	深鉢	—	—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:RL縦	—	M	4	大木10
37	27	100	第VD4b	Ⅱ層・Pit1	深鉢	(28.15)	(25.85)	—	□~:LR縦	—	M	2	中期
37	27	101	第VD4b	Ⅱ層・Ⅲ2(Pit1の覆土)	深鉢		—	—	胴:沈線、RL縦	—	N	4	大木10
37	27	102	第VD5b	Ⅱa層黒色土	深鉢	—	—	—	Ⅰ:沈線、刺突、胴:RL縦		N	3	大木10
38	27	103	VC (3区谷頂)	Ⅱa層黒褐土	深鉢	—	—	—	Ⅰ:LR縦	—	?	4	中期?
38	27	104	VC (3区谷底)	Ⅱa層黒色土	深鉢	—	—	—	□:LR縦	—	N	4	中期
38	27	105	VC (3区谷底)	Ⅱ層黒色土	深鉢	—	—	—	Ⅰ:LR縦		N?	3	中期
38	27	106	VC (3区谷頂)	Ⅱ層ド位層黒土	深鉢	—	—	—	□:RLR縦	—	N	4	中期
38	27	107	4区南斜面	1層	深鉢	—	—	—	□:無文、(隆帯貼付による)、LR縦	—	M	4	大木10
38	27	108	4区西斜面	1層	深鉢	—	—	—	□:RL縦	—	M	4	中期
38	27	109	4区S区 (の無縄斜面)	下位Ⅱa層暗褐土	深鉢	—	—	—	Ⅰ:隆帯、RLR縦	—	N	3	大木8b
38	27	110	4区北斜面	現代部分	深鉢	—	—	—	□:沈線、LR縦	—	N	3	大木10?
38	27	111	T238	1層表1.	深鉢		—	—	Ⅰ:無文、沈線、胴:LR縦、隆帯貼付(口縁内面)	—	N	2	大木10
38	27	112	T238	1層表土	深鉢	—	—	—	胴:沈線、隆帯貼付、LR縦		N	2	大木10
38	27	113	T270	1層	深鉢	—	—	—	Ⅰ:隆帯、沈線、RL縦	—	N	2	大木8b?

凡例
層位の名称、L層:Ⅰ層都、C:コハ結、炭:炭層、胴:胴部、底:底部。
文様、原体凹圧:原体圧痕出土品、絡条体圧:絡条体圧痕、単節絡:単節絡条体、多節絡:多軸絡条体、帯行:帯行等、結束:1:結束第1類、結束2:結束第2類、結束:結束構文。
煤の付着、○:内面付着、●:外面付着、—:付着なし。
内面調整、M:ミガキ、N:ナデ、—:なし。
胎土、1:良質である。
2:細礫を含まず、砂粒を含む。
3:細礫・砂粒を含むに含む。
4:細礫・砂粒を含む。

第14表　土器観察表（2）土師器

（数値）：推定値　（数値）：残存値

図版No	写真No	掲載No	出土地点	層位	器種	口径(cm) 器高	口径	底径	形状	外面調整 1段部	2段部	底部	内面調整 1段部	2段部	底面
38	27	121	S105	底面・P№2	甕	—	—	—	刷毛	—	ナデ	—	—	ナデ	—
38	27	122	S105	底面・P№4	甕	(1.8)	—	(11.0)	底部		ナデ				部欠？
38	28	123	S105	底面・P№5	甕	5.1	15.0	6.1	完形	—	ナデ	ミガキ	ミガキ	ロクロ・内面	ヘラ切り
38	28	124	S105	底面・P№6	坏	(3.7)	(15.6)	—	口～深部	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	
38	28	125	S105	底面・P№5 間一？	坏	(4.2)	(14.8)	—	口～深部	—	ケズリ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	—
38	28	126	S105	カマド内	甕	—	—	—	口～胴部	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	—	—
39	28	127	S105	カマド内覆土・P№1	甕	—	—	—	胴部		ナデ		ナデ		—
39	28	128	S105	カマド覆土	甕	—	—	—	口～胴部	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	—	—
39	28	129	S105	カマド焚き内	甕	—	—	—	口～胴部	ヨコナデ	—	ヨコナデ	—	—	—
39	28	130	S105	カマド焚き部覆土	甕	—	—	—	口～胴部	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	—	—
39	28	131	調D（古代住居の斜面下）	不明	甕	—	—	—	口～胴部	ヨコナデ	—	ナデ	—	—	—

第15表　土製品観察表

（数値）：残存値

図版No	写真No	掲載No	出土地点	層位	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	胎土	特徴	時期
39	28	141	S102	南西1～2層	きのこ形土製品	(4.0)	(4.2)	(2.0)	(16.1)	小穴混入	外面の調整が甚、金と柄の一部が残る。内面ナデ	縄文
39	28	142	調B ア｝｝～6｝	波頂後山時（縄文時代上？）	棒状土製品	(5.8)	(3.55)	(2.0)	(25.0)	小穴混入	外面に焼き締めの痕跡が観察する。一端が残存する	縄文
39	28	143	T340	II層黒褐土	羽口	(6.5)	(5.9)	(2.5)	(67.8)	雲母入	羽口の先端、赤着部の付着、溶解不明	古代
40	28	144	SW01	№1	耐火煉瓦（暖炉の側壁に使用）	(11.1)	10.4	6.3	(1054.9)	雲母入	片面に圧縮痕あり、受熱？文字なし	現代
40	28	145	SW01	№2	耐火煉瓦（暖炉の側壁に使用）	(9.9)	11.2	6.1	(1153.5)	雲母入	片面に文字あり（R・O）	現代
40	28	146	SW01	№3	耐火煉瓦（暖炉の側壁に使用）	23.4	12.0	6.2	2880.0	不明	断面形、受熱した色化している。片面に文字あり（工部局・工部局）	現代
40	28	147	SW01	№4	耐火煉瓦（暖炉の側壁に使用）	(11.7)	11.5	6.8	(1446.7)	雲母入	受熱した色化している。保存者、片面に印・文字あり（N）	現代
40	28	148	SW01	北面	土管（煙突に使われたもの）	64.8	13.5	1.4	6600.0	—	口径18.5	現代
									合計	13253.0		

第16表　石器観察表

（数値）：残存値

図版No	写真No	掲載No	出土地点	層位	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考	石材	産地等
41	29	151	S101	Q3層土土層	石鏃	(3.6)	1.7	0.5	(2.0)	凹基鏃基部、未調整・基部欠損	A	5
41	29	152	調B ア｝	石器	石鏃	(2.8)	1.3	0.4	(0.8)	凹基鏃基部、未調整欠損	A	5
—	29	153	T339	II層黒褐土　7層　-30cm	石錐？	(1.1)	1.8	0.6	(1.3)	丸基錐？未調整？未調整欠損	B	3
41	29	154	JVC 5 e	風倉上　発掘調査	掻器	(4.6)	1.7	0.8	(3.6)	つまみあり、部分欠損	A	5
41	29	155	S101	Q1PP1 上面	剥片石器	3.5	2.6	1.0	8.5	2辺一対の調整	A	5
—	29	156	天の北横秩グリット	I層	根形石器	4.3	1.8	0.7	6.6	2辺一対の調整	A	5
41	29	157	S101	Q4PP12層上（床直）	不定形石器	5.0	7.3	1.2	45.6	刃部：両面二側縁加工	A	3
41	29	158	S102	南東層土　2層	不定形石器	3.7	5.6	1.0	18.4	刃部：片面一側縁加工	A	3
41	29	159	SK17	西半集土土層　地山ボ-10cm	不定形石器	5.1	9.0	1.1	50.4	刃部：片面　側縁加工	A	3
—	29	160	JVC 5 e	II土層　黒褐色土	不定形石器	2.2	3.8	0.8	6.1	刃部：片面一側縁加工	A	5
—	29	161	T342	裸石	裸石	9.0	5.5	2.0	148.0	刃部：片面周縁加工	J	6
41	29	162	S102	南東層土下位　SBi 5	両側石斧	(4.8)	3.6	1.5	(44.8)	基部欠損、バチ状？刃こぼれあり	J	6
41	29	163	S102	南東層土土層	敲石片岩	7.8	4.9	0.6	35.8	風化せず、敲石用の部分？焼けた部分、敲跡多い	A	5
41	29	164	BC 8 a	表 I	敲石片岩	(0.8)	3.9	(1.3)	(63.8)	基部欠損、錐部形？	J	6
41	29	165	S101	Q4層土土層	磨石	13.2	6.6	5.2	836.0	全面磨面、一側縁に敲面、一端に敲打痕	G	2
42	30	166	S101	北東層土1層黒色土	磨石	13.0	9.6	7.2	1349.3	全面磨面、二側縁に敲面	H	2
42	30	167	S102	北西層土3層　SBi 1	磨石	15.3	7.35	5.3	972.3	全面磨面、二端縁に敲面	I	4
42	30	168	S102	北西層土3層　SBi 2	磨石	13.0	6.35	5.3	574.4	一側縁に敲打	D	5
42	30	169	S102	盤土下位　SBi 4	磨石	14.9	8.7	4.95	1045.6	全面磨面、二側縁に敲面	K	2
43	30	170	S102	ベルトA　A' 3層	磨石	14.45	7.8	6.4	1167.5	一側縁に敲面	I	4
43	31	171	S102	西北ベルト上層中	磨石	16.5	8.4	6.2	1247.7	全面磨面？一端に敲打痕	G	2
43	31	172	SK101	Q3上層	磨石	11.85	7.9	6.0	860.1	全面磨面、二側縁に敲痕、側縁部欠損	G	2
43	31	173	SK101	Q3上層	磨石	12.9	8.4	6.4	957.4	全面磨面、一側縁に敲痕、著減著しい、側縁部欠損	G	2
44	31	174	SK102	南北ベルト上層土1層	磨石	12.8	9.3	6.4	1128.6	全面磨面、一側縁に敲打痕	G	2
44	31	175	SK16	南半集	磨石	9.8	6.4	4.9	436.7	全面磨面、側縁・端部に敲打痕あり	G	2
44	31	176	SK16	南半集	磨石	11.3	8.6	5.4	793.0	全面磨面	I	2
44	31	177	SD01	盤上土層	磨石	10.5	8.0	5.3	655.4	全面磨面	I	4
44	31	178	SD01	I層　黒褐土	磨石	(12.2)	10.0	7.1	(1267.3)	全面磨面	I	4
—	32	179	調B ア｝～7｝	黄褐色土焼土層（縄文時代？）	磨石	(11.5)	8.2	5.2	(633.9)	全面磨面、思減著しい、側縁部欠損	G	2
—	32	180	BC 7 a	I層	磨石	(8.0)	(7.6)	5.3	(510.8)	全面磨面、片かえ痕	G	2
—	32	181	BC 7 a	I層表 I	磨石	10.1	6.6	4.9	494.1	全面磨面、両面欠損？	G	2
45	32	182	BC10g	I層	磨石	16.3	6.7	6.6	1081.4	一側縁に敲面、断面三角形	G	3
—	32	183	JVC 4 e	黒色土下	磨石	(6.6)	(10.2)	(4.5)	(262.2)	磨石の破片？一側縁に敲痕	F	2
—	32	184	JVC 5 g	II層－50cm	凝灰	(8.2)	(9.0)	(6.8)	(629.9)	全周敲打？	D	4
—	32	185	4 E 遺構外	木根	磨石	(7.6)	(6.5)	(5.1)	(413.5)	全面磨面？	G	2
	32	186	S101	Q3層土下層	磨石？	(11.3)	(2.6)	(1.1)	(50.8)	磨石の端部破？被覆？	C	5
45	32	187	SK15	西下層土中位　SBi 1	凹石	12.7	7.6	4.2	444.1	断面三角形、一面に一対の窪み（凹形）	D	1
—	32	188	調D 8 i	I層	凹石	10.8	7.3	6.4	336.2	裏面三角形、他2面に窪み（凹形）しずは調査する	D	1
—	32	189	JVE	石器？	石錘？	(10.0)	(9.6)	(7.4)	(745.0)	中心？円錐あり	D	1
45	32	190	S102	北西層土3層　SBi 3	台石	(23.4)	(15.5)	3.8	(2004.5)	周囲平坦、片面に受熱した痕跡あり、側縁部欠損	D	1
45	32	191	S102	ベルトA－A' 3層	台石？	(15.5)	(9.8)	3.3	(1245.4)	両面平坦、使用のため研磨不明	C	2
—	33	192	S105	床面直上　SKi 1	台石？	12.0	(12.0)	3.0	(901.5)	台石？土器由為	D	1
45	33	193	S102	Q3上層	砥石	(11.6)	(11.5)	(4.9)	(769.4)	片面に強く受け、使跡の痕跡あり	R	7
—	33	194	調B 9 h	I層	砥石	(5.3)	(3.5)	(2.2)	(37.6)	砥石状況が強く、研磨不明	E	7
								合計	24335.5			

第17表　石製品観察表

（数値）：残存値

図版No	写真No	掲載No	出土地点	層位	器種	計測値（cm）長さ	幅	厚さ	重量（g）	備考	心材	産地等
46	33	201	S101	Q 2 覆土下層	三角形状石製品	4.0	(3.9)	2.6	(53.0)	四丸二角形？一側縁欠損　一石製品として掲載	E	7
46	33	202	SK26	覆土中	石錘	53.9	17.6	14.6	(19000.0	紐圧による整形痕あり、端部に刻みあり	E	7
								合計	19053.0			

第18表　石材略号一覧表

*心材略号　覧

略号	石　材
A	頁岩
B	めのう
C	凝灰岩
D	流紋岩
E	砂岩
F	閃緑岩
G	花崗閃緑岩
H	花崗流岩
I	安山岩
J	輝緑岩
K	アプライト

第19表　産地等略号一覧表

*産地等略号一覧

略号	産　地　等
1	北上山地　新生代古第三紀
2	北上山地　中生代白亜紀
3	北上山地？　中生代白亜紀
4	北上山地（原産地？）　中生代白亜紀
5	北上山地　中生代三畳～ジュラ紀
6	北上山地　古生代オルドビス紀
7	北上山地？

第20表　石器・石製品の器種別石材一覧表

No	器種（重量）＼石材	石核	剥片	楔形	不定形	敲石	磨製石斧	敲磨器 剥石	凹石	石皿	台石	砥石	石製品	合計（%）
A	頁岩（北上山地）	2 (66.67)	1 (100.00)	2 (100.00)	4 (100.00)		1 (33.33)							10 (21.74)
B	めのう（北上山地？）	1 (33.33)												1 (2.17)
C	凝灰岩（北上山地）							1 (4.55)						1 (2.17)
D	流紋岩（北上山地）							1 (4.55)	2 (100.00)	1 (100.00)	2 (66.67)			6 (13.04)
E	砂岩（北上山地？）											2 (100.00)	2 (100.00)	4 (8.70)
F	閃緑岩（北上山地）							1 (4.55)						1 (2.17)
G	花崗閃緑岩（北上山地）							11 (50.00)			1 (33.33)			12 (26.09)
H	花崗流岩（北上山地）							1 (4.55)						1 (2.17)
I	安山岩（北上山地（原産地?）））							6 (27.27)						6 (13.04)
J	輝緑岩（北上山地）					1 (100.00)	2 (66.67)							3 (6.52)
K	アプライト（北上山地）							1 (4.55)						1 (2.17)
	合計（%）	3 (6.52)	1 (2.17)	2 (4.35)	4 (8.70)	1 (2.17)	3 (6.52)	22 (47.83)	2 (4.35)	1 (2.17)	3 (6.52)	2 (4.35)	2 (4.35)	46 (100.00)

第21表　陶磁器観察表

（数値）：残存値

図版No	写真No	掲載No	出土地点	層位	器種	計測値（cm）器高	口径	底径	重量（g）	産地	時期	特徴
47	34	211	SD06	覆土1層黒褐土	椀	－	－	－	(26.9)	不明	19C	
－	34	212	SF09	覆土黒褐土	鉢	－	－	－	(0.9)	不明	不明	不・小鉢
47	34	213	NC5ｆ	B層黒色土－60cm	鉢	－	－	－	(4.6)	瀬戸	18C後半	
－	34	214	ND4ｂ	P1南側	土瓶	－	－	－	(9.1)	不明	不明	注口者あり
－	34	215	ND5～6ｂ	黄褐土の下層秋田砂	鉢	－	－	－	(2.6)	東北	19C	
－	34	216	3区	表採	鉢	－	－	－	(3.1)	不明	19C	
47	34	217	3区通路下	Ⅱa層黒褐土	皿	－	－	－	(11)	不明	18C後半	紅貝釉はり
47	34	218	3区作業道上	不明	椀	－	－	－	(22.1)	不明	18C後半	鉄釉
47	34	219	T229	表土	皿	－	－	－	(21.1)	不明	18C後半	
－	34	220	T230盛	表土	皿	－	－	－	(21.8)	東北？	不明	陶胎染付
－	34	221	T231	表土	鉢	－	－	－	(3.7)	不明	19C	
－	34	222	T332	1層	瓶？	－	－	－	(11.2)	不明	19C	瓶付
47	34	223	T335	4層表土	板・盆？	(1.7)	－	(7.9)	(60.6)	不明	昭和以降か？	高石付・内面に傷あり
47	34	224	T347	黒色土	鉢		－	－	(4.3)	不明	不明	鉄釉

第22表　鉄製品観察表

（数値）：残存値

図版No.	写真No.	掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	特徴	時期
47	34	231	SW01	神棚口	鉄板	57.5	8.5	1.0	3409.0		現代
47	34	232	SW01周辺	表土（7層）	鉄板	44.2	7.05	0.9	1711.6	断面隅丸長方形、端部欠	現代
47	34	233	SW01周辺	表土下（1層）	釘	(30.2)	4.2	0.2	(64.8)	先端部欠損	現代
47	34	234	TS03	1層表土	釘か	13.1	1.8	0.5	39.5	断面長方形、頭部が折れ曲っている	現代？

第23表　ガラス製品観察表

（数値）：残存値

図版No.	写真No.	掲載No.	出土地点	層位	器種	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	特徴	時期
47	34	241	ND7g　3区盛土直下	表土　黒色土中	ビール瓶	28.6	7.9	0.5	688.8	大日本麦酒株（明治39（1906）～昭和24（1949））の製品　三角、黒色、内底が粗くゴ。	現代

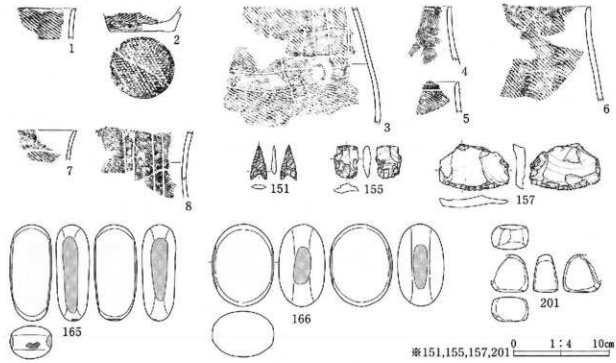
第24表　炭化種実観察表

写真No.	掲載No.	出土地点	層位	樹種	重量（g）	形状	特徴・備考
34	252	S101	Q3層土下層	コナラ属　子葉	0.1	破片（半分）	炭化している
34	252	SK08	3～4層	コナラ属コナラ亜属　子葉	0.3	破片（半分）	炭化している
				合計	0.4		

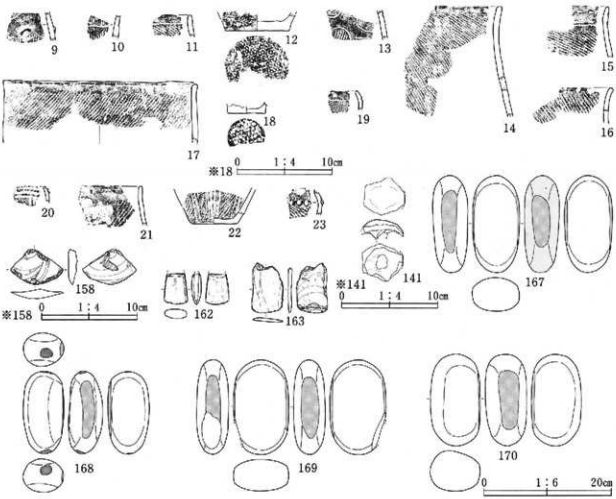
第25表　炭化材観察表

No.	出土地点	層位	樹種名	重量（g）	備考
1	S102	北西層上3層　炭化材No.1	クリ（ケヤマハンノキ）	13.5	
2	S102	北西層上3層　炭化材No.2	ケヤキ，クリ	15.6	C14（試料No.802）
3	S102	北西層上3層　炭化材No.3	クリ	24.3	
4	S102	層上6層　炭化材No.4	クリ	13.4	
5	S102	層上6層　炭化材No.5	ケヤキ	12.2	
6	S102－PP1	北半層上1層	クリ	9.2	
7	S102　PP2	南半層上1層	クリ	0.1	
8	S102－PP3	西半層上1層　炭	クリ	1.1	
9	S102－PP4	西半層上1層　炭	ケヤキ	1.9	
10	S102－PP5	北半層上1層　炭	ケヤキ	1.5	
			小計	85.8	
11	S103	層上1層（ベルト）	ハンノキ	0.2	
			小計	0.2	
12	S106	Q4下層　炭化物	クリ	26.4	
13	S106	炭化物　No.1	クリ	1.6	
14	S106	炭化物　No.2	ケヤキ	16.4	
15	S106	炭化物　No.3	クリ	1.5	
16	S106	炭化物　No.4	ケヤキ	41.0	C14（試料No.833）
			小計	86.9	
17	SK102	Q3上層	アカマツ	0.9	
			小計	0.9	
18	SK07	南半下層　炭化物	ケヤキ	18.8	
19	SK07	南半層土17層	アカマツ	6.6	
20	SK07	北半層上12層　焼土	クリ	7.7	
21	SK07	北半層上14層中　焼土	ホホノキ	1.1	
22	SK07	北半層土17層　焼土	クリ	0.1	
23	SK07	北半層土17層　炭化物No.1	クリ	8.5	C14（試料No.816）
24	SK07	北半層土17層　炭化物No.2	ケヤキ	6.0	
			小計	48.8	
25	SK08	南半層上下位　炭	ケヤキ	3.0	
26	SK08	5層　炭化材	ケヤキ	4.2	C14（試料No.821）
			小計	7.2	
27	SN01	層土　焼土下の炭化材	クリ	6.5	C14（試料No.822）
			小計	6.5	
28	SW01	底面上　炭材	ケヤキ	179.0	
29	SW01	底面　炭材	ケヤキ	123.2	
30	SW01	底面（橋本用？）	ナラ	55.3	
			小計	357.5	
31	SW02	西上　炭（付近	アカマツ	279.3	
32	SW02	東面上（中央）炭化物	アカマツ	26.9	
			小計	306.2	
33	BB6g	1層　ベルト除去	ホホノキ	8.5	
34	BB7i	BB3層	ケヤキ	1.8	
35	TS90	BB第5層　炭	アカマツ	17.1	
			小計	27.4	
			合計	937.4	

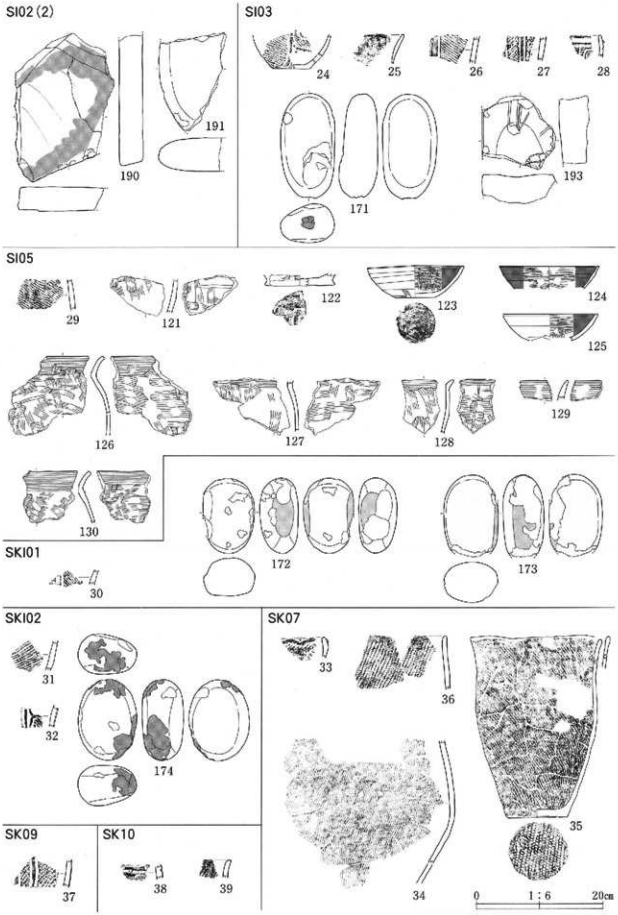
SI01



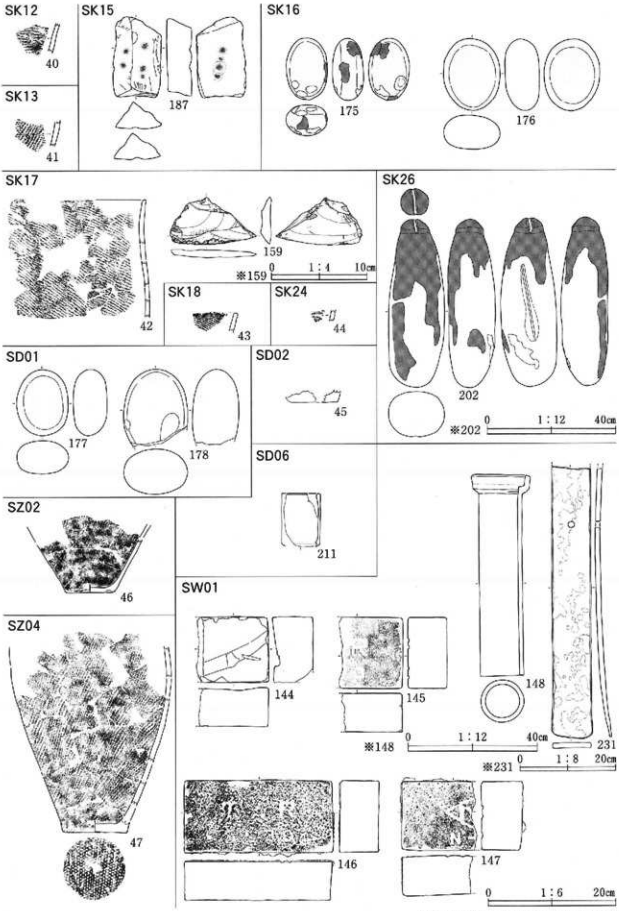
SI02(1)



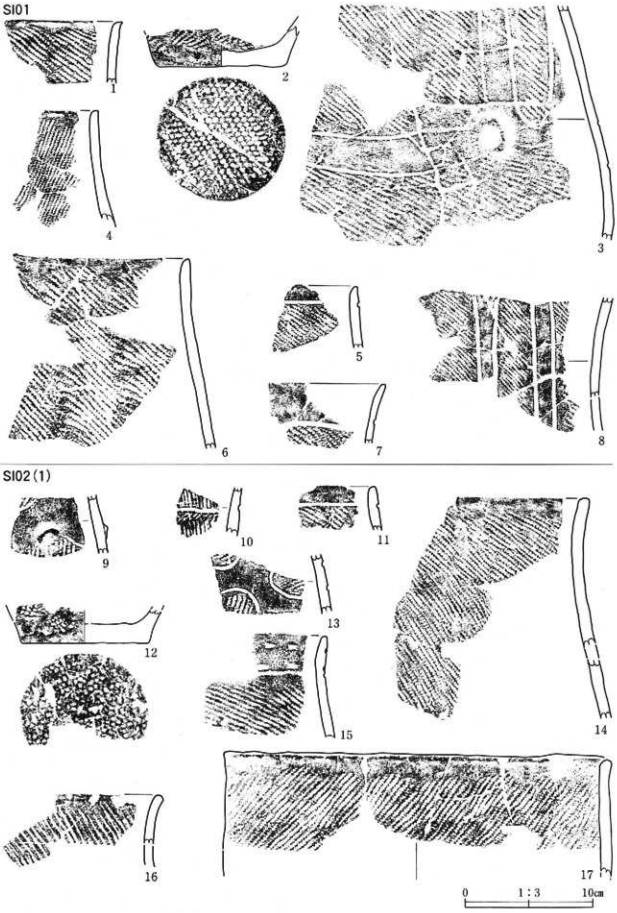
第29図　遺構別出土遺物集成図（1）　上器:1/6、上製品:1/4、剥片石器:1/4、礫石器:1/6



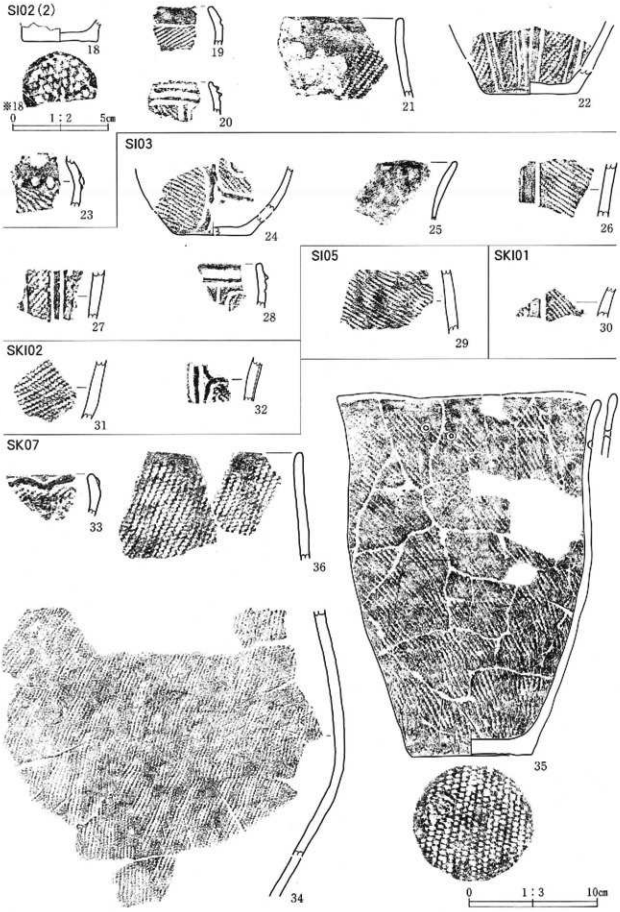
第30図　遺構別出土遺物集成図（2）　土器:1/6、土製品:1/4、剥片石器:1/4、礫石器:1/6



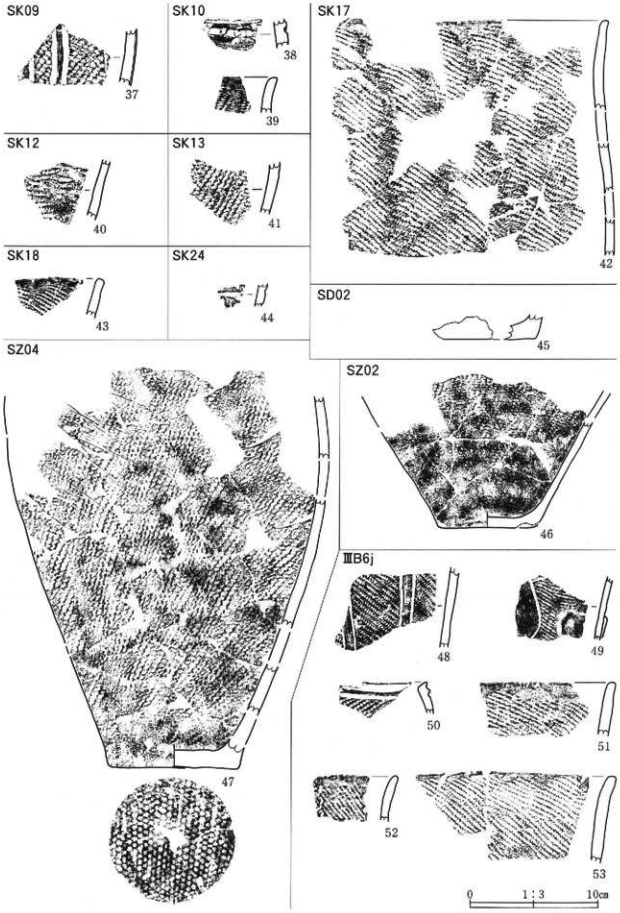
第31図　遺構別出土遺物集成図（3）　土器:1/6、土製品:1/4、剥片石器:1/4、礫石器:1/6



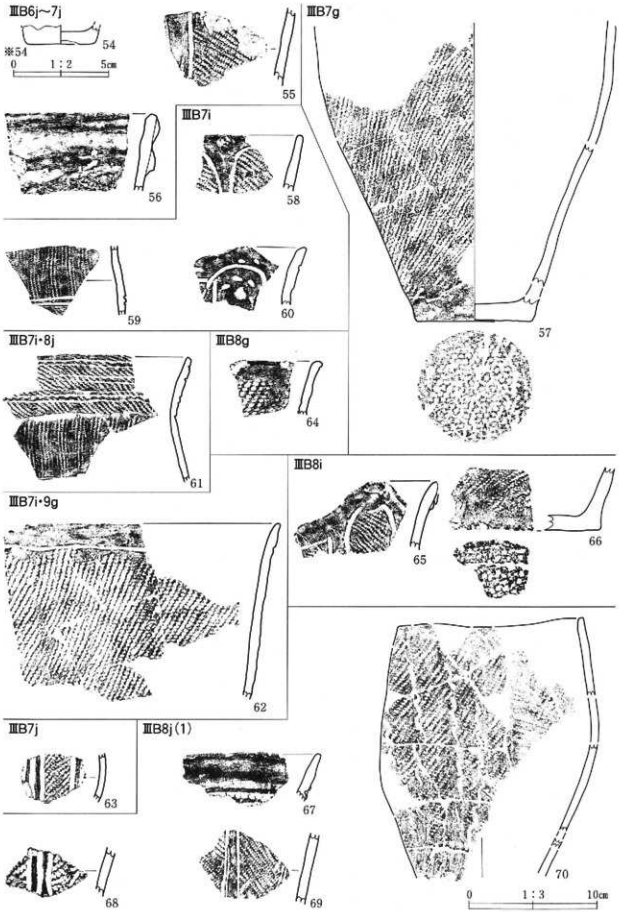
第32図　土器 (1)


SI02 (2)
18
※18
0　1：2　5cm
19
20
21
22
23
SI03
24
25
26
27
28
SI05
29
SKI01
30
SKI02
31
32
SK07
33
36
35
34
0　1：3　10cm

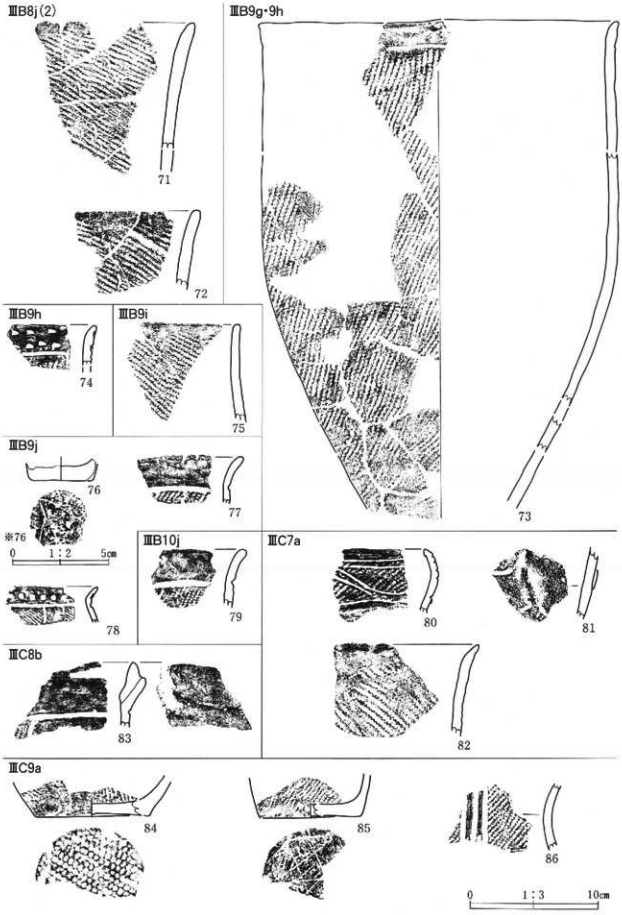
第33図　土器（2）


SK09
37
SK10
38
39
SK17
42
SK12
40
SK13
41
SK18
43
SK24
44
SD02
45
SZ04
47
SZ02
46
ⅢB6j
48
49
50
51
52
53
0
1:3
10cm

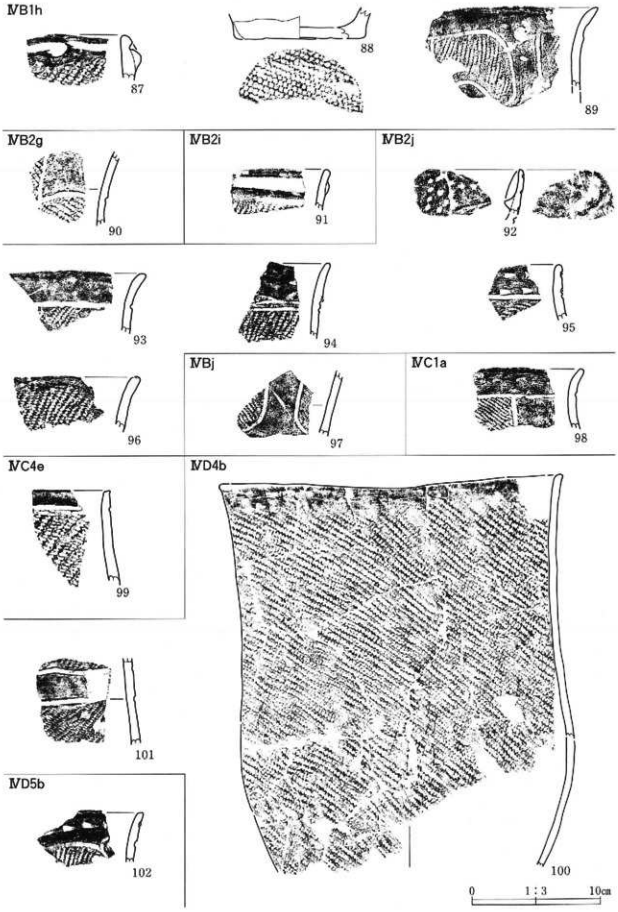
第34図　土器（3）


ⅢB6j～7j
54
※54
0　1：2　5cm
55
ⅢB7g
56
ⅢB7i
58
59
60
57
ⅢB7i・8j
ⅢB8g
64
61
ⅢB8i
65
66
ⅢB7i・9g
62
ⅢB7j
63
ⅢB8j(1)
67
68
69
70
0　1：3　10cm

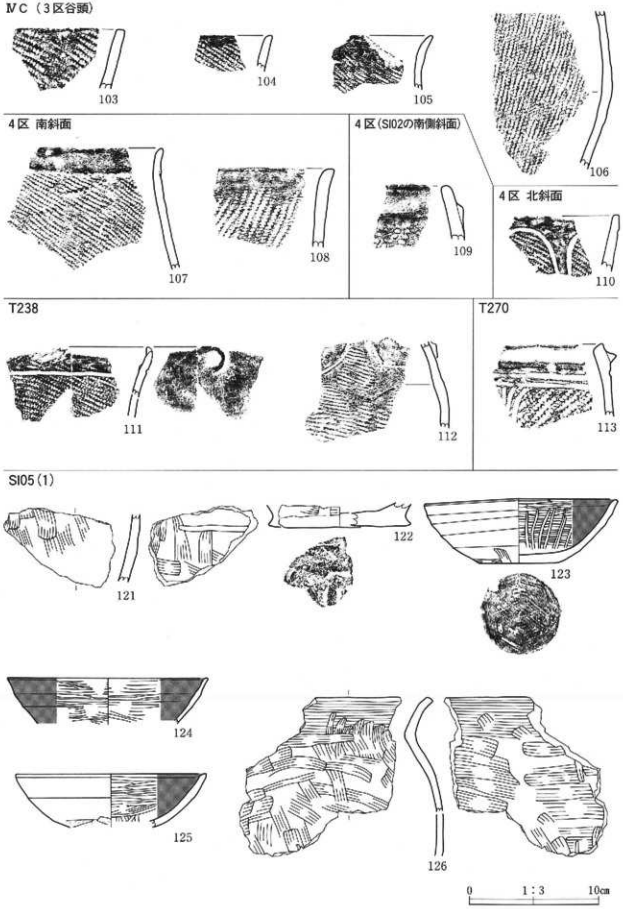
第35図　土器（4）


ⅢB8j(2)
71
72
ⅢB9g･9h
73
ⅢB9h
74
ⅢB9i
75
ⅢB9j
76
77
※76
0　1:2　5cm
78
ⅢB10j
79
ⅢC7a
80
81
82
ⅢC8b
83
ⅢC9a
84
85
86
0　1:3　10cm

第36図　土器（5）

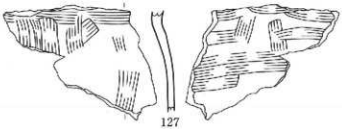

ⅣB1h
87
88
89
ⅣB2g
90
ⅣB2i
91
ⅣB2j
92
93
94
95
ⅣBj
97
ⅣC1a
96
98
ⅣC4e
99
ⅣD4b
100
101
ⅣD5b
102
0
1:3
10cm

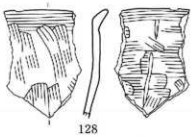
第37図　土器（6）

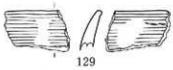

Ⅳ C（3区谷頭）
103
104
105
106
4区 南斜面
107
108
4区（SI02の南側斜面）
109
4区 北斜面
110
T238
111
112
T270
113
SI05（1）
121
122
123
124
125
126
0
1：3
10cm

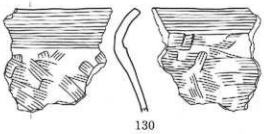
第38図　土器（7）

SI05 (2)

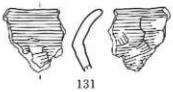




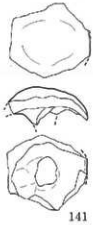


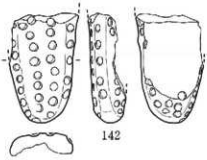


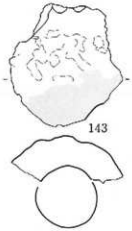
ⅢD（古代住居の斜面下）



0　1：3　10cm

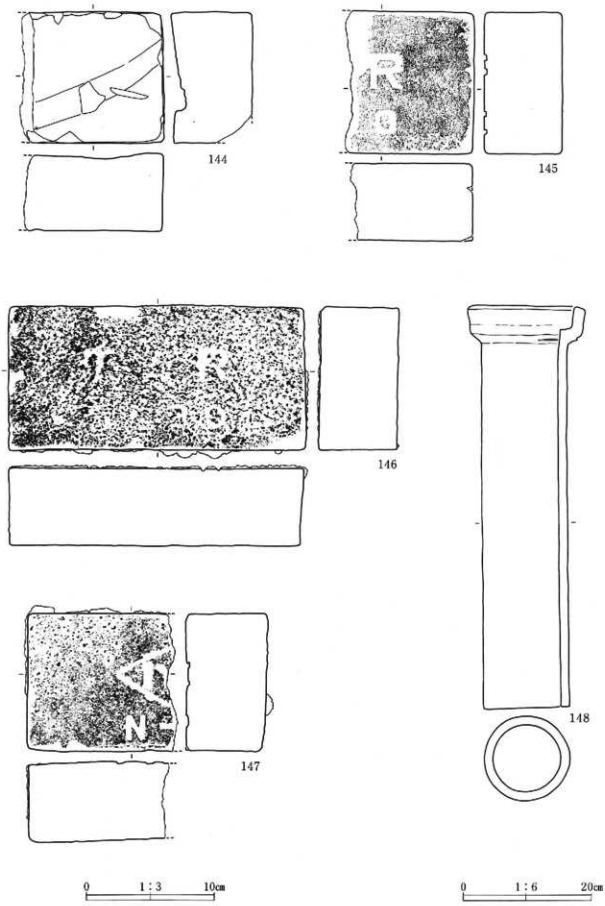




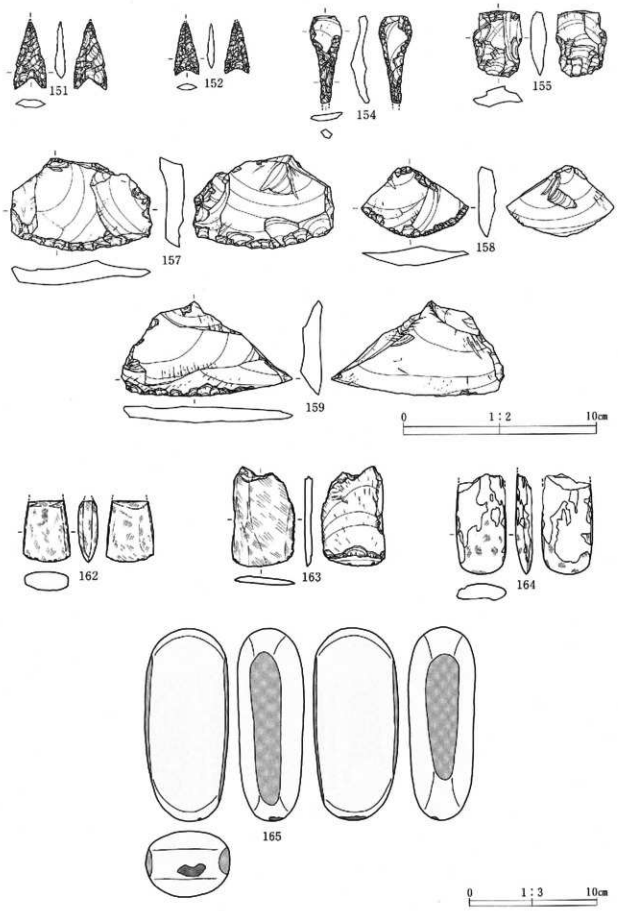


0　1：2　10cm

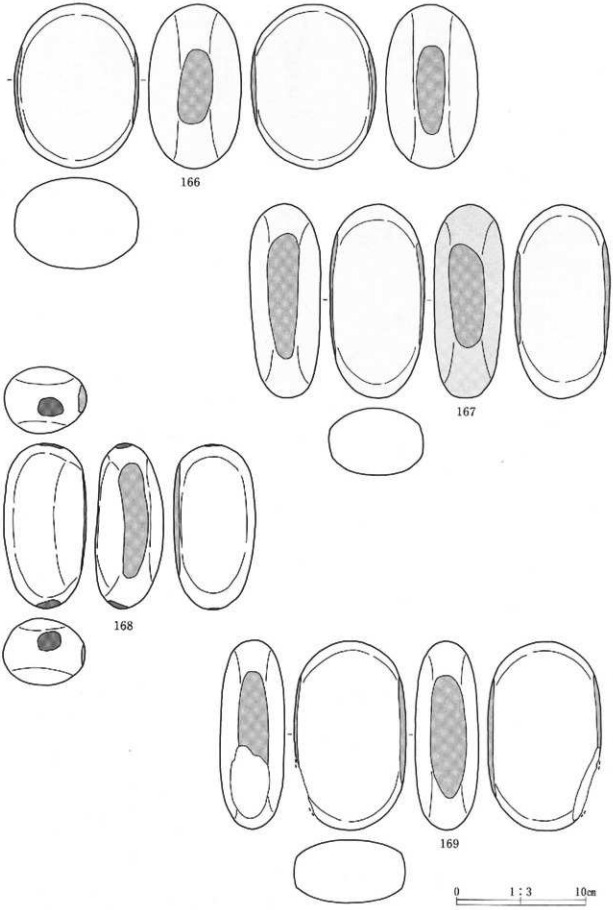
第39図　土器（8）・土製品（1）



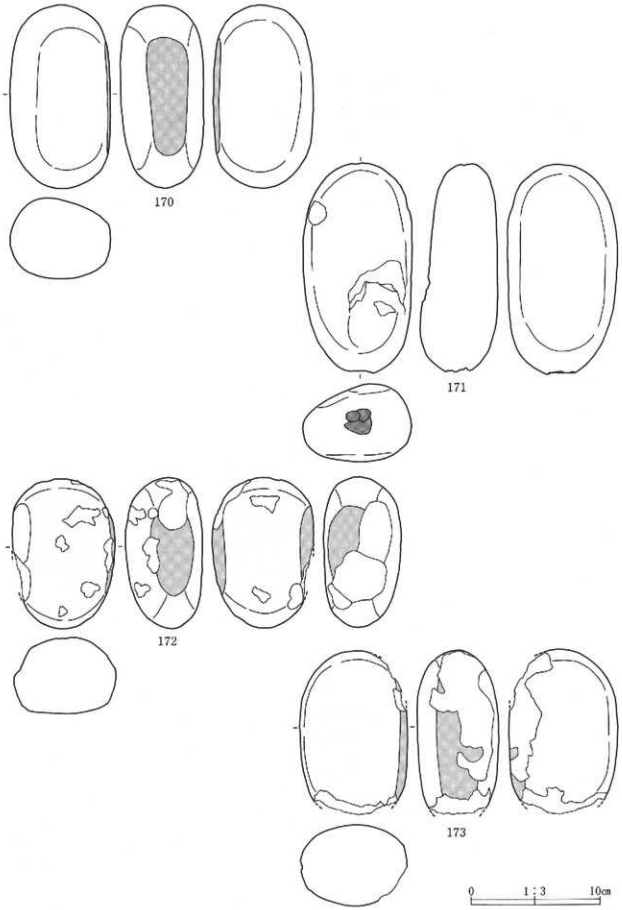
第40図　土製品（2）



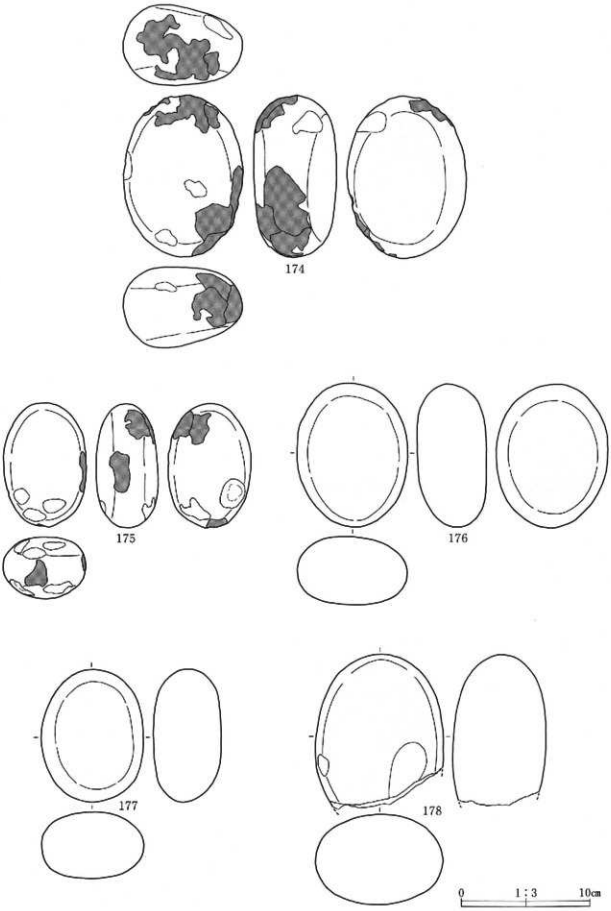
第41図　石器（1）



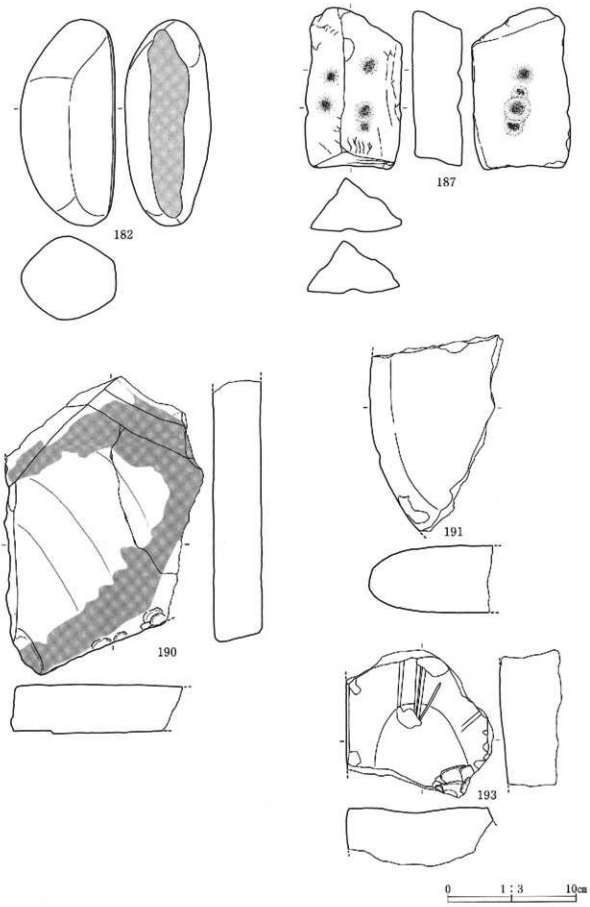
第42図　石器（2）



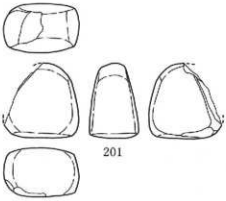
第43図　石器（3）



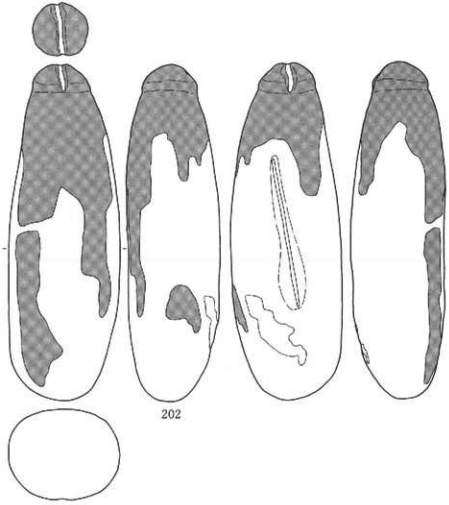
第44図　石器（4）



第45図　石器（5）

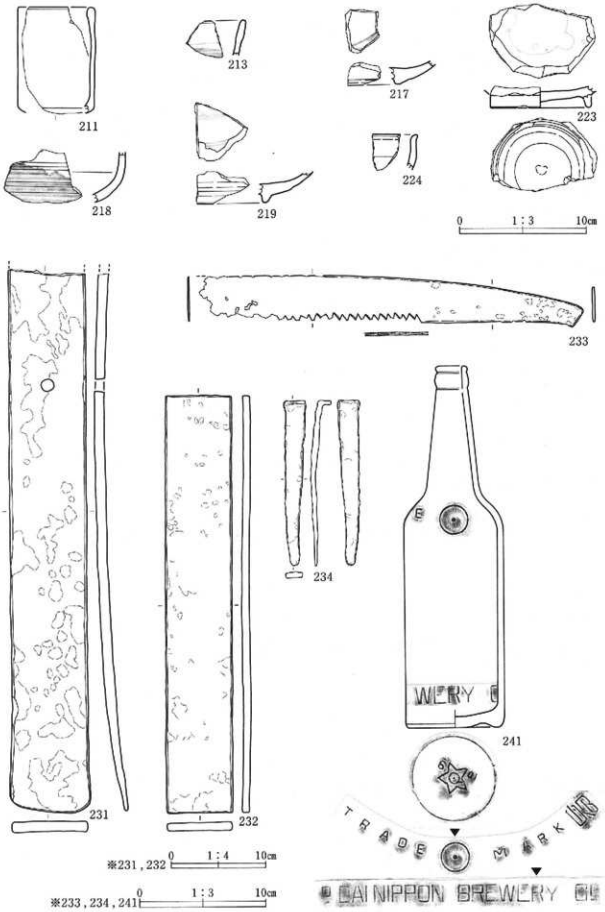


0　1：2　10cm



0　1：6　20cm

第46図　石製品



第47図　陶磁器・鉄製品・ガラス製品

Ⅴ　八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡

1　検　出　遺　構

（1）検出遺構の概要（第48図～50図）

今回の調査で検出された遺構は、陥し穴状遺構１基、土坑１基である。調査区は東側の尾根から西側の谷部までの急斜面の中腹に位置し、狭い範囲でありながら、標高34～45mとその比高は11mを測る。表土及びⅢ層が厚く堆積しており、遺構はその下部から検出された。遺物は出土していないため時期の詳細は不明である。

（2）陥し穴状遺構

SK01陥し穴状遺構

遺構（第50図、写真図版35）

［位置・検出状況］ⅠＡ８ｉグリッド。トレンチを掘削中にⅢ層～Ⅳ層で黒褐色土の広がりを確認した。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長径は343cm、短径は17～69cm、底部の長径は314cm、短径は６～44cm、深さは112cmを測る。平面形は溝状で、中央部が最も細く、両端部に向かって丸く広がる形状である。

［覆土・堆積状況］中央部は暗褐色土１層の堆積であるが、端部は黒褐色土、暗褐色土を主体に６層に細分される。堆積状況は不明である。

［壁・底面］壁はやや外傾して立ち上がる。底面は凹凸を持ち、全体的に地形に沿って、北に向って低くなる。

［その他の付属施設］なし。

遺物　なし。

時期　時期を判断できる遺物は出土していないが、遺構の形状から縄文時代と推測される。

（3）土　　坑

SK02土坑

遺構（第50図、写真図版35）

［位置・検出状況］ⅡＡ４ｉ～４ｈグリッド。Ⅲ層～Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして検出した。土坑の覆土と検出面の土層の識別が難しかったため、ベルト沿いにトレンチ状に掘り下げ、壁・底部の確認を行った。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］規模は、開口部径156×143cm、底部径148×80cm、平面形は楕円形である。深さは、19cmである。

［覆土・堆積状況］黒褐色土・にぶい黄褐色土で構成される。

［壁・底面］壁・底面はⅣ層を掘り込んでつくられている。壁はほぼ真直ぐ立ち上がり、底面は東から西に緩く傾斜する。

［その他の付属施設］なし。

遺物

［出土状況］覆土１層から炭化材２点（1.9ｇ）が出土している。

［炭化材］樹種はホホノキとの鑑定を受けている。

時期　出土遺物がなく、詳細は不明である。

第26表　陥し穴状遺構観察表　　（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模(cm) 開口部	底部	深さ	底面のレベル(m)	覆土の堆積状況（上位→下位）	重複関係（旧→新）	性格	付属施設	備考	時期
50	35	SK01	ⅢA8i	Ⅲ－Ⅳ層	楕円形（湾状部にくびれあり）	363×69	314×44	112.2	41.488	黒褐土、褐黄色土、褐色土	なし	陥	なし		縄文

第27表　土坑観察表　　（数値）：残存値

図版No	写図No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模(cm) 開口部	底部	深さ	底面のレベル(m)	覆土の堆積状況（上位→下位）	重複関係（旧→新）	性格	付属施設	備考	時期
50	33	SK02	ⅡA41・4h	Ⅲ－Ⅳ層	円形	156×143	148×80	19.5	37.699	灰褐土、にぶい黄褐土	なし	土	なし		不明

2　ま　と　め

八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、八木沢川の東側に接する、小起伏山地上に位置する。今回の調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設に伴って行われた試掘調査によって遺構の存在が確認された部分について、本調査を実施したものである。調査範囲は、尾根から谷に向かう、急斜面の中腹で、700㎡の狭小な範囲である。

検出された遺構は、陥し穴状遺構1基、土坑1基である。両遺構とも時期がわかる遺物が出土しておらず、不明な点が多いが、陥し穴状遺構（SK01）に関しては、検出面・形状などから、時期は、縄文時代の可能性があると推測される。今回の調査地点では、竪穴住居跡などは検出されておらず、主に狩猟の場として用いられていた場所であることが判明した。

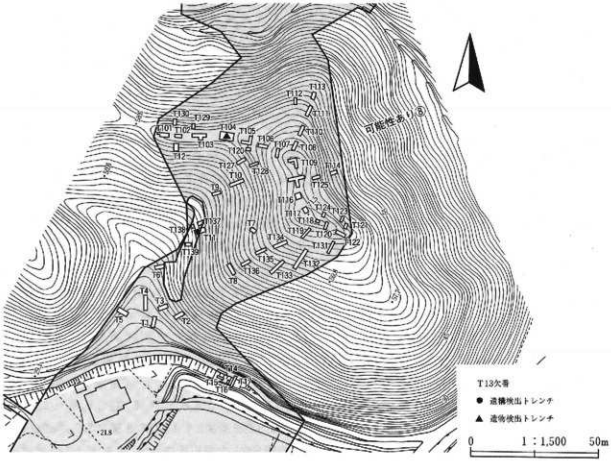
ここでは陥し穴状遺構であるSK01について検討する。まず立地をみると、丘陵地の尾根から谷に向かう急斜面上に位置する。このような事例は、近隣の八木沢古舘遺跡（註1）、木戸井内Ⅳ遺跡（註2）などでもみられ、シカや小動物など、狩猟対象の獣の通り道となる箇所を選んで構築されたものと考えられる。

次に形態についてみていくと、平面形は両端部が丸く膨らむ8の字状を呈する。中央部は細くなっており、断面形も細いU字状を呈する。陥し穴状遺構の形態については、多くの研究者によって分類が試みられているが、岩手県の事例を集成した分類案をみると、大きくわけて3種類に分類されている（註3）。第一に溝形のもの、第二に楕円形もしくは長方形のもの、第三に円形もしくは方形を基調とするものの3種である。本遺跡のSK01は第一の溝形の範疇に入るものと思われる。その溝形の細分をした瀬川氏の分類（註4）によると「底部両端が上部開口部両端と同一の長さか、又は短いが、両先端部が広がるタイプ」とされるAⅣ類に近いものである。

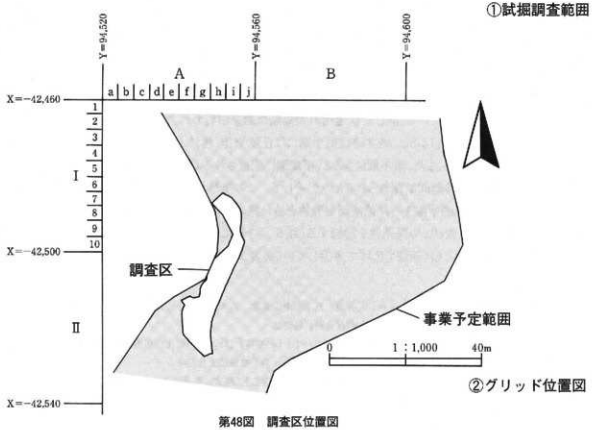
前述した八木沢古舘遺跡や木戸井内Ⅳ遺跡では、本遺跡と立地・形状（溝形）が類似する陥し穴状遺構が検出されているが、その一方、本書で報告している八木沢Ⅱ遺跡、また現在整理中の八木沢駒込Ⅱ遺跡からは、低地の広い平坦面に立地する事例も検出されている。この場合、溝形、楕円形など、さまざまな形態がみられる。この立地や形態の違いについては、関東地方の大規模な調査例や、アイヌ・東北マタギなどの民俗事例などから研究が行われている。陥し穴状遺構の大規模な調査が行われた、東京都多摩ニュータウン遺跡群の分析をした佐藤宏之氏によると、縄文時代前半期には丘陵全体、特に水源近くに配置され、形状は溝形・楕円形が多くみられるという。また、後半期になると、平坦面に配置されるようになり、溝状のものは長狭化、円形・楕円形のものは大型化する傾向が認められるという。そして、この遺構としての形状の変化を猟法の変化（獲物がかかるのを待つ消極的手法から狩猟集団が獲物を追い詰めて落とす積極的手法への変化）や、獣種の選別化・個別化といった変化との関連性を指摘する（註5）。今後は、これらの指摘がこの宮古地区にも該当するのか否か、多くの事例とともに範囲を広げて考察していく必要がある。　（八重畑）

註

(1) 岩手県宮古市教育委員会　2006『八木沢古舘　八木沢中田遺跡　八木沢駒込Ⅰ遺跡』第67集
(2) 岩手県宮古市教育委員会　2006『木戸井内Ⅳ遺跡』第68集
(3) 田村壮一　1987『陥し穴状遺構の形態と時期について』『紀要Ⅶ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
(4) 瀬川司男　1981『陥し穴状遺構について』『紀要Ⅰ』（財）岩手県埋蔵文化財センター
(5) 佐藤宏之　1998『陥し穴猟の土俗考古学－狩猟システムと構造』『縄文式生活構造　土俗考古学からのアプローチ』安斎正人編　同成社

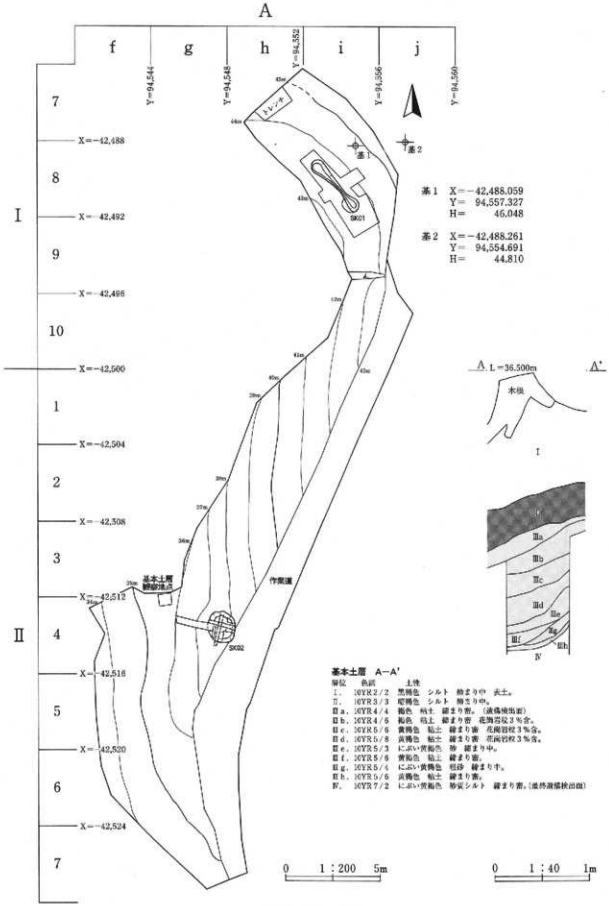


①試掘調査範囲

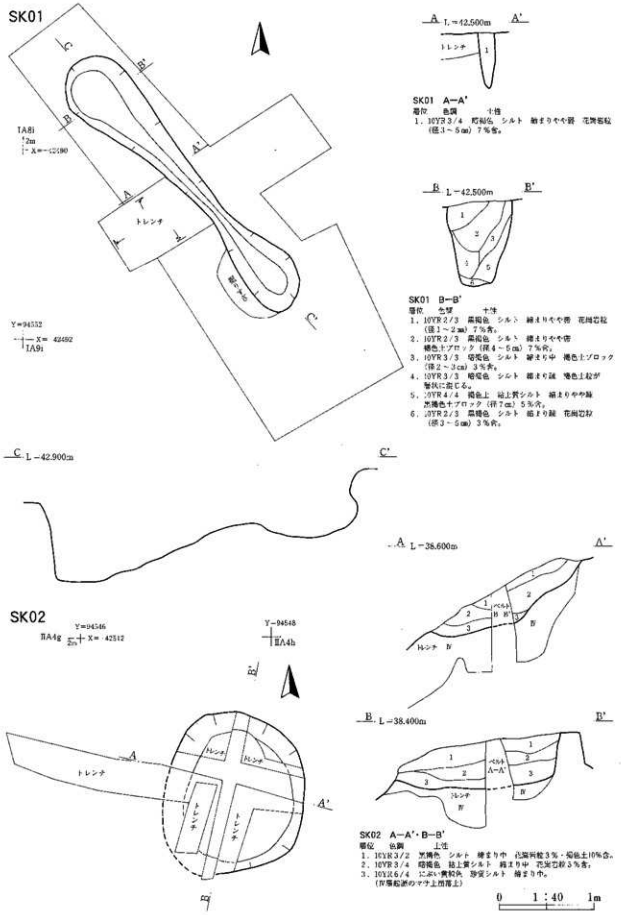


②グリッド位置図

第48図　調査区位置図


A
f
g
h
i
j
Y=94,544
Y=94,548
Y=94,552
Y=94,556
Y=94,560
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
I
II
X=−42,488
X=−42,492
X=−42,496
X=−42,500
X=−42,504
X=−42,508
X=−42,512
X=−42,516
X=−42,520
X=−42,524
トレンチ
基1
基2
SK01
SK02
基1　X=−42,488.059
Y=　94,557.327
H=　　46.048
基2　X=−42,488.261
Y=　94,554.691
H=　　44.810
A L=36.500m A'
木根
作業道
基本土層
観察地点
基本土層　A−A'
層位　色調　土性
Ⅰ.　10YR2/2　黒褐色　シルト　柚まりの　炭土。
Ⅱ.　10YR3/3　暗褐色　シルト　柚まりの。
Ⅲa.　10YR4/4　褐色　粘土　縞まり密。（遺構検出面）
Ⅲb.　10YR4/6　褐色　粘土　縞まり密　花崗岩砂3％含。
Ⅲc.　10YR5/6　黄褐色　粘土　縞まり薄　花崗岩砂3％含。
Ⅲd.　10YR5/8　黄褐色　粘土　縞まり密　花崗岩砂3％含。
Ⅲe.　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂　縞まり中。
Ⅲf.　10YR5/6　黄褐色　粘土　縞まり薄。
Ⅲg.　10YR5/4　にぶい黄褐色　粘砂　縞まり不。
Ⅲh.　10YR5/6　黄褐色　粘土　縞まり密。
Ⅳ.　10YR7/2　にぶい黄褐色　砂質シルト　縞まり密。（遺構検出面）
0　1:200　5m
0　1:40　1m

第49図　遺構配置図



第50図　陥し穴状遺構：SK01、土坑：SK02

Ⅵ 分析・鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八木沢Ⅱ遺跡は、八木沢川左岸（西岸）の山地緩斜面に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構、古代の竪穴住居跡、現代の炭窯跡等が検出されている。

今回の分析調査では、各遺構から検出された炭化材を対象として、遺構の構築年代に関する資料を得るためのAMS法（加速器質量分析法）による放射性炭素年代測定と、木材利用を明らかにするための樹種同定を実施する。また、住居跡や土坑から出土した種実遺体を対象として、植物利用を明らかにするための種実遺体同定を実施する。

1　炭化材の年代測定と樹種同定

（1）試　　料

試料は、住居跡や土坑等から出土した炭化材6点（№802, 814, 816, 821, 822, 833）である。

（2）分 析 方 法

放射性炭素年代測定

土壌や根など日的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C−AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH−2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX−Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986−2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

（3）結　　果

放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1、暦年較正結果を表2に示す。測定年代は、№802が

4,100±30BP、№814が4,270±40BP、№816が3,960±430BP、№821が4,090±30BP、№822が4,010±30BP、№833が5,170±30BPである。また、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果は、№802がcalBC2,840－2,813、№814がcalBC2,911－2,879、№816がcalBC2,466－2,398、№821がcalBC2,630－2,564、№822がcalBC2,536－2,492、№833がcalAD1,677－1,917である。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。また、14C－3は、δ13Cの値からみて海洋由来の炭素によって構成されていることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値（暦年較正プログラムのdefault値である約400年）を用い、地域による補正は考慮していない。その他の3点は、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68％の確率で存在する範囲、2σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

樹種同定

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹3種類（アサダ・クリ・ケンポナシ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成されるが、水平樹脂道とエピセリウム細胞は破損しており、痕跡が空壁として認められるのみ。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1－10細胞高。

・アサダ（*Ostrya japonica* Sarg.）　カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2－4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－3細胞幅、1－30細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3－4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－15細胞高。

・ケンポナシ属（*Hovenia*）　クロウメモドキ科

環孔材で、孔圏部は1－3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1－5細胞幅、1－40細胞高。

（4）考　　察

炭化材試料のうち、№802,814,816,821,822の5点は、補正年代が3910BP～4270BPであり、特に№802,821,822の3点は4040BP～4090BPの狭い範囲に集中する。炭化材が出土した遺構は、SI02, SI06, SK07, SK08, SN01であり、住居構築材や燃料材等に由来する可能性があるが、詳細は不明である。SI02, SI06, SK07の3点がクリ、SK08がケンポナシ属、SN01がアサダであった。いずれも冷温帯に分布する落葉広葉樹であり、クリやアサダは重硬で強度が高い材質を有する。ケンポナシ

属は、それほど重硬な木材ではなく、加工も容易であるが、狂いや割れは少なく、強度も比較的高い。

岩手県内における縄文時代中期～後期の調査例をみると、住居跡出土資料などを中心にクリが比較的多く利用される傾向がある（嶋倉,1983；パリノ・サーヴェイ株式会社,1996,2004；高橋,2000など）。また、アサダやケンポナシ属は、大日向Ⅱ遺跡や御所野遺跡でクリと共に確認された例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社,1993,1996）。特に、御所野遺跡ではクリを中心にアサダ、ケンポナシ属、コナラ節、ニレ属、カエデ属等が確認されており、本遺跡の結果とも類似する。

一方、SI03から出土した試料№833は、縄正年代が90BPであり、近現代に相当する年代を示す。樹種は針葉樹の複維管束亜属（ニヨウマツ類）であった。複維管束亜属は、針葉樹としては比較的重硬な部類に入るが、加工は容易であり、松脂を多く含むために保存性がある。炭化材の用途などは不明であるが、当該期に燃料として利用されるか薪炭材として利用するために、火を受けて炭化したことが推定される。

2　種実遺体の同定

（1）試　　料

試料は、SI－1のO－3フク上上層から出土した種実1点（№830）と、SK08の3－4層から出土した種実1点（№831）の計2点である。

（2）分 析 方 法

種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定する。分析後は、種実を容器に戻して返却する。

（3）結　　果

結果を表3に示す。№830はコナラ属（*Quercus*）の子葉に、№831はコナラ属コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*）の子葉に同定された。2点とも炭化している。以下に形態的特徴を記す。

・コナラ属コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*）　ブナ科

子葉は炭化しており、黒色。完形ならば歪な球体。縦に1周する子葉の合わせ目の線に沿って割れた半分で、長さ1.3cm、径1.1cm程度。頂部はやや尖るが、これは堅果頂部の円錐状突出部の内部を埋めていた部分であることから、成熟個体と考えられる。基部はやや平ら。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

現在の岩手県に分布するコナラ亜属で比較的大型の果実を持つ種類は、クヌギ節クヌギ、コナラ節カシワ、ミズナラ、ナラガシワと、コナラ節内の種間雑種が存在する。本遺跡から検出された子葉は、これらのいずれかに由来するものと思われるが、子葉の形態のみから種まで同定することは困難である。

・コナラ属（*Quercus*）　ブナ科

子葉は炭化しており、黒色。完形ならば卵状楕円体。縦に1周する子葉の合わせ目の線に沿って割れた半分で、長さ1.2cm、径7mm程度。頂部はやや尖るが、これは堅果頂部の円錐状突出部の内部を埋めていた部分であることから、成熟個体と考えられる。基部はやや平ら。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

上述のコナラ亜属とした比較的大型の果実を持つ種類とは区別される。ミズナラ、コナラやこれらの種間雑種のいずれかに由来するものと思われるが、子葉の形態のみから種まで同定することは困難である。

（4）考　　察

種実遺体が出土した遺構のうち、SK08については、同じ遺構から出土した炭化材を試料とした年代測定の結果、4,060±40BPの補正年代が得られている。

コナラ属は、いずれも高木になる広葉樹で、常緑性のアカガシ亜属と落葉性を主とするコナラ亜属とがある。現在の本地域では、コナラ亜属に属するクヌギ節クヌギ、コナラ節カシワ、ミズナラ、コナラやコナラ節内の種間雑種などが分布しているが、常緑性のアカガシ亜属は分布していない。また、No831がコナラ亜属である点を考慮すれば、コナラ属とした試料も落葉性のコナラ亜属の可能性が高い。

コナラ亜属の堅果は、アク抜きすれば内部の子葉が食用可能で、収量も多く長期保存可能であるため、古くから里山で保護・採取利用されており、遺跡からの出土例も多い（渡辺，1975など）。これらの可食部である子葉が遺構内から出土したことから、本遺跡でも周辺に生育していたコナラ亜属の堅果を利用していたことが推定される。各試料の出土状況が不明であるが、今回の試料はいずれも完全に炭化した状態で検出されており、何らかの理由で利用前に火を受けて炭化したことが推定される。

引用文献

林　昭三，1991．日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

石川　茂雄，1994．原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p．

伊東　隆夫，1995．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31．京都大学木質科学研究所，81－181．

伊東　隆夫，1996．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32．京都大学木質科学研究所，66－176．

伊東　隆夫，1997．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33．京都大学木質科学研究所，83－201．

伊東　隆夫，1998．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34．京都大学木質科学研究所，30－166．

伊東　隆夫，1999．日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35．京都大学木質科学研究所，47－216．

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志，2000．日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1993．花粉分析・炭化材同定・種子同定．「御所野遺跡Ⅰ　縄文時代中期の大集落跡」，一戸町教育委員会，341－355．

パリノ・サーヴェイ株式会社，1996．大日向Ⅱ遺跡　自然科学分析．「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集　国道395号線改良工事関連遺跡発掘調査　大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書　－第２次～第５次調査－　第1分冊」，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，492－521．

パリノ・サーヴェイ株式会社，2004．鑑定及び分析．「一戸町文化財調査報告書第48集　御所野遺跡Ⅱ」，一戸町教育委員会，276－287．

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（編），2006．針葉樹の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p．［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］．

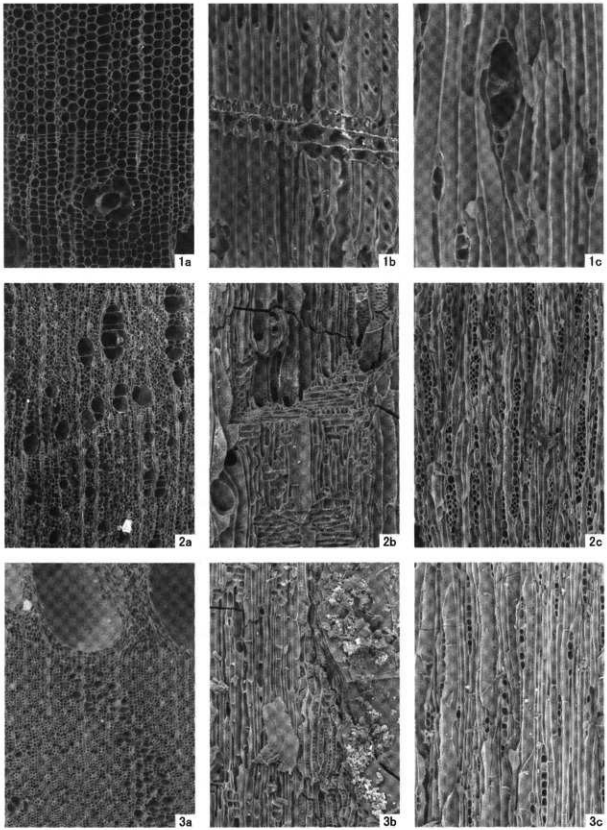
島地　謙・伊東　隆夫，1982．図説木材組織．地球社，176p．

鳴倉　巳三郎，1983．炭化木の樹種について．「一戸町文化財調査報告書第4集　一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」．建設省岩手工事事務所・一戸町教育委員会，337－340．

高橋　利彦，2000．秋浦Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種．「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第347集秋浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書　東北新幹線盛岡・八戸間鉄道施設工事関連遺跡発掘調査」，（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター，255－257．

渡辺　誠，1975．縄文時代の植物食．雄山閣出版，187p．

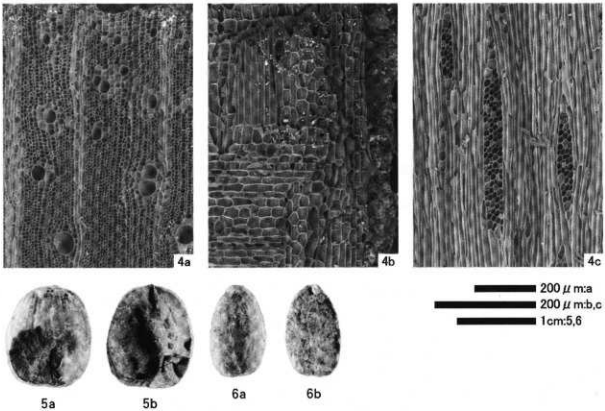
Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編），1998．広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p．［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］．



1．マツ属複維管束亜属（No.833）
2．アサダ（No.822）
3．クリ（No.814）
　a：木口　b：柾目　c：板目

200μm:2-3a
200μm:1a,2-3b,c
100μm:1b,c

第51図　炭化材



4．ケンポナシ属（No.821）　a：木口　b：柾目　c：板目
5．コナラ属コナラ亜属 子葉（No.831）
6．コナラ属 子葉（No.830）

第52図　炭化材・種実遺体

表1　放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	遺構	位置・層位	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No	Measurement No
802	SI02	北西覆土3層	炭化材No.2	炭化材	クリ	4,090±40	−25.61±0.49	4,100±30	9821－1	IAAA−71389
814	SI06	覆土3層	炭化材No.2	炭化材	クリ	4,270±40	−25.05±0.49	4,270±40	9821－2	IAAA−71390
816	SK07	北半覆土17層	炭化材No.1	炭化材	クリ	3,910±30	−28.36±0.60	3,960±30	9821－3	IAAA−71391
821	SK08	5層	炭化材	炭化材	ケンポナシ属	4,060±40	−26.73±0.66	4,090±30	9821－4	IAAA−71392
822	SK01	覆土最上上	炭化材	炭化材	アサダ	4,040±30	−22.97±0.54	4,010±30	9821－5	IAAA−71393
833	SI03	覆土1層	炭化材	炭化材	マツ属複維管束亜属	90±30	−29.66±0.53	170±30	9821－6	IAAA−71394

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）暦年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代 (cal)	相対比	Code No
802	4,092±34	σ	cal BC 2,847 − cal BC 2,845 cal BP 4,797 − 4,795	0.009	9821−1
			cal BC 2,840 − cal BC 2,813 cal BP 4,790 − 4,763	0.197	
			cal BC 2,692 − cal BC 2,690 cal BP 4,642 − 4,640	0.004	
			cal BC 2,678 − cal BC 2,575 cal BP 4,628 − 4,525	0.789	
		2σ	cal BC 2,863 − cal BC 2,806 cal BP 4,813 − 4,756	0.208	
			cal BC 2,579 − cal BC 2,717 cal BP 4,529 − 4,667	0.093	
			cal BC 2,709 − cal BC 2,566 cal BP 4,659 − 4,516	0.654	
			cal BC 2,523 − cal BC 2,496 cal BP 4,473 − 4,446	0.045	
814	4,268±37	σ	cal BC 2,911 − cal BC 2,879 cal BP 4,861 − 4,829	1.000	9821−2
		2σ	cal BC 3,009 − cal BC 2,983 cal BP 4,959 − 4,933	0.024	
			cal BC 2,935 − cal BC 2,860 cal BP 4,885 − 4,810	0.854	
			cal BC 2,803 − cal BC 2,756 cal BP 4,753 − 4,706	0.106	
			cal BC 2,720 − cal BC 2,704 cal BP 4,670 − 4,654	0.015	
816	3,906±33	σ	cal BC 2,466 − cal BC 2,398 cal BP 4,416 − 4,348	0.645	9821−3
			cal BC 2,384 − cal BC 2,346 cal BP 4,334 − 4,296	0.355	
		2σ	cal BC 2,473 − cal BC 2,293 cal BP 4,423 − 4,243	1.000	
821	4,057±35	σ	cal BC 2,831 − cal BC 2,821 cal BP 4,781 − 4,771	0.063	9821−4
			cal BC 2,630 − cal BC 2,564 cal BP 4,580 − 4,514	0.612	
			cal BC 2,533 − cal BC 2,494 cal BP 4,483 − 4,444	0.325	
		2σ	cal BC 2,848 − cal BC 2,813 cal BP 4,798 − 4,763	0.086	
			cal BC 2,471 − cal BC 2,732 cal BP 4,421 − 4,682	0.008	
			cal BC 2,693 − cal BC 2,688 cal BP 4,643 − 4,638	0.004	
			cal BC 2,679 − cal BC 2,475 cal BP 4,629 − 4,425	0.902	
822	4,044±32	σ	cal BC 2,620 − cal BC 2,603 cal BP 4,570 − 4,553	0.136	9821−5
			cal BC 2,601 − cal BC 2,561 cal BP 4,551 − 4,511	0.359	
			cal BC 2,536 − cal BC 2,492 cal BP 4,486 − 4,442	0.505	
		2σ	cal BC 2,834 − cal BC 2,818 cal BP 4,784 − 4,768	0.038	
			cal BC 2,663 − cal BC 2,647 cal BP 4,613 − 4,597	0.025	
			cal BC 2,636 − cal BC 2,474 cal BP 4,586 − 4,424	0.937	
833	89±28	σ	cal AD 1,696 − cal AD 1,725 cal BP 254 − 225	0.306	9821−6
			cal AD 1,814 − cal AD 1,835 cal BP 136 − 115	0.218	
			cal AD 1,846 − cal AD 1,850 cal BP 104 − 100	0.041	
			cal AD 1,877 − cal AD 1,917 cal BP 73 − 33	0.428	
			cal AD 1,952 − cal AD 1,953 cal BP −2 − −3	0.007	
		2σ	cal AD 1,688 − cal AD 1,730 cal BP 262 − 220	0.269	
			cal AD 1,809 − cal AD 1,926 cal BP 141 − 24	0.725	
			cal AD 1,951 − cal AD 1,954 cal BP −1 − −4	0.005	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986−2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表3 種実同定結果

No.	遺構名	層位	分類群	部位	状態
830	SI01	Q3 腐植土層	コナラ属	子葉	破片（半分）炭化
831	SK08	3～4層	コナラ属コナラ亜属	子葉	破片（半分）炭化

Ⅶ 総　　括

ここでは、八木沢Ⅱ遺跡の調査成果について時代ごとに概観し、総括する。八木沢ラントノ沢Ⅱ遺跡の調査成果については、第Ⅴ章（P96～97）を参照されたい。

1 遺　　構

（1）縄　　文

縄文時代の遺構として、竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構2棟、陥し穴状遺構6基、土坑（貯蔵穴）7基、土器埋設遺構2基などが検出された。

a　竪穴住居跡・竪穴状遺構

4棟の竪穴住居跡及び2棟の竪穴状遺構は、いずれも調査区北端から検出された。標高87m前後の尾根上の緩斜面を利用して築かれており、平面形は円形基調と推測される。柱穴の配置は不規則なものが多く、周溝は伴っていない。炉はSI01・02が地床炉、SI03が石囲炉である。時期は、出土遺物からSI01・02は中期末葉、SI03・06は中期中葉、SKI01・02は中期中葉から後葉と考えられる。遺構間の重複が多いが、やせ尾根上で限られた緩傾斜を意図的に選んでいるために同地点に繰り返し構築されたと考えられる。

b　貯蔵穴

貯蔵穴とみられる定形的な土坑7基が、尾根上で住居跡と近接もしくは重複して検出された。SI01の炉を切って構築されたSK07と、SI01に切られるSK08は、開口部より底面が広い断面フラスコ状を呈する形状であるが、その他は壁がほぼ直立して立ち上がる断面がビーカー状を呈している。底部に溝などの付属施設は伴わない。時期は、出土遺物が少ないために得られた情報が少ないが、遺構の重複関係やC14年代測定の分析結果などから、住居跡とほぼ同じ中期中葉から末葉に収まるものと考えられる。

c　土器埋設遺構

尾根上から土器埋設遺構が2基検出された。SZ02は正立、SZ04は斜位に土器が埋設されていた。SZ02はSI01を切って構築されており、時期的には中期末葉以降と考えられる。SZ04は遺構の切り合い関係は無いが、埋設土器に使われた土器から、時期は中期後葉以降の可能性があるものと推測される。

d　陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は6基検出された。そのうちの5基がⅣ～Ⅴ・D～Eグリッドの谷部である平坦面から検出された。形状は溝状と楕円形のものがあり、底面に副穴を持つものと持たないものがある。

（八重畑）

（2）古　　代

古代の竪穴住居跡が2棟検出された。ここでは、竪穴住居跡の特徴についてまとめる。

竪穴住居跡は、北尾根の裾に当たる標高60m前後の緩い東斜面に構築されている。平面形・規模は、一辺3.19～3.71mほどで、方形基調と推測される。壁・床面は、Ⅳ層面を掘り込んで構築されている。覆土は、自然堆積の様相を呈しているが、詳細は不明である。柱穴は確認できておらず、配置も不明である。カマドは、斜面上方の西側に造られ、一辺の中央付近より一方の隅に偏った位置に設けられている。煙道は刳り貫き式である。時期は、出土遺物から平安時代9世紀中頃と考えられる。

（3）現　　代

現代の遺構として、炭窯跡２基と土取り穴が確認された。ここでは炭窯跡の特徴についてまとめる。

２基の炭窯は、調査区南端の湿没沢に向かう南向きの標高45m前後の緩斜面を利用して、少し場所を移動して構築されている。炭窯の構築方法は、地山を掘り込んで窯の本体にあたる部分を構築し、排煙口を北側の斜面上方、焚口を南側の斜面下方に設けている。平面形は焚口側がすぼまる長い卵形である。規模は、SW01炭窯跡は、長軸285cm×短軸201cm、床面積は約4.465㎡、SW02炭窯跡は、長軸194cm×短軸147cm、床面積は約2.162㎡、SW02炭窯からSW01炭窯に移行する際に床面積が約２倍の大きさに造り替えられている。排煙口は、傾斜などの工夫はみられず、床面と同じ高さで設けられており、窯との間仕切りには鉄板・レンガなどが用いられている。煙道の上部には、土管が用いられていたと推測される。排水・防湿・保温などを目的とした炭窯に伴う周溝や下部に板材を敷くなどの付属施設は確認できていない。

今回、調査したSW01・02炭窯跡は、黒炭を焼いた炭窯と思われる。生産された炭の量は、床面積から判断して、一俵約15kgで20俵前後で、ナラ炭をつくったものと推定される。聞き取り調査から得られた炭窯が機能していた1950年代という時期から類推できる炭窯の型式は「岩手窯」又は「岩手１号窯」である。今回調査された炭窯跡は、いずれかの型式の炭窯と考えられる（註１）。　　（阿部）

２　遺　　物

（1）縄　　文

土器は、大コンテナで４箱、総重量53,155.5ｇの縄文土器が出土している。

出土地点の分布をみると、遺構内では、竪穴住居跡・竪穴状遺構から9,495.3ｇ（18％）、土坑から3,243.3ｇ（６％）、遺構外では、ⅢBグリッド（尾根上・遺構外）から19,199.4ｇ（36％）、ⅣBグリッド（谷頭・遺構外）から6,024.5ｇ（11％）で、出土した縄文土器の多くは、竪穴住居跡や貯蔵穴などの遺構が集中する４区尾根上とその北斜面・南斜面（３区谷頭を含む）から出土している。時期は、主に中期中葉から末葉に収まる。特に末葉に比定される大木10式土器が、全体の約３分の１を占める。これらの出土土器は、覆土中からの破片資料が多く、住居の埋没する過程のなかで廃棄もしくは流れ込んだものと考えられる。

土製品は、きのこ形土製品、棒状の土製品が出土している。出土地点から中期と考えられる。

石器は、掲載した44点中22点（50％）が磨石で、SI06を除くすべての竪穴住居跡・竪穴状遺構から出土している。石材は花崗閃緑岩と安山岩が多く用いられている。また、石鏃・石錐などの剥片石器では、頁岩が多く使用されている。石製品は、砂岩でつくられた大形の石棒が出土している。

（八重畑）

（2）古　　代

９世紀中ごろの土師器がSI05から出土している。器種は甕・坏である。

（3）現　　代

炭窯の構築に用いられた遺物として、鉄板・レンガ・土管、他にビール瓶、船釘が確認された。

（阿部）

3　ま　と　め

八木沢Ⅱ遺跡は、八木沢川に北西側から合流する支流によって形成された低地と、その南側に位置する山地上に立地する。遺跡全体は、尾根部と谷部が連続する地形で、北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。標高49～90mで、遺跡の現況は山林・畑地である。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡４棟、古代の竪穴住居跡２棟、竪穴状遺構２棟、陥し穴状遺構６基、土坑24基、焼土遺構２基、土器埋設遺構２基、溝跡７条、現代の炭窯跡２基である。

縄文時代の遺構は、北端の尾根上の先端部に立地する。特に竪穴住居跡と貯蔵穴と考えられる大形の土坑は、標高85m以上の尾根上の平坦面から南斜面につくられている。尾根の南側と北側が埋没沢となって落ち込んでおり、南側は、現在も湧水が確認できる。水の確保が比較的容易で、日当たりの良い高台に占地したものであろう。現況から判断して、居住域は、調査区域外の西側の尾根伝いに広がる可能性がある。陥し穴状遺構と占地が異なることも注意される。古代の竪穴住居跡は、北側の尾根の裾部に占地している。縄文時代より占地場所が下ることの理由は、環境の変化と生業との関わりがあるのかもしれない。今回の調査では明らかではないが、古代においては、水田や畑地など、より広い生業の場に隣接して集落が設けられていた可能性がある。さらに、現代における人々の生活域は八木沢川沿いに移動しているが、当地では炭窯が設けられて生業が営まれていたようである。

出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、土製品、石器、石製品、鉄製品、陶磁器、ガラス製品、炭化種実、炭化材などが出土している。総量は大コンテナ（30×40×30cm）５箱である。

縄文土器は、前期・中期のものが出土しており、中期末葉が主体である。土師器は９世紀代である。

土製品は、きのこ形土製品、棒状の土製品など縄文時代のものが出土している。

石器は、石鏃・石錐・楔形石器・不定形石器などの剥片石器、磨石・凹石・台石などの礫石器が出土している。石製品は、石棒が出土している。

陶磁器は、18世紀代・19世紀代のものが出土している。鉄製品は、板状の製品が出土している。炭窯に関連する現代のものである。ガラス製品は、ビール瓶が出土している。

おわりに

今回の調査で、八木沢Ⅱ遺跡は、縄文時代の集落跡と狩り場、古代の集落跡であることが明らかになった。遺構・遺物とも量的にそれほど多くはないが、時代により遺構の占地が異なるなど貴重な資料を得ることができた。今後は、周辺遺跡の調査成果と合わせて、当該地域の遺構の立地について、さらに検討していくことが課題となる。（阿部）

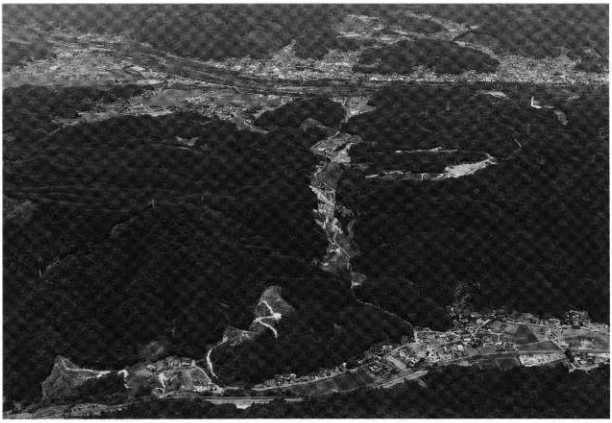
註

(1)「岩手1号窯」は、1950年佐々木半助によって考案された炭窯で、「岩手窯」は、昭和31年に協会の指導窯として考案された炭窯である。「岩手窯」の特徴は、窯底径は、「奥行きを定め後部は奥行きの7割5部の大巾、前部は5割の小巾を描き、この点を通じて両巾に接する円曲線を描いて、卵型とする。」（岩手県木炭協会　1991『岩手窯の業』）とされている。この窯底径の比率（規径：長径＝0.75）は、SW01（201÷285＝0.70）・SW02（147÷194＝0.75）の窯底径の比率とほぼ一致する。よって形状からSW01・02炭窯跡は、「岩手窯」の可能性が高い。

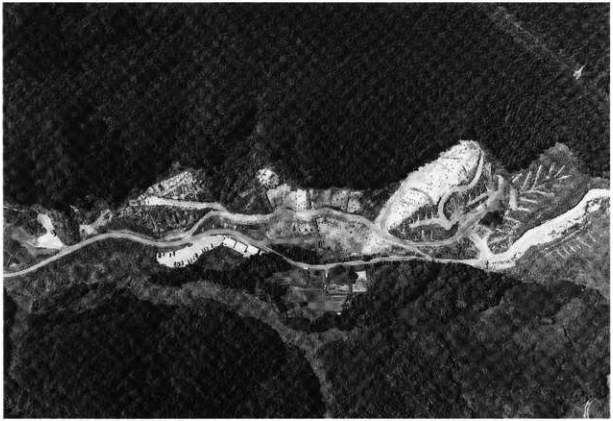
引用・参考文献

畠山　剛　2003『炭焼きの二十世紀―書置きとしての歴史から未来へ』彩流社

写 真 図 版



調査区　遠景（南から）



調査区　全景（東から）

写真図版1　遺跡(1)：調査区全景

遺跡　現況（西から）

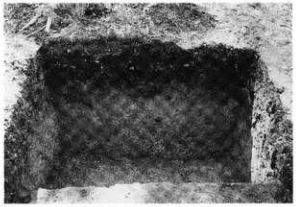
遺跡　現況（南から）

T263～272　平面（北から）

T255・272～279　平面（東から）

4区尾根部　全景（南から）

3区谷部　全景（北から）



1区尾根部基本土層②　断面（東から）

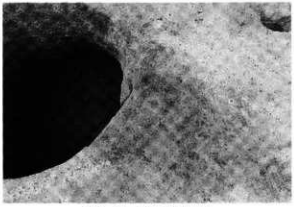
4区尾根部基本土層⑥　断面（東から）

写真図版2　遺跡(2)：調査前現況・基本土層

SI01　平面（東から）

SI01　断面　A－A′（東から）

SI01　断面　B－B′（南から）



SI01－炉　平面（南から）

SI01－炉　断面K－K′（南から）

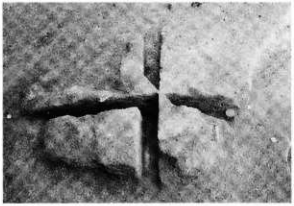
写真図版3　竪穴住居跡(1)：SI01

SI02　平面（東から）

SI02　断面A－A′（東から）

SI02　断面B－B′（北から）

SI02　炭化材出土状況（西から）



SI02－炉　断面H－H′（東から）

写真図版4　竪穴住居跡(2)：SI02

SI03　平面（東から）

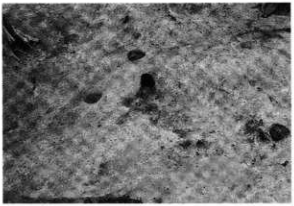
SI03　断面A－A′（南から）

SI03　断面B－B′（西から）

SI03－石囲炉　断面（東から）

4区　作業風景

写真図版5　竪穴住居跡(3)：SI03



SI04　平面（東から）

SI04ーカマド　平面（礫除去後）（東から）

SI04ーカマド　平面（東から）

SI04ーカマド　断面F－F′①（東から）

SI04ー煙出　断面G－G′（南から）

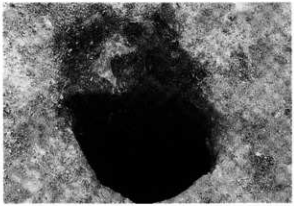
SI04ーカマド煙道　断面G－G′（南から）

SI05　断面A－A′（東から）

SI05　断面B－B′（南から）

写真図版6　竪穴住居跡(4)：SI04・05(1)

SI05　平面（東から）



SI05ーカマド煙出　断面E－E′（南から）

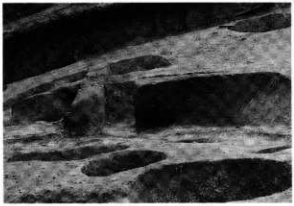
SI05ーカマド煙道　断面E－E′（南から）

SI05ーカマド　断面D－D′①（東から）

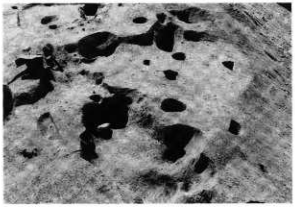
SI05ーカマド　断面D－D′②（東から）

写真図版７　竪穴住居跡(5)：SI05(2)

SI06　平面（東から）

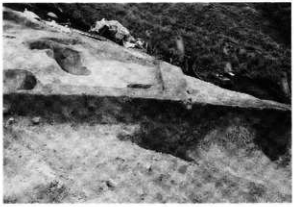


SI06　断面A－A′（東から）



SKI01　平面（東から）

SKI01　断面A－A′（東から）



SKI01　断面B－B′（南から）

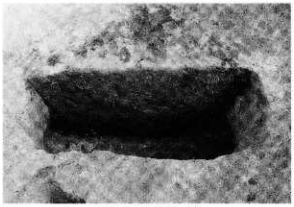
SKI02　平面（東から）

SKI02　断面A－A′（南から）

SKI02　断面B－B′（東から）

写真図版8　竪穴住居跡(6)：SI06、竪穴状遺構：SKI01・02

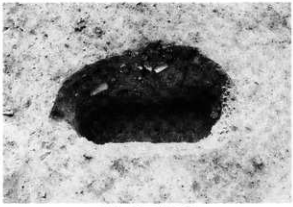
SK02　平面（北から）



SK02　断面（北から）

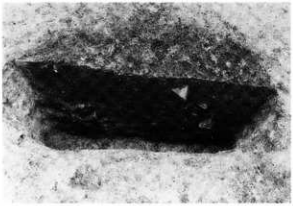
SK14　平面（南から）

SK14　断面（南から）



SK20　平面（東から）

SK14　作業風景（南から）

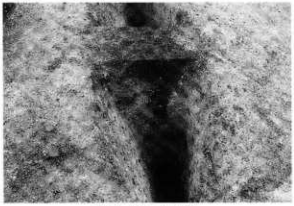


SK20　断面A－A′（東から）

SK20－副穴　断面B－B′（南から）

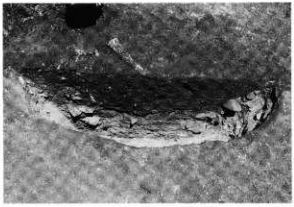
写真図版9　陥し穴状遺構(1)：SK02・14・20

SK22　平面（南から）



SK22　断面（南から）

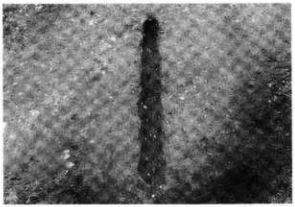
SK25　平面（南から）



SK25　断面A－A′（南から）

SK25－副穴　断面B－B′（南から）

現地説明会の様子

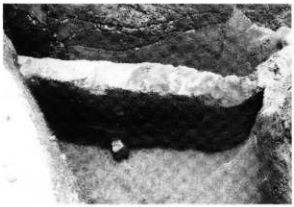


SK30　平面（東から）

SK30　断面（東から）

写真図版10　陥し穴状遺構(2)：SK22・25・30

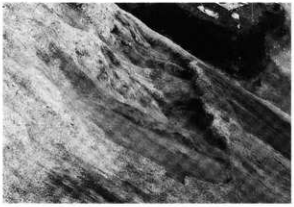
SK01　平面（南から）



SK01　断面（南から）

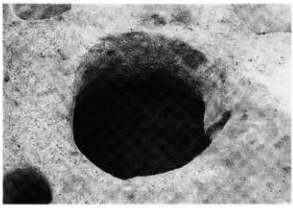
SK03　平面（南から）

SK03　断面（東から）

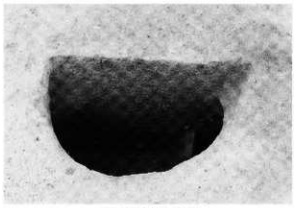


SK04・05・06　平面（南から）

SK04・05・06　断面（東から）



SK07　平面（南から）

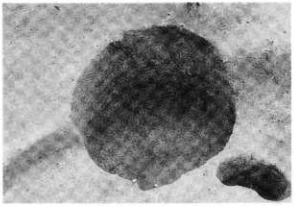


SK07　断面（南から）

写真図版11　土坑(1)：SK01・03～07(1)

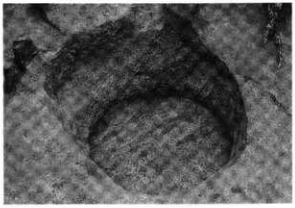
SK07　土器（P１：No.35）出土状況（南から）

SK07　土器（P２：No.34）出土状況（東から）

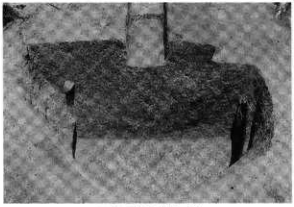


SK08　平面（東から）

SK08　断面（南東から）

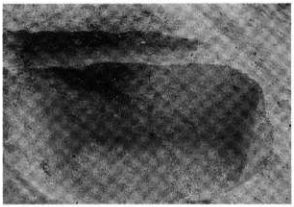


SK09　平面（南から）



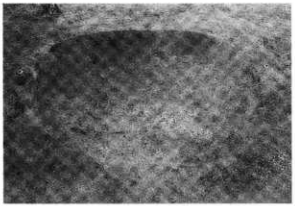
SK09　断面（南から）

SK10　平面（南から）

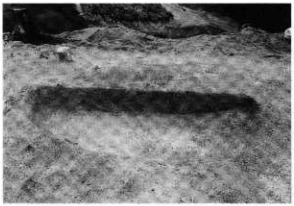


SK10　断面（東から）

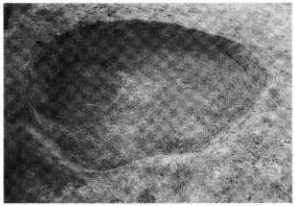
写真図版12　土坑(2)：SK07(2)・08～10



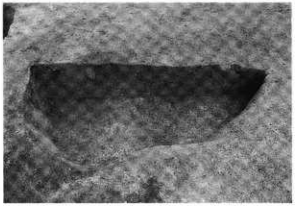
SK11　平面（南から）



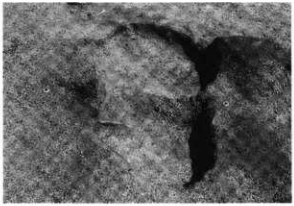
SK11　断面（南から）



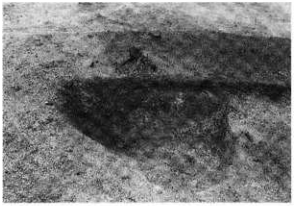
SK12　平面（南から）



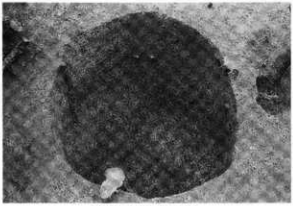
SK12　断面（南から）



SK13　平面（南から）



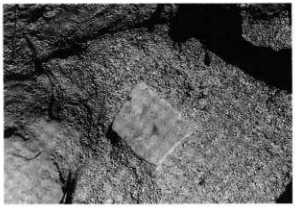
SK13　断面（南から）



SK15　平面（南から）

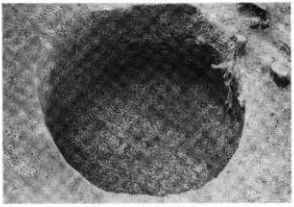
SK15　断面（南から）

写真図版13　土坑(3)：SK11～13・15(1)

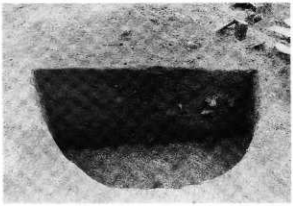


SK15　石器（No.187）出土状況（南から）

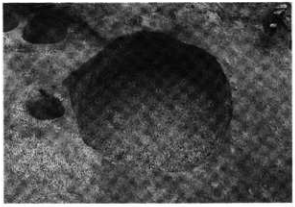
4区　全景



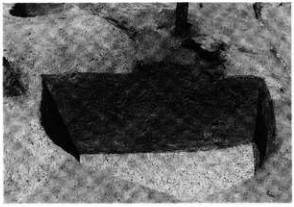
SK16　平面（南から）



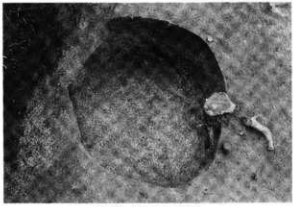
SK16　断面（南から）



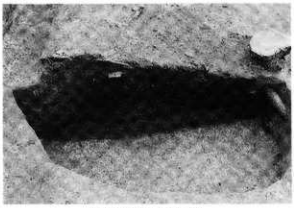
SK17　平面（南から）



SK17　断面（南から）

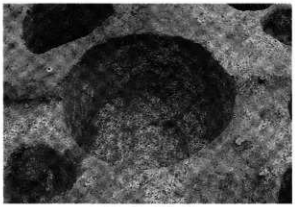


SK18　平面（南から）

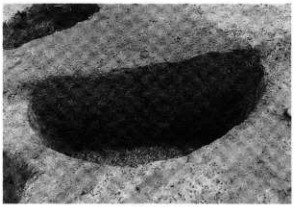


SK18　断面（南から）

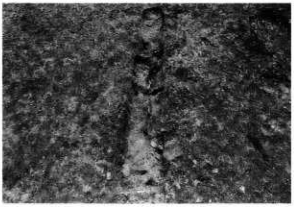
写真図版14　土坑(4)：SK15(2)・16～18



SK19　平面（東から）

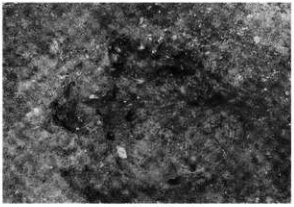


SK19　断面（東から）



SK21　平面（東から）

SK21　断面（東から）



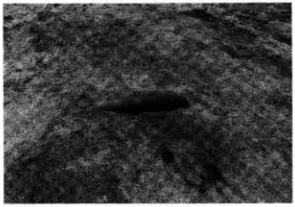
SK23　平面（南から）

SK23　断面（南から）

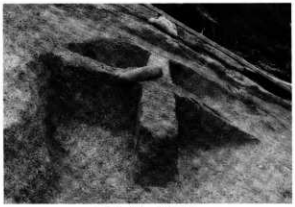
SK24　平面（南から）

SK24　断面（南から）

写真図版15　土坑(5)：SK19・21・23・24

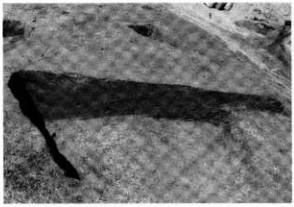


SK26　平面（北から）

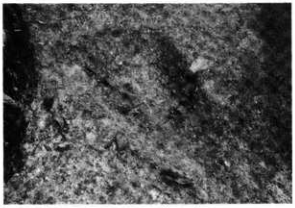


SK26　断面（西から）

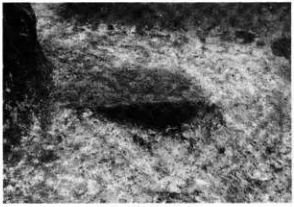
SK27　平面（南から）



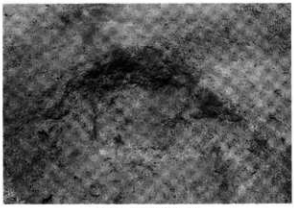
SK27　断面（東から）



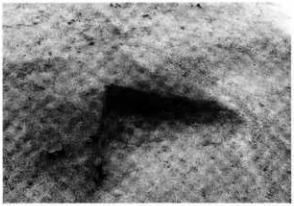
SK28　平面（東から）



SK28　断面（東から）



SK29　平面（南から）

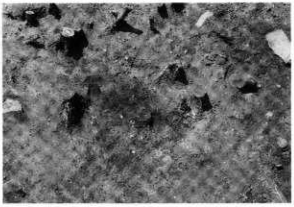


SK29　断面（南から）

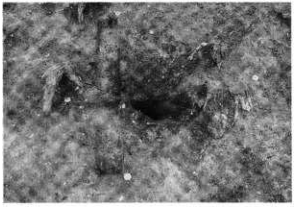
写真図版16　土坑(6)：SK26～29

SN01　平面（東から）

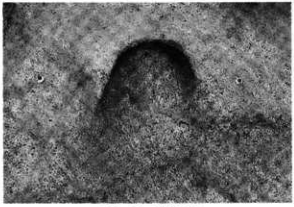
SN01　断面（南から）



SN02　平面（東から）

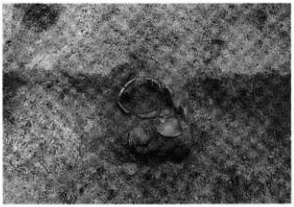


SN02　断面（南から）



SZ02　平面（東から）

SZ02　断面（東から）



SZ04　平面（東から）

SZ04　断面（南から）

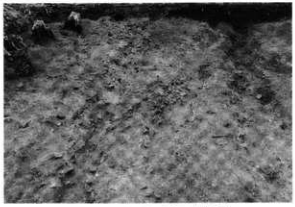
写真図版17　焼土遺構：SN01・02、土器埋設遺構：SZ02・04

SD01　平面（東から）

SD01　平面（東から）

SD01　断面A－A′（東から）

SD04・05　作業風景（東から）



SD02・03・04・05　平面（東から）

SD02・03・04・05　平面（東から）

SD03　断面B－B′（東から）

SD04・05　断面B－B′（東から）

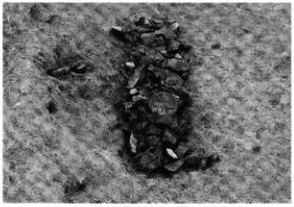
写真図版18　溝跡(1)：SD01～05

SD09　平面（南から）

SD09　断面A－A′（東から）

SD09　断面C－C′（南から）

SD09　断面D－D′（南から）



SD09　礫出土状況（南から）

2区東側　平面（南から）

現地説明会の様子

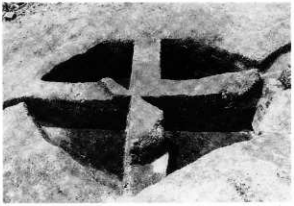
現地説明会の様子

写真図版19　溝跡(2)：SD09

SW01　平面（南から）

SW01ー煙道　側面（南から）

SW01　断面A－A′①（南から）



SW01　断面B－B′①（東から）

SW01ー煙道　断面（東から）

SW01ー煙道　平面（東から）

SW01　断面A－A′②（南から）

SW01　断面B－B′②（東から）

写真図版20　炭窯跡(1)：SW01(1)

SW01　炭化材出土状況（南から）

SW01　作業風景（南東から）

SW02　平面（南東から）

SW02－煙道部　平面（南東から）

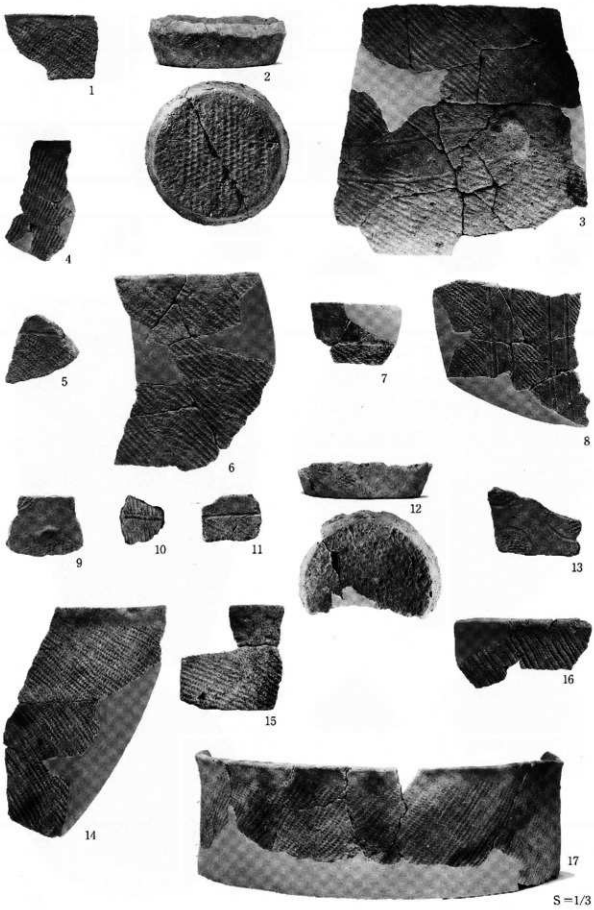
SW02　断面A－A′①（北東から）

SW02　断面B－B′①（南東から）

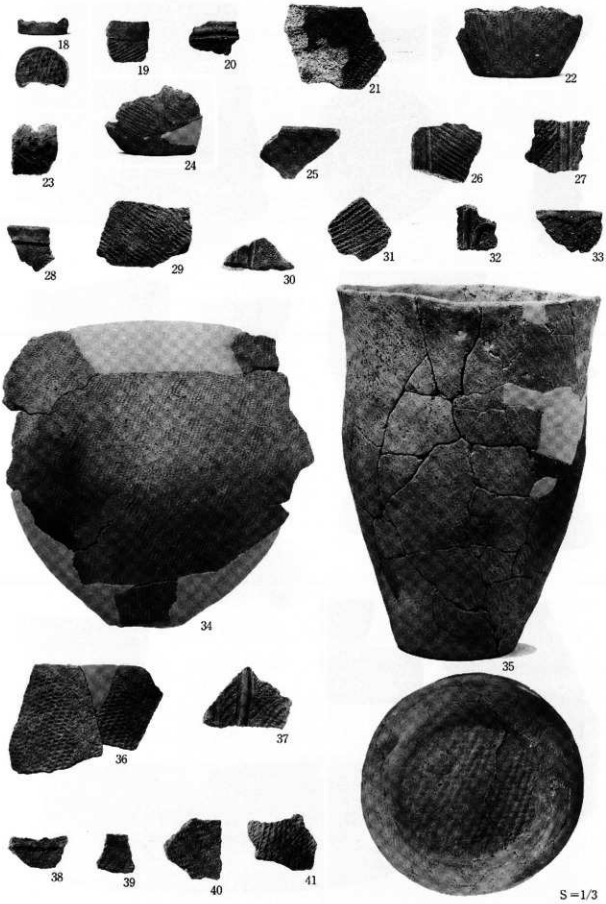
SW02　断面B－B′②（南東から）

SW02－煙道部　平面（南東から）

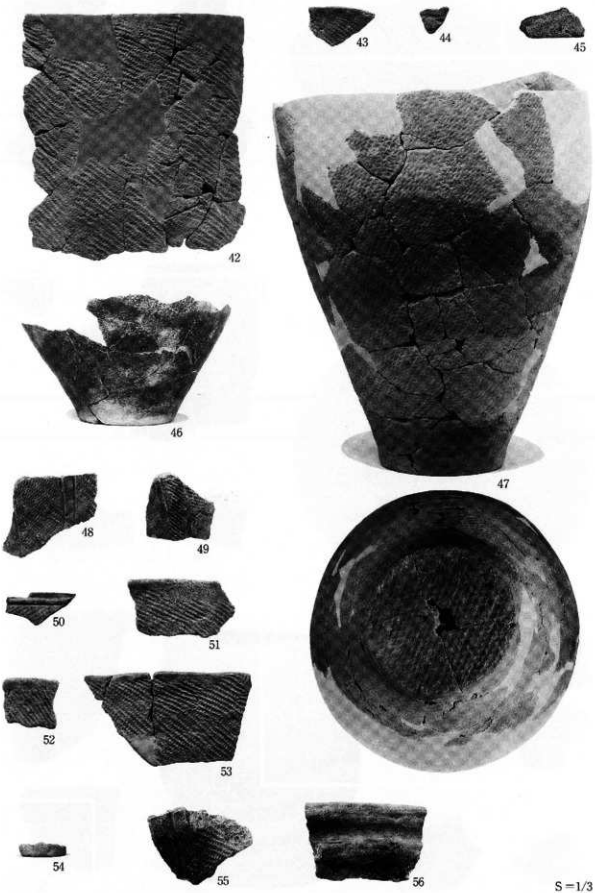
写真図版21　炭窯跡(2)：SW01(2)・02



写真図版22　土器(1)

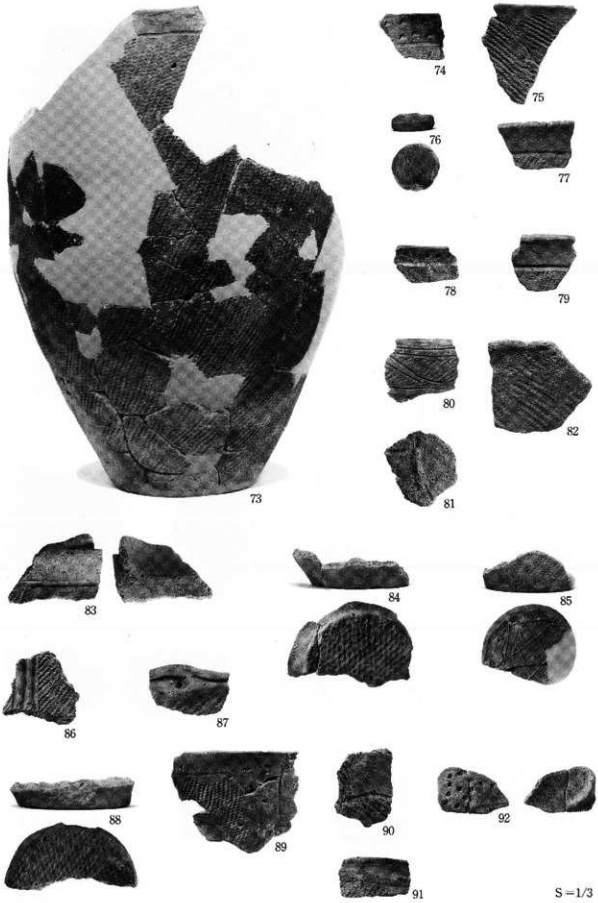

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
S＝1/3

写真図版23　土器(2)

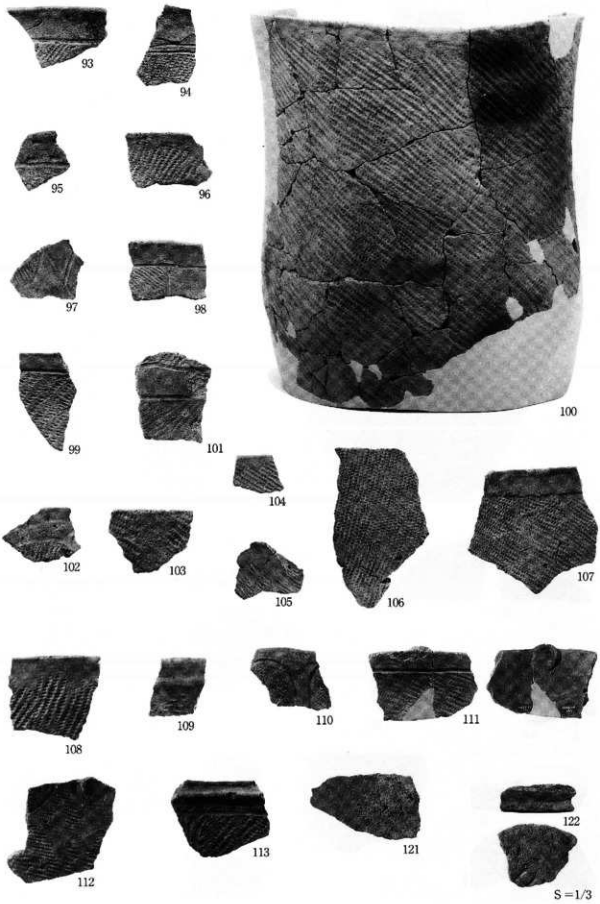


写真図版24　土器(3)

写真図版25　土器(4)



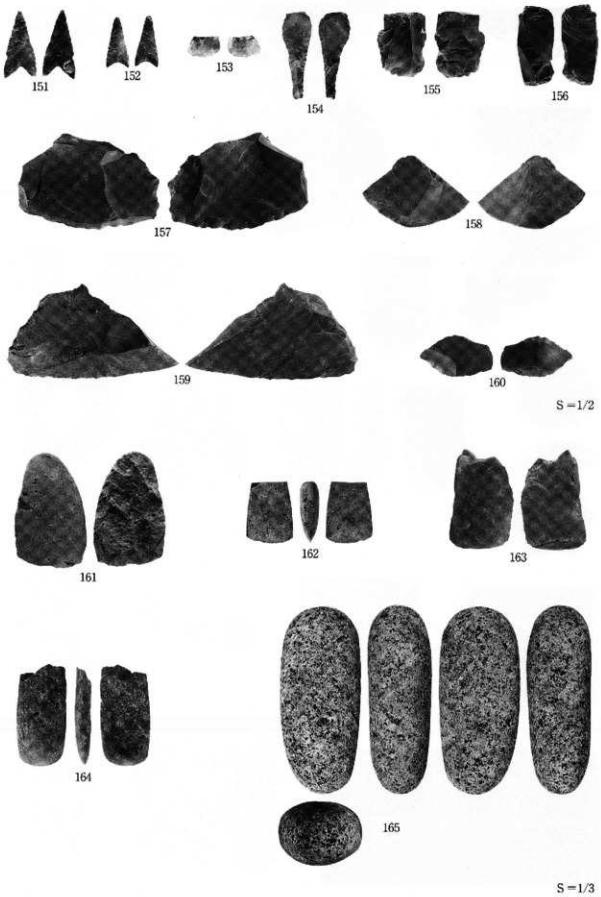
写真図版26　土器(5)


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
121
122
S＝1/3

写真図版27　土器(6)

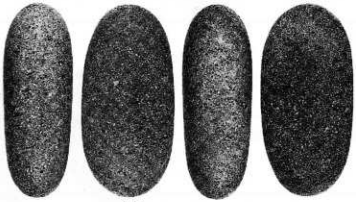
S＝1/3　S＝1/2：141･143　S＝1/6：148

写真図版28　土器(7)・土製品

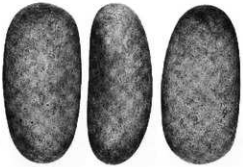

151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
S＝1/2
161
162
163
164
165
S＝1/3

写真図版29　石器(1)

166

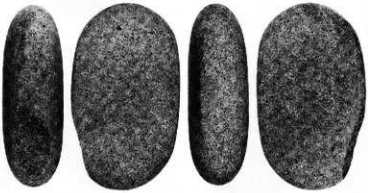


167



168

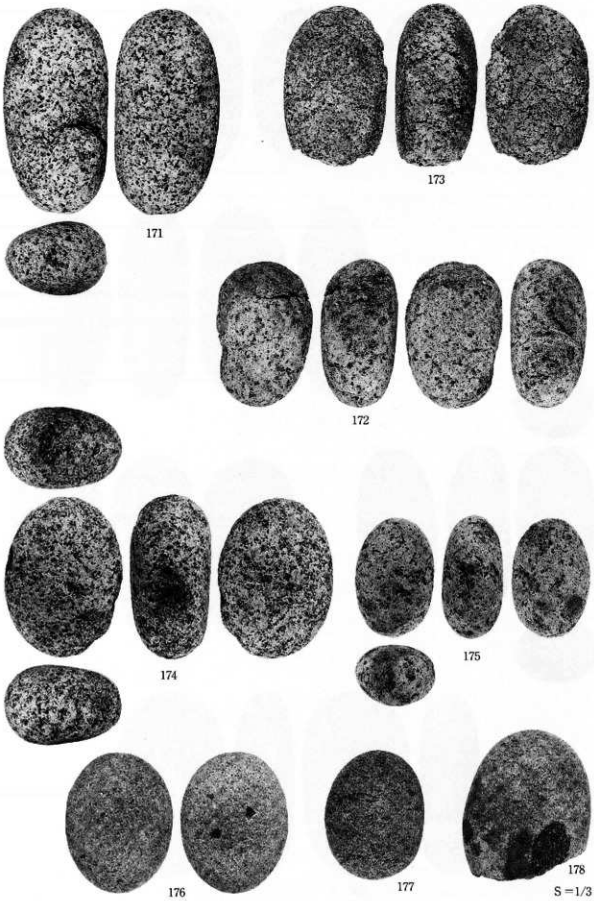
170



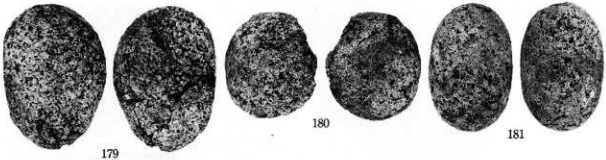
169

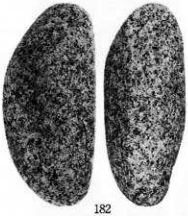
S＝1/3

写真図版30　石器(2)



写真図版31　石器(3)


179 180 181


182


183


184


185


186


187


188


189


190


191

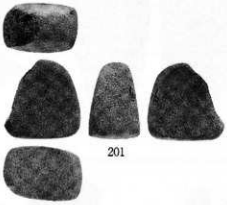
S＝1/3

写真図版32　石器(4)

192

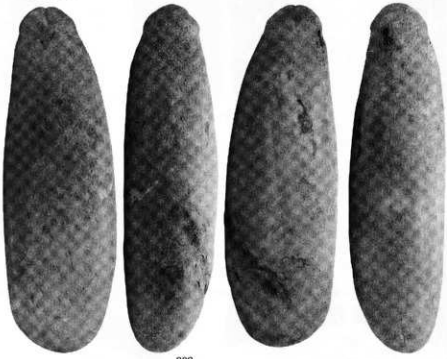
193

194



201

敲打痕拡大



202

S＝1/3　S＝1/2：201　S＝1/6：202

写真図版33　石器(5)・石製品

S＝1/3　S＝1/4：231･232　S＝1/1：251･252

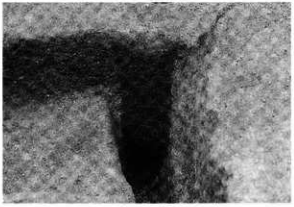
写真図版34　陶磁器・鉄製品・ガラス製品・炭化種実

調査区の全景（南から）

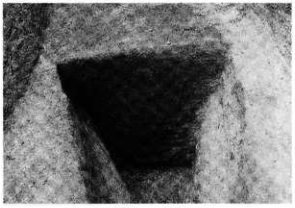
調査前の近景（北から）

調査後の近景（南から）

SK01　平面（南から）



SK01　断面A－A′（南から）



SK01　断面B－B′（南から）

SK02　平面（南から）

SK02　断面A－A′（南から）

写真図版35　遺跡：調査区全景、陥し穴状遺構：SK01、土坑：SK02

報告書抄録

ふりがな	やぎさわ2いせき・やぎさわらんとのさわ1いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第328集
編著者名	阿部勝則・八重畑ちか子
編集機関	財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL (019) 638-9001
発行年月日	2008年12月26日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
八木沢Ⅱ遺跡	岩手県宮古市字八木沢第3地割字中村129ほか	03202	LG43-0205	39度37分15秒	141度55分42秒	2007.04.12～2007.08.10	7,500㎡	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査
八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡	岩手県宮古市字八木沢第8地割字駒込7-1ほか	03202	LG43-0279	39度36分53秒	141度56分51秒	2007.10.09～2007.10.25	700㎡	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八木沢Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代 古代 現代	竪穴住居跡 4棟 竪穴状遺構 2棟 陥し穴状遺構 6基 土坑 24基 焼土遺構 2基 竪穴住居跡 2棟 炭窯跡 2基	縄文土器　大コンテナ4箱 土製品 8点 石器 44点 石製品 2点 陶磁器 14点 鉄製品 4点	縄文時代中期中葉～末葉の集落跡
八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡	狩場跡	縄文時代	陥し穴状遺構 1基 土坑 1基	なし	

要約

八木沢Ⅱ遺跡は、連続する尾根部と谷部、また八木沢川の支流が形成した低地面からなる。縄文時代は、調査区北側の尾根上に竪穴住居跡や貯蔵穴を構築して居住の場とし、低地には陥し穴をつくっていた。古代には緩斜面部に竪穴住居跡が構築されており、調査区南側の尾根の中腹では、現代の炭窯跡が検出された。この遺跡では、縄文時代から現代まで、多岐にわたる時期の遺構が確認され、時期により土地利用が異なることが明らかとなった。

八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡は、調査区が尾根部から谷部に向かう急斜面上に位置し、縄文時代と推定される陥し穴状遺構1基、時期不明の土坑1基が検出された。当該地点は、縄文時代には、主に狩猟の場として利用されていたものと推測される。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第528集

八木沢Ⅱ遺跡・八木沢ラントノ沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年12月22日
発　行　平成20年12月26日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027－0029　岩手県宮古市藤の川4番1号
電話（0193）71－1716
(財)岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電話（019）654－2235

印　刷　小松総合印刷株式会社
〒020－0827　岩手県盛岡市鉈屋町15－4
電話（019）624－1374